

四国縦貫自動車道建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告

10

柿谷遺跡  
菖蒲谷西山B遺跡  
山田古墳群A

1994

徳島県教育委員会  
財団法人 徳島県埋蔵文化財センター  
日本道路公団

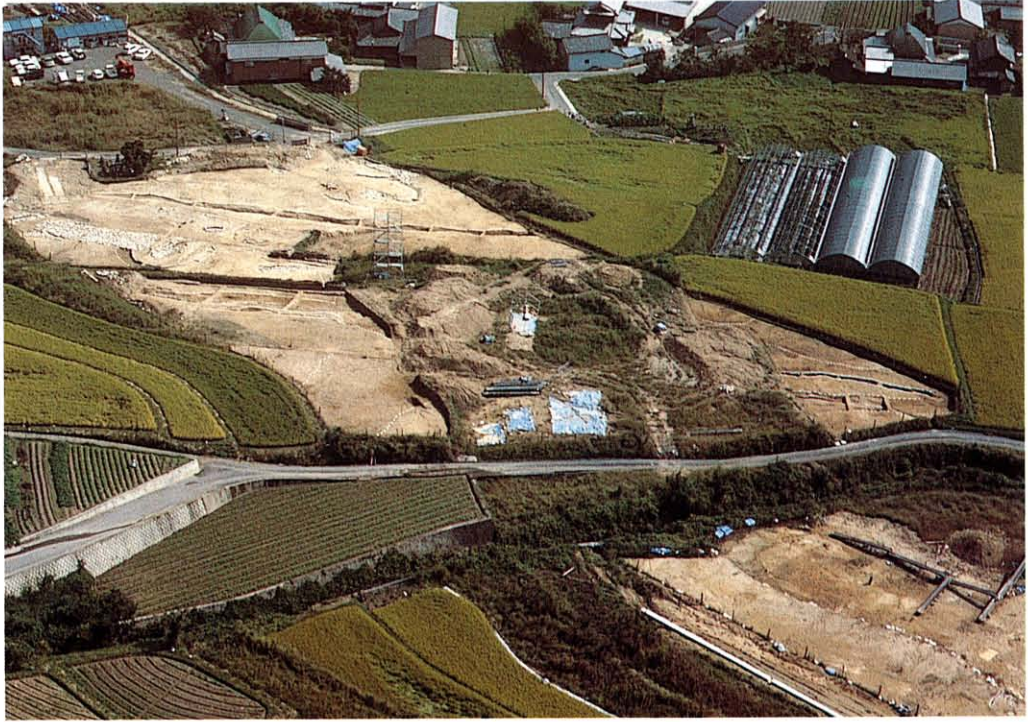
四国縦貫自動車道建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告

10

柿谷遺跡  
菖蒲谷西山B遺跡  
山田古墳群A

1994

徳島県教育委員会  
財団法人 徳島県埋蔵文化財センター  
日本道路公団



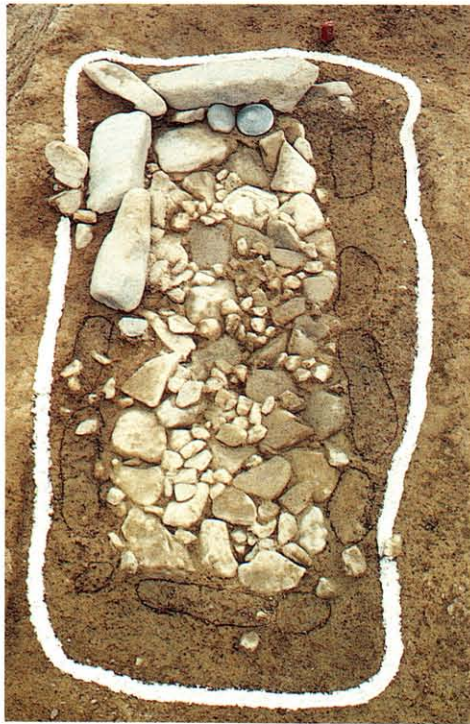
柿谷遺跡 調査区全景（南より）



柿谷遺跡 1号墳全景



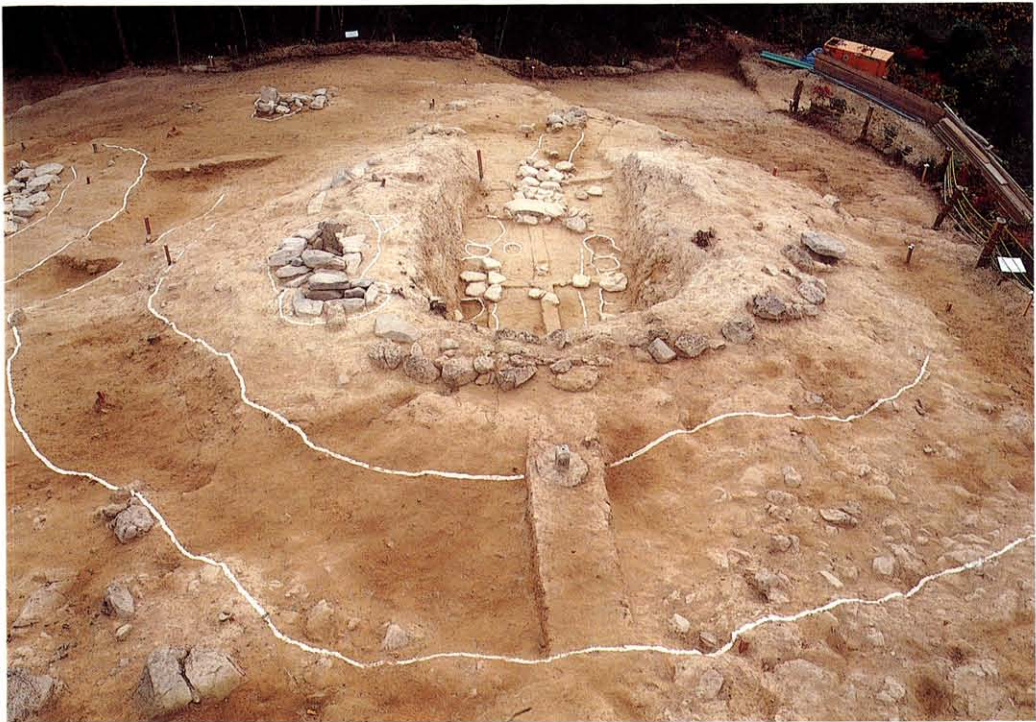
柿谷遺跡 2号墳馬具出土状況



柿谷遺跡 9号石室墓



山田古墳群 A 遺構検出状況（南東より）



山田古墳群 A 尾根上の遺構（北より）



山田古墳群 A 1号中世墓検出状況



山田古墳群 A 2～4号中世墓検出状況

# 序 文

本書は、四国縦貫自動車道（徳島～脇間）の建設に伴い、平成2年度から4年度にかけて実施した板野郡上板町所在の柿谷遺跡・菖蒲谷西山B遺跡・山田古墳群Aの発掘調査の成果をまとめたものであります。

収録した遺跡は阿讃山脈の南麓や扇状地に形成された古墳時代後期の群集墳であります。

従来、当該地域では後期古墳の実態は不明でありましたが、このたび群構成、石室構造などを集中的に調査することができました。いずれも後世の人為的改変により、遺存状況は良好とはいえませんが、馬具を中心とした新たな資料や石室のバリエーションなど、吉野川流域の後期古墳を検討するうえで、重要な基礎資料が得られたものと考えております。

本書が調査研究の資料として活用され、文化財保護の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査、報告書の作成にあたり、日本道路公団及び関係機関並びに地元の皆様に多大の御援助、御協力を頂き、さらに関係各位には貴重な御教示を賜りました。ここに深く感謝の意を表します。

平成6年12月

財団法人 徳島県埋蔵文化財センター  
理事長 坂本松雄

# 例 言

- 1 本書は平成2年(1990)度から平成4年(1992)度にかけて調査を実施した四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 柿谷遺跡・菖蒲谷西山B遺跡・山田古墳群A(板野郡上板町所在)の調査報告を収録した。
- 3 発掘調査は日本道路公団高松建設局から徳島県が委託を受け、徳島県からの委託により、財団法人徳島県埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 遺構の表示は徳島県埋蔵文化財センターが定める発掘調査基準による略記号を定めた。

## 凡例

SD 溝            SK 土坑            SM 古墳            ST 墓

- 5 方位は国土座標第Ⅳ座標系の北、高さは東京湾標準潮位(T. P.)を表す。
- 6 本書で用いた土層及び土器の色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新盤標準土色帳』1989年度版によった。また、ガラス玉の色調は『'80改訂 新色名帳』日本色彩株式会社によった。
- 7 遺物番号・挿図番号・図版番号は遺跡ごとの通し番号とした。
- 8 第2図の地形図は建設省国土地理院登録の1/25,000の地形図「大寺」を転載したものである。
- 9 調査に当たっては、次の機関の指導・協力を得た。  
徳島県教育委員会 日本道路公団高松建設局 同徳島工事事務所  
徳島県土木部縦貫道推進局 同中央事務所 上板町
- 10 発掘調査、整理期間を通じて次の方々に御協力、御教示を得た。  
石野博信 魚島純一 佐藤良二 柴田昌児 正岡睦夫 松藤和人 両角芳郎  
(五十音順、敬称略)

- 11 本書の執筆は以下の通りである。

I 菅原康夫            II・III・V 藤川智之            IV 須崎一幸

各章の構成はそれぞれの執筆者が担当し、全体の編集を菅原が行った。写真は遺物を島巡賢二が、遺構をそれぞれの調査担当者が撮影した。



# 本文目次

I	調査に至る経緯	1
II	遺跡の立地と環境	7
1	地理的環境	7
2	歴史的環境	7
III	柿谷遺跡	11
1	調査の経過	13
(1)	調査の経過	13
(2)	調査の方法	13
(3)	調査日誌抄	14
2	調査成果	19
A	第1～第3調査区	21
B	第4～第9調査区	24
1	号墳 (SM1001)	25
1	号溝 (SD1001)	37
2・3	号溝 (SD1002・3)	37
C	第10・第11調査区	47
2	号墳 (SM1002)	47
3	号墳 (SM1003)	53
4	号墳 (SM1004)	67
1	号墓 (ST1001)	78
2	号墓 (ST1002)	79
5	号墳 (SM1005)	82
6	号墳 (SM1006)	83
3	号石室墓 (ST1003)	86
1	号土坑 (SK1001)	87
2	号土坑 (SK1002)	88
D	第12～第14調査区	94
7	号墳 (SM1007)	94
8	号墳 (SM1008)	105
4	号石室墓 (ST1004)	110
5	号石室墓 (ST1005)	111
6	号石室墓 (ST1006)	112
7	号石室墓 (ST1007)	114

8号石室墓 (ST1008)	115
9号石室墓 (ST1009)	116
4号溝 (SD1004)	118
5号溝 (SD1005)	119
3  まとめ	123
IV  菖蒲谷西山B遺跡	227
1  調査の経過	229
(1)  調査の経過	229
(2)  調査の方法	229
(3)  調査日誌抄	230
2  調査成果	232
1号墳 (SM1001)	232
2号墳 (SM1002)	242
3号墳 (SM1003)	249
4号墳 (SM1004)	257
その他の遺構・遺物	273
3  まとめ	275
V  山田古墳群A	331
1  調査の経過	333
(1)  調査の経過	333
(2)  発掘調査の方法	333
(3)  調査日誌抄	334
2  調査成果	341
A  尾根上の遺構	342
1号墳 (SM1001)	342
1号石室墓 (ST1001)	371
2号石室墓 (ST1002)	376
3号石室墓 (ST1003)	377
4号石室墓 (ST1004)	380
5号石室墓 (ST1005)	381
2号墳 (SM1002)	384
B  斜面部の遺構	394
3号墳 (SM1003)	395
1号中世墓 (ST2001)	401
2号中世墓 (ST2002)	412

3号中世墓 (ST2003) .....	419
4号中世墓 (ST2004) .....	421
3 まとめ .....	430

## 挿図目次

### I 調査に至る経緯

第1図 四国縦貫自動車道(徳島～脇)路線図 …	4
-------------------------	---

### II 遺跡の立地と環境

第1図 周辺の遺跡分布図 .....	8
--------------------	---

### III 柿谷遺跡

第1図 柿谷遺跡調査区・グリッド配置図 .....	14	第26図 SD1002・3出土石器 .....	42
第2図 柿谷遺跡調査区位置図 .....	17	第27図 SD1002攪乱出土玉類 .....	43
第3図 柿谷遺跡遺構配置図 .....	20	第28図 第4～第9調査区出土土器 .....	44
第4図 第1～第3調査区外形図 .....	21	第29図 第4～第9調査区出土旧石器 .....	45
第5図 第1～第3調査区堆積土柱状図 .....	21	第30図 第4～第9調査区出土土器 .....	46
第6図 第1～第3調査区出土旧石器 .....	22	第31図 第10・第11調査区遺構配置図 .....	47
第7図 第1～第3調査区出土土鉄 .....	23	第32図 SM1002排水溝平・断面図 .....	48
第8図 第1～第3調査区出土包含層須恵器 …	23	第33図 SM1002横穴式石室実測図 .....	49
第9図 第4～第9調査区遺構配置図 .....	24	第34図 SM1002遺物出土状況 .....	51
第10図 SM1001全体図 .....	25	第35図 SM1002出土土器 .....	51
第11図 SM1001周濠土層図 .....	26	第36図 SM1002出土鉄製品 .....	52
第12図 SM1001横穴式石室内堆積土層図 .....	27	第37図 SM1003・SM1004墳丘平面図 .....	54
第13図 SM1001横穴式石室実測図 .....	29	第38図 SM1003墳丘土層図 .....	55
第14図 SM1001横穴式石室第一次床面・床面下層 遺物出土状況 .....	31	第39図 SM1003周濠堆積土層図 .....	55
第15図 SM1001横穴式石室第二次床面 .....	32	第40図 SM1003横穴式石室内堆積土層図 .....	56
第16図 SM1001排水溝遺物出土状況・堆積土層図 .....	33	第41図 SM1003横穴式石室実測図 .....	57
第17図 SM1001横穴式石室内出土土器 .....	34	第42図 SM1003第一次床面平面図・断面見通し図 .....	59
第18図 SM1001出土装飾品 .....	36	第43図 SM1003第二次床面平面図・断面見通し図 .....	60
第19図 SM1001周濠内出土須恵器 .....	36	第44図 SM1003第一次床面遺物出土状況図 .....	61
第20図 SD1001堆積土層図 .....	37	第45図 SM1003第二次床面遺物出土状況図 .....	61
第21図 SD1002・3堆積土層図(第5調査区) .....	38	第46図 SM1003横穴式石室内出土土器 .....	63
第22図 SD1002・3堆積土層図 (第6・第7調査区) .....	39	第47図 SM1003出土玉類・刀子 .....	64
第23図 SD1002・3堆積土層図(第8調査区) .....	39	第48図 SM1003周濠内出土土器 .....	65
第24図 SD1002・3堆積土層図(第9調査区) .....	40	第49図 SM1003墳丘内出土須恵器 .....	66
第25図 SD1002・3出土土器 .....	41	第50図 SM1004墳丘土層図 .....	68
		第51図 SM1004周濠内堆積土層図 .....	68
		第52図 SM1004横穴式石室実測図 .....	69

第53図	SM1004横穴式石室内堆積土層図	71	第83図	SM1007横穴式石室前庭部遺物出土状況	101
第54図	SM1004第一次床面平面図・断面見通し図	72	第84図	SM1007出土須恵器	103
第55図	SM1004羨道部遺物出土状況	73	第85図	SM1007出土須恵器子持器台	104
第56図	SM1004第二次床面平面図・断面見通し図	74	第86図	SM1007周濠出土鉄製品	105
第57図	SM1004横穴式石室出土須恵器	76	第87図	SM1008墳丘たち割り土層図	105
第58図	SM1004出土耳環	76	第88図	SM1008周濠内堆積土層図	106
第59図	SM1004出土鉄鏃	77	第89図	SM1008横穴式石室内土層図	106
第60図	SM1004周濠内出土須恵器	77	第90図	SM1008横穴式石室実測図	107
第61図	ST1001平・断面図	78	第91図	SM1008出土須恵器	109
第62図	ST1002平・断面図	79	第92図	ST1004平・断面図	111
第63図	第10調査区石敷状遺構内出土土器	80	第93図	ST1005平・断面図	112
第64図	SM1005横穴式石室実測図	81	第94図	ST1006平・断面図	113
第65図	SM1005出土耳環	82	第95図	ST1006出土須恵器	113
第66図	SM1006横穴式石室実測図	84	第96図	ST1007平断面図・遺物出土状況	114
第67図	ST1003竪穴式石室実測図	85	第97図	ST1007出土須恵器	115
第68図	ST1003竪穴式石室内堆積土層図	86	第98図	ST1008平・断面図	115
第69図	SK1001平・断面図	87	第99図	ST1009平・断面図・遺物出土状況	116
第70図	SK1001出土須恵器	87	第100図	ST1009土層図	117
第71図	SK1002平・断面図	88	第101図	ST1009出土須恵器	117
第72図	SK1002出土須恵器	89	第102図	ST1004堆積土層図	118
第73図	SK1002出土耳環	90	第103図	ST1005堆積土層図	119
第74図	第10・第11調査区出土土器	91	第104図	第12調査区石室状遺構出土須恵器	120
第75図	第10・第11調査区出土石器	92	第105図	第12調査区石室状遺構出土勾玉	120
第76図	第12～第14調査区遺構配置図	94	第106図	第12～第14調査区出土須恵器	121
第77図	SM1007・SM1008墳丘平面図	95	第107図	第12～第14調査区出土旧石器	121
第78図	SM1007墳丘断ち割り土層図	95	第108図	第12～第14調査区出土石器	122
第79図	SM1007周濠内堆積土層図	96	第109図	旧石器出土地点と旧地形の復元	124
第80図	SM1007横穴式石室実測図	97	第110図	各遺構の造営過程	125
第81図	SM1007第一次床面平面図・断面見通し図	99	第111図	徳島市国府町出土の装飾付須恵器	129
第82図	SM1007第二次床面平面図・断面見通し図	100	第112図	車輪文の二態	130

#### IV 菖蒲谷西山B遺跡

第1図	菖蒲谷西山B遺跡グリッド配置図	229	第12図	SM1001出土須恵器	242
第2図	菖蒲谷西山B遺跡調査地位置図	231	第13図	SM1002墳丘測量図	243
第3図	菖蒲谷西山B遺跡地形測量図	233	第14図	SM1002墳丘断面図	244
第4図	菖蒲谷西山B遺跡遺構配置図及び地形測量図	233	第15図	SM1002主体部平面図	245
第5図	SM1001墳丘測量図	235	第16図	SM1002石室実測図	246
第6図	SM1001墳丘断面図	236	第17図	SM1002石室内遺物出土状況	247
第7図	SM1001主体部平面図	237	第18図	SM1002出土ガラス玉	248
第8図	SM1001石室実測図	238	第19図	SM1002出土鉄器	248
第9図	SM1001石室内遺物出土状況	239	第20図	SM1002出土須恵器	248
第10図	SM1001出土装身具	240	第21図	SM1003墳丘測量図	249
第11図	SM1001出土鉄器	241	第22図	SM1003墳丘断面図	250

第23図	SM1003主体部平面図	251	第36図	SM1004出土装身具 (2) 練玉	264
第24図	SM1003石室実測図	252	第37図	SM1004出土装身具 (3) 練玉	265
第25図	SM1003遺物出土状況	253	第38図	SM1004出土装身具 (4) 練玉	266
第26図	SM1003出土鉄器	253	第39図	SM1004出土装身具 (5) 練玉	267
第27図	SM1003出土須恵器	255	第40図	SM1004出土装身具 (6) 練玉	268
第28図	SM1004墳丘測量図	256	第41図	SM1004出土鉄器 (1) 鉄鍬	269
第29図	SM1004墳丘断面図	257	第42図	SM1004出土鉄器 (2) 刀子・鎌	270
第30図	SM1004主体部平面図	258	第43図	SM1004出土鉄器 (3) 馬具	270
第31図	SM1004石室実測図	259	第44図	SM1004出土須恵器 須恵器	271
第32図	SM1004羨道遺物出土状況	260	第45図	骨蔵器出土状況及び実測図	273
第33図	SM1004第二次床面遺物出土状況	261	第46図	遺構に伴わない遺物	274
第34図	SM1004第一次床面遺物出土状況	262	第47図	菖蒲谷西山B遺跡における須恵器の変遷	277
第35図	SM1004出土装身具 (1) 耳環・ガラス玉・練玉	263	第48図	TK43併行期の鉄鍬	279

## V 山田古墳群A

第1図	グリッド配置図	333	第29図	ST1001遺物出土状況図	373
第2図	調査地位置図	336	第30図	ST1001出土須恵器	374
第3図	調査前地形測量図	337	第31図	ST1001出土玉類	375
第4図	調査後地形測量図 (全体)	339	第32図	ST1002実測図	376
第5図	Q-5・6グリッド出土須恵器蔵骨器	342	第33図	ST1002土層図	377
第6図	SM1001墳丘図	343	第34図	ST1003実測図	378
第7図	SM1001墳丘・墓壇内土層図	345	第35図	ST1003土層図	379
第8図	SM1001横穴式石室展開図	347	第36図	ST1003遺物出土状況図	379
第9図	SM1001排水溝土層図	350	第37図	ST1003出土鉄鍬	380
第10図	SM1001遺物出土状況図 (全体)	351	第38図	ST1004実測図	381
第11図	SM1001遺物出土状況図 (1) 玄室	353	第39図	ST1004土層図	381
第12図	SM1001遺物出土状況図 (2) 排水溝	354	第40図	ST1005実測図	382
第13図	SM1001遺物出土状況図 (3) 前庭部	355	第41図	ST1005土層図	383
第14図	SM1001出土須恵器 (1)	357	第42図	ST1005周辺出土須恵器	384
第15図	SM1001出土須恵器 (2)	358	第43図	SM1002墳丘図	385
第16図	SM1001出土須恵器 (3)	359	第44図	SM1002横穴式石室実測図	387
第17図	SM1001出土須恵器 (4)	360	第45図	SM1002横穴式石室土層図	389
第18図	SM1001出土鉄器 (1) 馬具 ①	361	第46図	SM1002遺物出土状況図	390
第19図	SM1001出土鉄器 (2) 馬具 ②	362	第47図	SM1002出土須恵器	391
第20図	SM1001出土鉄器 (3) 馬具 ③	364	第48図	SM1002出土鉄器・耳環	392
第21図	SM1001出土鉄器 (4)	365	第49図	南東斜面部地形図	394
第22図	SM1001出土耳環	365	第50図	SM1003横穴式石室実測図・土層図	395
第23図	SM1001出土玉類 (1)	367	第51図	SM1003遺物出土状況図	396
第24図	SM1001出土玉類 (2)	368	第52図	SM1003出土須恵器	397
第25図	SM1001出土白磁碗・瓦器	369	第53図	SM1003出土耳環・玉類	398
第26図	SM1001周辺出土須恵器	370	第54図	SM1003周辺出土須恵器	400
第27図	ST1001実測図	371	第55図	ST2001検出状況図・土層図	402
第28図	ST1001土層図	372	第56図	ST2001南西壁面土層図	403

第57図	ST2001第1段階	403	第73図	ST2003検出状況	419
第58図	ST2001第2段階・第3段階	404	第74図	ST2003平面図断面見通し図	419
第59図	ST2001第4段階	406	第75図	ST2003出土五輪塔	420
第60図	ST2001・SK02平面図・遺物出土状況図	407	第76図	ST2004検出状況	421
第61図	ST2001・SK03平面図・遺物出土状況図	407	第77図	ST2004平面図・断面見通し図	421
第62図	ST2001・SP01・02・03平面図	407	第78図	ST2004出土五輪塔	422
第63図	ST2001第5段階	408	第79図	中世墓周辺出土土器	423
第64図	ST2001出土土器・鉄釘	409	第80図	遺構に伴わない五輪塔 ST2001周辺 (1)	424
第65図	ST2001出土五輪塔	410	第81図	遺構に伴わない五輪塔 ST2001周辺 (2)	425
第66図	ST2002検出状況	412	第82図	遺構に伴わない五輪塔 ST2002~2004周辺 (1)	426
第67図	ST2002平面図・断面見通し図	413	第83図	遺構に伴わない五輪塔 ST2002~2004周辺 (2)	427
第68図	ST2002下部遺構平面図	413	第84図	各遺構の造営過程	430
第69図	ST2002・SK01出土五輪塔	415	第85図	山田古墳群A出土ガラス玉の色調構成	435
第70図	ST2002・SK01出土五輪塔復元図	416	第86図	中近世墓の広がり	436
第71図	ST2002出土五輪塔	417	第87図	計測値凡例	442
第72図	ST2002出土五輪塔・SK02出土鉄釘	418			

## 図版目次

### III 柿谷遺跡

図版1	調査前全景 (東より)	164	図版12	SD1001完掘状況	175
	調査前風景 (第1~第3調査区)	164	第5調査区SD1002・3完掘状況	175	
図版2	調査区遠景 (第4~第14調査区)	165	図版13	第8調査区SD1002・3完掘状況	176
	遺構検出状況 (第10~第13調査区)	165	第9調査区SD1002・3完掘状況	176	
図版3	第1調査区完掘状況	166	図版14	第5調査区SD1002・3土層 (C-C'断面)	177
	第2・第3調査区完掘状況	166	第7調査区SD1002・3土層 (E-E'断面)	177	
図版4	第1調査区土層堆積状況	167	図版15	第8調査区SD1002・3土層 (F-F'断面)	178
	第1~第3調査区出土遺物	167	第8調査区SD1002・3土層 (G-G'断面)	178	
図版5	第4調査区自然流路	168	図版16	SD1002・3及び第4~第9調査区出土土器	179
	第4調査区土層堆積状況	168	図版17	第4~第9調査区出土土器	180
図版6	SM1001横穴式石室検出状況	169	図版18	SM1002全景 (南より)	181
	SM1001横穴式石室掘り下げ状況	169	SM1002完掘状況	181	
図版7	SM1001第一次床面検出状況 開口部より	170	図版19	SM1002横穴式石室構築状況	182
	SM1001第一次床面検出状況 奥壁部より	170	SM1002遺物出土状況	182	
図版8	SM1001排水溝完掘状況	171	図版20	SM1002出土遺物	183
	SM1001全景 (南より)	171	図版21	SM1003横穴式石室検出状況	184
図版9	SM1001遺物出土状況 (排水溝上面)	172	SM1003横穴式石室掘り下げ状況	184	
	SM1001遺物出土状況 (第一次床面下層)	172	図版22	SM1003第二次床面検出状況	185
図版10	SM1001横穴式石室構築状況	173	SM1003第二次床面遺物出土状況	185	
	SM1001横穴式石室掘り方完掘状況	173	図版23	SM1003第一次床面検出状況	186
図版11	SM1001出土遺物	174	SM1003羨道部遺物出土状況	186	

図版24	SM1003横穴式石室構築状況（女門）	187	SM1007横穴式石室前庭部遺物出土状況	207	
	SM1003横穴式石室構築状況（羨門）	187	図版45	SM1007横穴式石室構築状況	208
図版25	SM1003墳丘内遺物出土状況	188		SM1007横穴式石室掘り方完掘状況	208
	SM1003墳丘断ち割り状況	188	図版46	SM1007出土遺物	209
図版26	SM1003出土遺物（1）	189	図版47	SM1008横穴式石室	210
図版27	SM1003出土遺物（2）	190		SM1008横穴式石室前庭部遺物出土状況	210
図版28	SM1004横穴式石室検出状況	191	図版48	SM1008床面集石状況	211
	SM1004横穴式石室掘り下げ状況	191		SM1008出土遺物	211
図版29	SM1004第二次床面検出状況	192	図版49	ST1004床面検出状況	212
	SM1004第二次床面人骨出土状況	192		ST1004石材抜き取り穴掘削状況	212
図版30	SM1004第一次床面検出状況	193	図版50	ST1004掘り方完掘状況	213
	SM1004閉塞石内遺物出土状況	193		ST1005床面検出状況	213
図版31	SM1004墳丘断ち割り状況	194	図版51	ST1005石材抜き取り穴掘削状況	214
	SM1004墳丘断ち割り状況（南側）	194		ST1005掘り方完掘状況	214
図版32	SM1004横穴式石室構築状況	195	図版52	ST1006床面検出状況	215
	SM1004横穴式石室構築状況（奥壁部）	195		ST1006石材抜き取り穴掘削状況	215
図版33	SM1004出土遺物	196	図版53	ST1006掘り方完掘状況	216
図版34	石敷状遺構全景	197		ST1007遺物出土状況	216
	石敷状遺構出土遺物	197	図版54	ST1007床面検出状況	217
図版35	ST1001・2検出状況	198		ST1007石材抜き取り穴掘削状況	217
	ST1001完掘状況	198	図版55	ST1007掘り方完掘状況	218
図版36	ST1001遺物出土状況	199		ST1008床面検出状況	218
	ST1002完掘状況	199	図版56	ST1008石材抜き取り穴掘削状況	219
図版37	SM1005全景	200		ST1008掘り方完掘状況	219
	SM1005耳環出土状況・出土耳環	200	図版57	ST1009床面検出状況	220
図版38	SM1006横穴式石室	201		ST1009遺物出土状況	220
	SM1006横穴式石室掘り方断ち割り状況	201	図版58	ST1009掘り方完掘状況	221
図版39	ST1004検出状況	202		ST1006・7・9出土遺物	221
	ST1004全景	202	図版59	第12調査区北半自然流路	222
図版40	SK1001遺物出土状況	203		SD1004完掘状況	222
	SK1002遺物出土状況	203	図版60	第12調査区SD1004堆積状況	
図版41	SK1002完掘状況	204		（C-C'断面）	223
	SK1001・2出土遺物	204		第13調査区SD1004堆積状況	
図版42	第10・第11調査区出土遺物	205		（E-E'断面）	223
図版43	SM1007第二次床面検出状況	206	図版61	SD1005完掘状況	224
	SM1007第二次床面検出状況	206		SD1005堆積状況	224
図版44	SM1007第一次床面検出状況	207	図版62	第12～第14調査区出土遺物	225

#### IV 菖蒲谷西山B遺跡

図版 1	菖蒲谷西山B遺跡調査区全景	304	図版 4	SM1001主体部検出状況（1）	307
図版 2	第一次調査遺構	305		SM1001主体部検出状況（2）	307
図版 3	調査前遠景	306	図版 5	SM1001主体部検出状況（3）	308
	調査前近景	306		SM1001石室床面検出状況	308

図版 6	SM1001床面礫床除去状況	309	図版16	SM1003側壁（東より）	319
	SM1001主体部断ち割り状況	309		SM1003断ち割り状況	319
図版 7	SM1001出土遺物	310	図版17	SM1003出土遺物	320
図版 8	SM1002主体部検出状況 (1)	311	図版18	SM1004遺物出土状況 (1)	321
	SM1002主体部検出状況 (2)	311		SM1004遺物出土状況 (2)	321
図版 9	SM1002石室床面遺物出土状況	312	図版19	SM1004主体部検出状況	322
	SM1002石室床面検出状況	312		SM1004閉塞石検出状況	322
図版10	SM1002石室床面礫床除去状況	313	図版20	SM1004床面遺物出土状況	323
	SM1002排水溝検出状況	313		SM1004床面検出状況	323
図版11	SM1002断ち割り状況	314	図版21	SM1004床面検出状況及び	
	SM1002出土遺物	314		断ち割り状況	324
図版12	SM1003主体部検出状況 (1)	315		SM1004奥壁	324
	SM1003主体部検出状況 (2)	315	図版22	SM1004墳丘断面	325
図版13	SM1003主体部検出状況 (3)	316		SM1004断ち割り状況	325
	SM1003遺物出土状況 (1)	316	図版23	SM1004出土遺物 (1)	326
図版14	SM1003遺物出土状況 (2)	317	図版24	SM1004出土遺物 (2)	327
	SM1003遺物出土状況 (3)	317	図版25	SM1004出土遺物 (3)	328
図版15	SM1003石室検出状況	318	図版26	骨蔵器出土状況	329
	SM1003側壁（西より）	318		第一次調査終了時調査区全景	329

## V 山田古墳群 A

図版 1	調査前風景（北より）	476	図版16	ST1001・ST1002検出状況	491
	調査前風景（西より）	476		ST1001全景	491
図版 2	調査区全景	477	図版17	ST1001遺物出土状況 須恵器	492
	尾根中央部の遺構	477		ST1001遺物出土状況 ガラス玉	492
図版 3	SM1001全景（北より）	478	図版18	ST1002全景	493
	SM1001横穴式石室	478		ST1001・ST1002掘り方完掘状況	493
図版 4	SM1001横穴式石室内堆積状況	479	図版19	ST1001出土遺物	494
	SM1001排水溝上面集石状況	479	図版20	ST1003・ST1004検出状況	495
図版 5	SM1001遺物出土状況 排水溝内	480		ST1003全景	495
	SM1001遺物出土状況 前庭部	480	図版21	ST1003鉄鏃出土状況	496
図版 6	SM1001排水溝完掘状況	481		ST1003出土鉄鏃	496
	SM1001周濠断ち割り状況	481		ST1003石室裏ごめ	496
図版 7	SM1001墳丘断ち割り状況（西半）	482	図版22	ST1004全景	497
	SM1001墳丘断ち割り状況（東半）	482		ST1003・ST1004掘り方完掘状況	497
図版 8	SM1001出土須恵器 (1)	483	図版23	ST1005検出状況	498
図版 9	SM1001出土須恵器 (2)	484		ST1005全景	498
図版10	SM1001出土須恵器 (3)	485	図版24	ST1005掘り方完掘状況	499
図版11	SM1001出土須恵器 (4)・骨蔵器	486		ST1005周辺出土土器	499
図版12	SM1001出土馬具 (1)	487	図版25	SM1002検出状況	500
図版13	SM1001出土馬具 (2)	488		SM1002全景	500
図版14	SM1001出土馬具 (3)・その他の鉄器	489	図版26	SM1002遺物出土状況 鉄鏃	501
図版15	SM1001出土玉類	490		SM1002遺物出土状況 須恵器	501



図版27	SM1002墳丘断ち割り状況	502	ST2002SK01上面五輪塔出土状況	510	
	SM1002横穴式石室構築状況	502	図版36	ST2002SK01堆積状況	511
図版28	SM1002出土遺物	503		ST2002完掘状況	511
図版29	SM1003横穴式石室検出状況	504	図版37	ST2002SK02出土遺物	512
	SM1003横穴式石室床面検出状況	504	図版38	ST2002出土五輪塔	513
図版30	SM1003遺物出土状況	505	図版39	ST2003石組検出状況	514
	SM1003横穴式石室掘り方断ち割り状況	505		ST2003火葬墓完掘状況	514
図版31	SM1003出土遺物	506	図版40	ST2004検出状況	515
図版32	ST2001検出状況	507		ST2004火葬墓完掘状況	515
	ST2001第4段階	507	図版41	ST2003・ST2004出土五輪塔及び包含層出土土器	516
図版33	ST2001SK01遺物出土状況	508	図版42	中世墓周辺の五輪塔の出土状況	517
	ST2001完掘状況	508	図版43	ST2001周辺出土五輪塔	518
図版34	ST2001出土遺物	509	図版44	ST2002～ST2004周辺出土五輪塔	519
図版35	ST2002検出状況	510			

## 表目次

### I 調査に至る経緯

四国縦貫自動車道（徳島～脇間）埋蔵文化財調査地一覧表	5
----------------------------	---

### III 柿谷遺跡

第1表	報告書掲載の調査区番号と旧調査区番号	13	第20表	SM1003周濠内出土土器観察表	147
第2表	報告書掲載の遺構番号と旧遺構番号	19	第21表	SM1003墳丘内出土墳丘内観察表	147
第3表	徳島市国府町出土の装飾は須恵器の 子持壺の部分計測値	128	第22表	SM1004石室内出土須恵器観察表	148
第4表	第1～第3調査区出土土器計測表	134	第23表	SM1004出土耳環計測表	149
第5表	第1～第3調査区出土土器観察表	134	第24表	SM1004出土鉄鏃計測表	149
第6表	SM1001石室内出土土器観察表	134	第25表	SM1004周濠内出土須恵器観察表	150
第7表	SM1001出土耳環計測表	138	第26表	石敷状遺構内出土土器観察表	150
第8表	SM1001出土勾玉計測表	138	第27表	SM1005出土耳環計測表	152
第9表	SM1001出土平玉計測表	138	第28表	SK1001出土須恵器観察表	152
第10表	SM1001周濠出土土器観察表	138	第29表	SK1002出土須恵器観察表	152
第11表	SD1002・1003出土土器観察表	138	第30表	SK1002出土耳環計測表	152
第12表	SD1002・1003出土土器計測表	140	第31表	第10・第11調査区出土土器観察表	153
第13表	SD1002・1003出土ガラス玉計測表	140	第32表	第10・第11調査区出土土器計測表	155
第14表	第4～第9調査区出土土器観察表	141	第33表	SM1007出土須恵器観察表	155
第15表	第4～第9調査区出土土器計測表	142	第34表	SM1007出土子持器台観察表	158
第16表	SM1002出土土器観察表	142	第35表	SM1008出土須恵器観察表	159
第17表	SM1002出土鉄鏃計測表	143	第36表	ST1006出土須恵器観察表	160
第18表	SM1003石室内出土土器観察表	143	第37表	ST1007出土須恵器観察表	160
第19表	SM1003出土ガラス玉計測表	145	第38表	ST1009出土須恵器観察表	161
			第39表	石室状遺構出土須恵器観察表	161

第40表	石室状遺構出土勾玉計測表	161
第41表	第12～第14調査区出土須恵器観察表	161

第42表	第12～第14調査区出土石鏃計測表	162
------	-------------------	-----

#### IV 菖蒲谷西山B遺跡

第1表	SM1001耳環計測表	282
第2表	SM1001ガラス玉計測表	282
第3表	SM1001練玉計測表	284
第4表	SM1001鉄器計測表	285
第5表	SM1001須恵器観察表	285
第6表	SM1002ガラス玉計測表	285
第7表	SM1002鉄器計測表	286
第8表	SM1002須恵器観察表	287
第9表	SM1003鉄器計測表	287
第10表	SM1003須恵器観察表	287

第11表	SM1004耳環計測表	289
第12表	SM1004ガラス玉計測表	290
第13表	SM1004練玉計測表	291
第14表	SM1004刀子・鎌計測表	297
第15表	SM1004馬具計測表	297
第16表	SM1004鉄鏃計測表	298
第17表	SM1004須恵器観察表	299
第18表	骨蔵器観察表	301
第19表	遺構に伴わない須恵器観察表	301

#### V 山田古墳群A

第1表	Q-5・6グリッド須恵器観察表	443
第2表	SM1001出土須恵器観察表	443
第3表	SM1001出土鉄鏃計測表	452
第4表	SM1001出土耳環計測表	452
第5表	SM1001出土切子玉計測表	452
第6表	SM1001出土管玉計測表	453
第7表	SM1001出土トンボ玉計測表	453
第8表	SM1001出土ガラス玉計測表	453
第9表	SM1001出土土玉計測表	458
第10表	SM1001周辺出土土器観察表	459
第11表	ST1001出土須恵器観察表	460
第12表	ST1001出土玉類計測表	461
第13表	ST1003出土鉄鏃計測表	464
第14表	ST1005周辺出土須恵器観察表	464
第15表	SM1002出土須恵器観察表	465
第16表	SM1002出土鉄鏃計測表	465
第17表	SM1002出土刀子計測表	466
第18表	SM1003出土須恵器観察表	466
第19表	SM1003出土耳環計測表	466
第20表	SM1003出土勾玉計測表	466
第21表	SM1003出土切子玉計測表	466
第22表	SM1003出土算盤玉計測表	466
第23表	SM1003出土管玉計測表	467
第24表	SM1003出土土玉計測表	467
第25表	SM1003出土ガラス玉計測表	467
第26表	SM1003周辺出土須恵器観察表	468
第27表	ST2001出土土器観察表	469

第28表	ST2001出土空風輪計測表	469
第29表	ST2001出土火輪計測表	469
第30表	ST2001出土地輪計測表	469
第31表	ST2002SK01出土空風輪計測表	470
第32表	ST2002SK01出土水輪計測表	470
第33表	ST2002SK01出土火輪計測表	470
第34表	ST2002SK01出土地輪計測表	470
第35表	ST2002出土空風輪計測表	470
第36表	ST2002出土火輪計測表	470
第37表	ST2002出土水輪計測表	470
第38表	ST2002出土基壇計測表	471
第39表	ST2002出土五輪板碑計測表	471
第40表	ST2003出土空風輪計測表	471
第41表	ST2003出土火輪計測表	471
第42表	ST2004出土空風輪計測表	471
第43表	ST2004出土水輪計測表	471
第44表	中世墓周辺出土土器観察表	472
第45表	ST2001周辺出土空風輪計測表	473
第46表	ST2001周辺出土火輪計測表	473
第47表	ST2001周辺出土水輪計測表	473
第48表	ST2002周辺出土地輪計測表	473
第49表	ST2001～2004周辺出土空風輪計測表	474
第50表	ST2001～2004周辺出土水輪計測表	474
第51表	ST2001～2004周辺出土火輪計測表	474
第52表	ST2001～2004周辺出土地輪計測表	474
第53表	ST2001～2004周辺出土五輪板碑計測表	474

# 写真目次

## III 柿谷遺跡

写真1 平成2年度調査作業風景 .....	14
写真2 平成2年度調査現地説明会風景 .....	15

写真3 平成3年度調査クレーン撮影風景 .....	15
写真4 平成3年度調査現地説明会風景 .....	16

## IV 菖蒲谷西山B遺跡

写真1 遺構実測風景 .....	230
------------------	-----

## V 山田古墳群A

写真1 作業風景 .....	334
写真2 現地説明会風景 .....	334

写真3 空中撮影風景 .....	335
------------------	-----

# I 調査に至る経緯

四国縦貫自動車道は「国土開発幹線自動車道建設法」及び「高速自動車国道法」に基づき、四国4県を連結する幹線道路として整備された。徳島県内では徳島～脇間については昭和48年（1973）10月19日「道路建設特別措置法」に基づき建設大臣から第7次の施工命令が出され（昭和54年3月2日整備計画変更、施工命令）、昭和55年12月19日実施計画の認可、昭和56年1月19日に路線発表がされた。

これは徳島市川内町の徳島ICを起点とし、吉野川に平行して西進し、板野郡板野町の沖積平野を横断した後、同郡上板町から阿波郡阿波町にかけて阿讃山麓を通過して脇ICを結ぶ、区間延長44.4km、用地取得面積259haに及ぶ事業である。

昭和61年4月24日道路局長通達により暫定施工に変更され、62年11月6日徳島～脇間の起工式が行われた。昭和63年5月31日には藍住IC（追加IC）の施工命令が出され、6月30日に実施計画が認可されている。

この間徳島県教育委員会（以下「県教委」という。）は、昭和60年～62年度にかけて脇～板野間、63年度には徳島～板野間の路線に係る分布調査を実施し、埋蔵文化財の実態把握に努めた。これと前後し、分布調査結果を基に県教委と協議を重ねた日本道路公団高松建設局（以下「公団」という。）は、昭和63年6月17日、文化庁に脇～板野間にかかる58遺跡の取扱いについて協議を申し入れ、平成元年3月30日、工事の施工に先立って発掘調査を実施する旨の協議を終了した。

一方、県教委では供用が第10次5か年計画に取り入れられ、平成5年が目標になっていることを受けて、63年度に大規模開発に即応した調査体制の整備を図り、平成元年4月1日、財団法人徳島県埋蔵文化財センター（以下「センター」という。）を発足させ、調査に対応することとした。センター発足時には未確定であった徳島～板野間の調査については、平成2年1月22日に10遺跡の取扱いについての協議が終了し、路線内に68遺跡、約360,000㎡（暫定分約340,000㎡）、事業地区面積のほぼ13パーセントにあたる文化財対象地が確定した。（第1図）

県と公団との委託契約をふまえ、県とセンターの委託契約は平成元年6月1日付けで締結された。センターでは発掘調査にあたって、機械掘削等工事請負方式と空中写真撮影図化を導入することによって、調査の迅速化に努める方針で臨んだ。しかし、文化財対象地区があくまで分布調査結果に基づくものであり、特に工事請負として設計・発注するためには掘削土量の把握が不可欠であるため、試掘調査を先行し、遺構の遺存状態及び層厚の把握に努めた。また、用地取得状況を勘案しつつ、散布地・集落・古墳など、遺跡の性格・遺構の累積数に応じた調査方法、調査工期について検討を行い、調査を実施した。

前述したように試掘調査を先行することによって層厚・調査範囲を絞り込んだことに加え、徳島～板野間の沖積平野では現地表面下3m以深に遺跡が存在することから、遺物の採集が行われなくとも、慎重を期して微高地が調査対象地とされていたこともあり、最終の実掘面積は当初見込みに比べて減少した。

平成元年度には、14遺跡14,500㎡、2年度には36遺跡76,390㎡、3年度は30遺跡35,748㎡、4年度は残件であった14遺跡6,826㎡について、用地取得がなされた地区から工事の工程を勘案の上、調査を進め、当該区間の調査を完了した。(第1表)。

それぞれの調査の進捗状況については、既刊の徳島県埋蔵文化財センター年報を参照されたい。

本書所収の遺跡はいずれも古墳群である。調査着手以前に実施した現地確認調査及び試掘調査では墳丘の概数把握はなしえたものの、無墳丘の小石室の実数については不明なままであった。

特に柿谷遺跡では試掘調査の結果、石室基底部の遺存が確認され、古墳群の存在することが判明したが、扇状地形に加え、後世の開墾により墳丘が全く識別できないこと、さらに古墳の調査であることから、平地部の集落遺跡の調査で実施している工事請負の人力掘削歩掛かりの適用が馴染まないと判断し、過去の経験値に基づき、1基当たり/月稼働面積に換算した古墳歩掛かりを独自に作成して調査を実施した。記録資料の作成にあたっては調査担当者による図面作成はもとより、ヘリコプター・クレーン・ラジコンヘリによる写真撮影図化を併用した。

古墳の調査に工事請負を導入することについては、古墳実数が大きく変動しない範囲において、仮設工事や伐根・除根、土止め等の保安対策上、かなり有効な方法ではあったが、石室の遺存状況程度、遺物の出土量によって歩掛かり・調査工期の見直しが必要であり、古墳群個々のケースによる調査工程や設計内容に検討課題を残している。

調査組織及び整理体制は以下である。

事務局長	日下 昭 (平成元・2年度)	佐藤信博 (平成3・4年度)
	柴田 広 (平成5年度)	
総務課長	吉田 寛 (平成元・2年度)	木内正幸 (平成3年度)
	岡本一仁 (平成4・5年度)	
主 事	佐藤 馨 (平成2～4年度)	三木和文 (平成5年度)
研究補助員	扶川道代	
臨時補助員	田村隆子 上田暁美 岸いくみ 大岸さとみ	
	福原幸恵 柴田みのり 鳴滝淑江 安芸敦子	
調査課長	桑原邦彦 (平成元・2年度)	羽山久男 (平成3・4年度)
	紀伊司郎 (平成5年度)	
調整係長	菅原康夫 (平成元年度)	島巡賢二 (平成2～5年度)
技 師	森長 進 (平成元・2年度技術主任)	堀江隆治 (平成3・4年度)
技術主任	酒井彰彦 (平成5年度)	
調査係長	島巡賢二 (平成元年度)	菅原康夫 (平成2～5年度)
調査担当		

#### 柿谷遺跡

##### 第一次調査

研 究 員	石川直章 (当時)	山下知之 (当時)
	武蔵美和 (当時)	

##### 第二次調査

研 究 員	池渕 茂 (当時)	藤川智之
	辻 佳伸	須崎一幸

#### 菖蒲谷西山B遺跡

##### 第一次調査

研 究 員	久保協美朗	横畠道彦 (当時)
研究補助員	原 芳伸 (当時)	

##### 第二次調査

研 究 員	須崎一幸	
-------	------	--

#### 山田古墳群A

研 究 員	鈴木康司 (当時)	柴田昌晃 (当時)
	向原敬夫 (当時)	佐野耕市

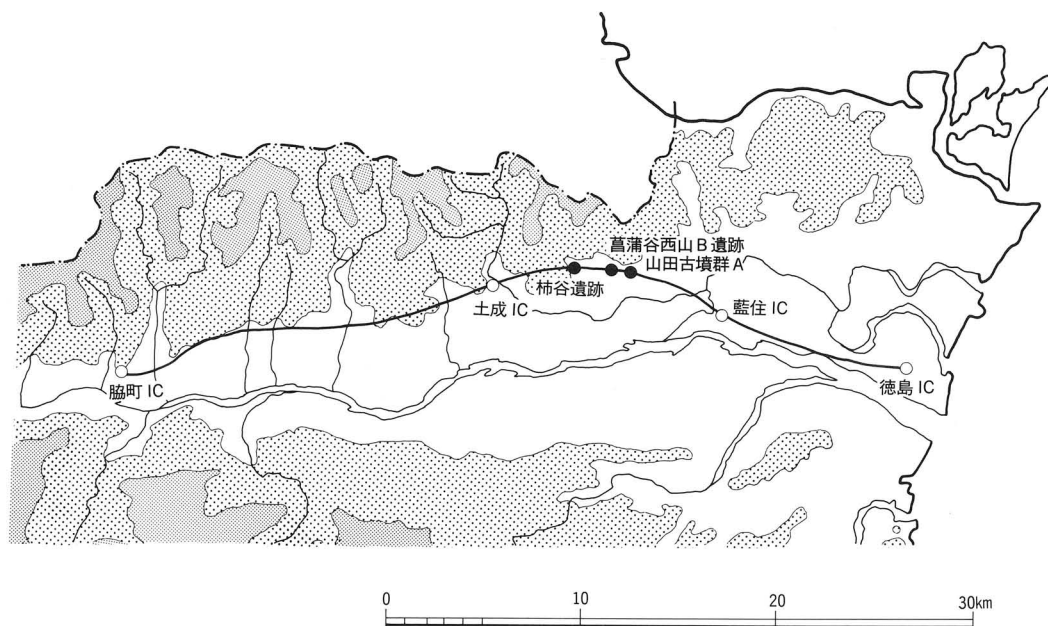
報告書作成業務

柿谷遺跡・山田古墳群 A

研究員 藤川智之

菖蒲谷西山 B 遺跡

研究員 須崎一幸



第 1 図 四国縦貫自動車道 (徳島～脇) 路線図

第1表 四国縦貫自動車道（徳島～脇間）埋蔵文化財調査地一覧表

遺跡 番号	遺跡名	所在地	面積（㎡）				備 考
			実掘面積	元年度	2年度	3年度	
1	西長峰遺跡	阿波郡阿波町西長峰	170	170			
2	中長峰遺跡	阿波郡阿波町中長峰	100	100			
3	東長峰遺跡	阿波郡阿波町東長峰	30		30		
4	日吉谷遺跡	阿波郡阿波町日吉谷	4,080	1,840	2,240		報告書第5集所収
5	赤坂遺跡（Ⅰ）	阿波郡阿波町赤坂	800		800		報告書第1集所収
6	赤坂遺跡（Ⅱ）	阿波郡阿波町赤坂	50		50		報告書第1集所収
7	赤坂遺跡（Ⅲ）	阿波郡阿波町赤坂	1,600	600	1,000		報告書第1集所収
8	桜ノ岡遺跡（Ⅰ）	阿波郡阿波町桜ノ岡	8,000	2,690	5,310		報告書第3集所収
9	桜ノ岡遺跡（Ⅲ）	阿波郡阿波町桜ノ岡	240	240			報告書第3集所収
10	桜ノ岡～東正広遺跡	阿波郡阿波町小倉	1,000		1,000		
11	山ノ神遺跡	阿波郡阿波町山ノ神	10		10		
12	山ノ神～八丁原遺跡	阿波郡阿波町山ノ神	30		30		
13	上喜来遺跡	阿波郡市場町大俣	1,160		900	260	
14	大俣山路～大俣宇佐遺跡	阿波郡市場町大俣	250			250	
15	上喜来蛭子～中佐古遺跡	阿波郡市場町上喜来	12,560		11,720	840	報告書第7集所収
16	八坂遺跡（Ⅰ）	阿波郡市場町尾開	11			11	
17	八坂遺跡（Ⅱ）	阿波郡市場町尾開	360	360			
18	八坂遺跡（Ⅲ）	阿波郡市場町尾開	114			85	29
19	八坂遺跡（Ⅳ）	阿波郡市場町尾開	2,000	2,000			
20	日吉～金清遺跡	阿波郡市場町尾開	3,100	2,850	250		
21	古田遺跡（Ⅰ）	阿波郡市場町切幡	60		60		
22	古田遺跡（Ⅱ）	阿波郡市場町切幡	510	510			
23	坤山～観音遺跡	阿波郡市場町切幡	60			60	
24	乾山～観音遺跡	阿波郡市場町切幡	850			850	
25	乾山遺跡	阿波郡市場町切幡	2			2	
26	金蔵～上井遺跡	板野郡土成町浦池	2,730	2,730			報告書第1集所収
27	北原～大法寺遺跡	板野郡土成町土成	4,890		4,890		報告書第6集所収
28	前田遺跡	板野郡土成町土成	10,810		7,710	3,100	報告書第2集所収
29	椎ヶ丸～芝生遺跡	板野郡土成町吉田	3,550		3,550		報告書第6集所収
30	北門～涼堂遺跡	板野郡土成町吉田	200			200	
31	広坪～宮ノ下遺跡	板野郡土成町宮川内	60		60		
32	向山古墳群	板野郡土成町宮川内	50				50
33	葬ヶ丸遺跡	板野郡土成町高尾	1,400		1,400		
34	けやき原～林遺跡	板野郡土成町高尾	210		210		
35	西谷遺跡	板野郡土成町高尾	7,300		5,650	1,650	
36	法教田遺跡（Ⅰ）	板野郡土成町高尾	10		10		
37	十楽寺遺跡	板野郡土成町高尾	430		430		報告書第6集所収
38	安楽寺谷墳墓群	板野郡上板町引野	2,140			2,140	
39	関掘窯跡	板野郡上板町引野	20			20	
40	天神山遺跡	板野郡上板町引野	1,330		1,330		報告書第1集所収



遺跡 番号	遺跡名	所在地	面積 (㎡)				備 考	
			実掘面積	元年度	2 年度	3 年度		4 年度
41	青谷遺跡	板野郡上板町引野	3,980		3,110	870		報告書第 1 集所収
42	明神池古墳群	板野郡上板町引野	194		80	114		
43	柿谷遺跡	板野郡上板町泉谷	8,930		3,280	5,650		本報告書所収
44	新池遺跡	板野郡上板町泉谷	31			31		
45	神宮寺遺跡	板野郡上板町神宅	15,649			11,507	4,142	
46	菖蒲谷西山 A 遺跡	板野郡上板町神宅	460		130	330		
47	菖蒲谷西山 B 遺跡	板野郡上板町神宅	1,980			1,730	250	本報告書所収
48	菖蒲谷東山古墳群	板野郡上板町神宅	115			115		
49	山田古墳群 A	板野郡上板町神宅	2,200			2,200		本報告書所収
50	山田古墓	板野郡上板町神宅	8			8		
51	山田古墳 B	板野郡上板町神宅	775			525	250	
52	大谷古墳群	板野郡上板町神宅	30				30	
53	大谷薬師遺跡	板野郡上板町神宅	180		180			
54	祝谷古墳	板野郡上板町神宅	90				90	
55	聖天山遺跡	板野郡上板町神宅	115				115	
56	黒谷窯跡	板野郡板野町黒谷	91				91	
57	松谷遺跡	板野郡板野町松谷	900		40	860		
58	蓮華谷古墳群 (I)	板野郡板野町犬伏	353			65	288	
59	蓮華池遺跡 (I)	板野郡板野町犬伏	340		340			報告書第 4 集所収
60	蓮華谷古墳群 (II)	板野郡板野町犬伏	1,220		1,220			報告書第 4 集所収
61	蓮華池遺跡 (II)	板野郡板野町犬伏	40	40				
62	黒谷川宮ノ前遺跡	板野郡板野町犬伏	10,580	130	10,450			報告書第 9 集所収
63	古城遺跡	板野郡板野町古城	10,000	240	8,920		840	報告書第 8 集所収
64	西中富遺跡 (I)	板野郡板野町西中富	975			975		
65	西中富遺跡 (II)	板野郡板野町西中富	125			125		
66	東中富遺跡	板野郡藍住町東中富	760			550	210	
67	前須遺跡	板野郡藍住町徳命	876			625	251	
68	新居須遺跡	板野郡藍住町徳命	190				190	
		計	133,464					

## II 遺跡の立地と環境

### 1 地理的環境

柿谷遺跡以下2遺跡は、徳島県板野郡上板町に所在する。上板町域は吉野川左岸の中流域、阿讃山脈の南麓に位置する。上板町周辺においては、標高691.3mの大山が視覚的にも際だっているために大山を中心とした山塊とみることもできる。

柿谷遺跡は上板町泉谷字原地他に位置する。吉野川左岸には曾江谷川や宮川内谷川など大規模な扇状地が発展しているが、柿谷遺跡はそうした扇状地のうち、泉谷川による扇状地上に位置する。この扇状地は現在東端を流れている泉谷川とやや西寄りを流れる泉谷川の支流である鳶谷川との複合的な作用によって形成されている状況が観察される。

菖蒲谷西山B遺跡は上板町神宅字菖蒲谷に位置する。阿讃山麓から南へ伸びる狭少な尾根の先端部に位置する。

山田古墳群Aは上板町神宅字山田に位置する。菖蒲谷西山B遺跡と同様、阿讃山麓から南へ派生する尾根上に位置する。

### 2 歴史的環境

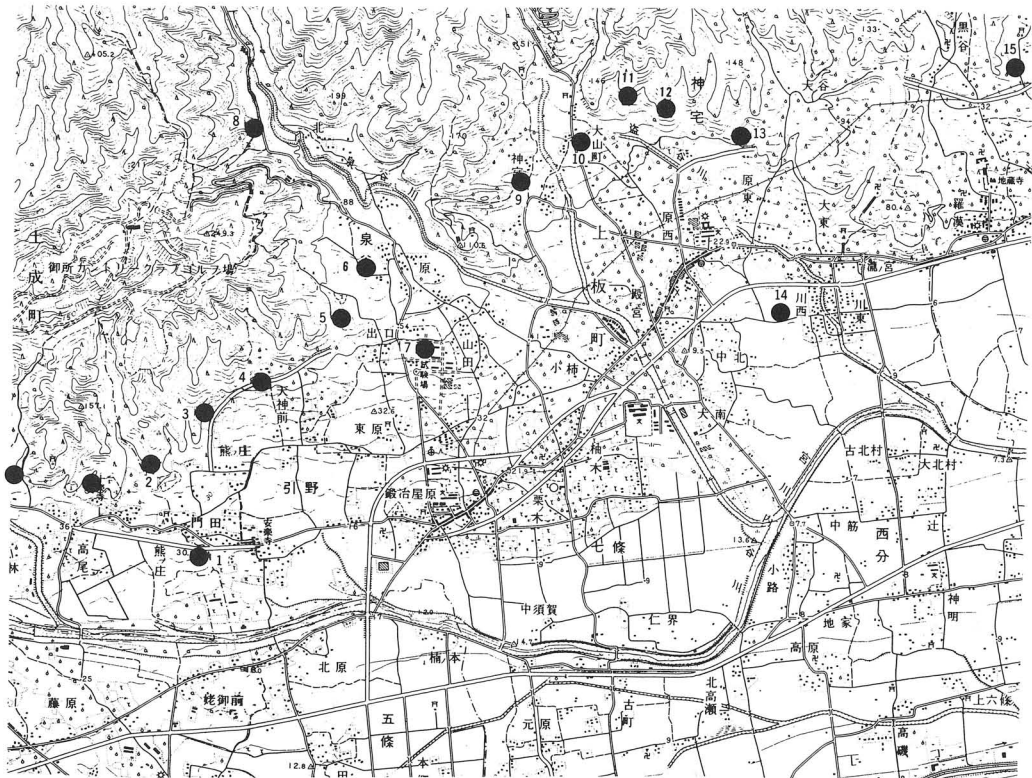
柿谷遺跡・菖蒲谷西山B遺跡・山田古墳群Aの周辺、上板町域を中心とする地域では平野部の調査がほとんど行われず、その遺跡も余り知られていないのが現状である。

旧石器時代の遺跡は隣接する土成町域と比較して、余り多くは知られていない。出口遺跡<sup>(1)</sup>・青谷遺跡<sup>(2)</sup>では、サヌカイト製の国府型ナイフ形石器が採集されているが、石器群全体の把握には至るような資料は未見である。

縄文時代の遺跡は県内全般を通して、調査例が乏しい。神宅銅鐸出土地周辺で、縄文時代後期の磨消縄文の施されたものがある。ただし、出土地周辺の試掘調査では当該期の遺物の包含層などは認められていない<sup>(3)</sup>。青谷遺跡出土の鉄形石鏃は縄文時代早期にさかのぼる可能性がある<sup>(4)</sup>。

弥生時代にも低地の集落は知られておらず、天神山遺跡などで弥生時代後期の遺構が若干検出されているが、土器の様相・集落の形態など不明部分が依然として多い。神宅銅鐸は果樹園の開墾中に出土したもの<sup>(5)</sup>で、佐原眞氏の分類で扁平鈕Ⅱ式に相当するが、該期の遺跡は周辺で知られていない。現品は東京国立博物館に保管されている。

弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての遺跡として安楽寺谷墳墓群と十楽寺山古墳が



- |            |             |             |           |
|------------|-------------|-------------|-----------|
| 1 土成丸山古墳   | 2 安楽寺谷墳墓群   | 3 天神山遺跡     | 4 青谷遺跡    |
| 5 出口遺跡     | 6 柿谷遺跡      | 7 畜産試験場内古墳群 | 8 和泉寺経塚   |
| 9 神宮寺遺跡    | 10 菖蒲谷西山A遺跡 | 11 菖蒲谷西山B遺跡 | 12 山田古墳群A |
| 13 神宅銅鐸出土地 | 14 神宅遺跡     | 15 松谷遺跡     |           |

第1図 周辺の遺跡分布図

ある。安楽寺谷墳墓群<sup>(6)</sup>は土器棺墓8基と舟形木棺をもつ2基の竪穴式石室が検出された。弥生時代終末から古墳時代初頭に位置づけられ、この年代における多様な主体部構造を示す遺構として注目される。十楽寺山古墳<sup>(7)</sup>は安楽寺谷墳墓群の主体部と類似した石室が検出されている。

古墳時代中期の土成丸山古墳<sup>(8)</sup>は県内の中期を代表する周濠を有する円墳である。墳丘径39～43mを測り、家形や盾形の埴輪を伴うことが明かである。円筒埴輪の外面の調整技法から、5世紀後葉に位置づけられる<sup>(9)</sup>。近接地域内に同年代の遺跡が知られていないため、その有数の規模に対する評価は十分に行われていない。5世紀代の人物埴輪が出土した遺跡として菖蒲谷西山A遺跡<sup>(10)</sup>がある。俗に「巫女」と呼ばれるもので、島田鬘・タスキ・オスヒを伴い、両手で壺を捧げ出す姿勢をとる。人物埴輪は5世紀の中葉に近畿地方で出現するが、この形態の人物は5世紀の末の段階には各地に拡散する<sup>(11)</sup>。そうした早い段階の人物埴輪として貴重な資料であるが、客土中からの出土で帰属古墳が明かではない点が惜まれる。

上板町の阿讃山麓は後期古墳の密集する地域として早くから認識されている。長谷川貞彦氏は「(前略) 神宅引野山などに里人百塚と云へるあり、古墳累々として並列せり」と百塚の伝承を紹介している<sup>(12)</sup>が、笠井新也氏が踏査した時点では2、3基づつ散在する状況であった。<sup>(13)</sup>百塚は現在の地名では失われており、その場所も比定も困難であるが、沖野舜二氏らは柿谷遺跡の南方の県畜産試験場付近をこれに充てている<sup>(14)</sup>。しかし、現況では古墳がまとまってみられる状況ではない。この地域において発掘調査が行われた後期の古墳群として、山崎古墳群<sup>(15)</sup>が挙げられる。横穴式石室を主体とする円墳による古墳群で、胴張り形態の玄室を有する1号墳は、従来説かれてきた忌部山形石室の分布範囲を越えるものとして重要である。また、本報告書に掲載する3つの古墳群との関連からも、内部構造・出土遺物において検討の対象となるものである。神宅遺跡<sup>(16)</sup>は古墳時代の遺跡として平地で調査された貴重な例であり、その出土遺物の年代から後期古墳の被葬者集団の集落の存在を予見させるが、現在まで明確な遺構は検出されておらず、遺跡の範囲も不確定である。後期古墳が多く調査されているだけに、平地の集落遺跡の実態解明が望まれる。

歴史時代に入ると、奈良から平安時代にかけての遺跡は非常に少なく、十楽寺遺跡や各遺跡出土の蔵骨器が知られる程度である。これらの他に、安楽寺跡・西光廃寺などこの年代の創建が想定される寺跡が存在するが、瓦片などの断片的な資料であり、詳細は不明である。十楽寺遺跡<sup>(17)</sup>では8～9世紀の窯跡に伴う灰原が検出されている。松谷遺跡<sup>(18)</sup>では中世の遺構が検出されているが、遺物・遺構ともに攪乱のため良好な状況ではなかった。山間部での集落の実態は阿波郡市場町日吉～金清遺跡<sup>(19)</sup>など数例の調査例にとどまっており、今後の調査が期待される。山田古墳群B<sup>(20)</sup>・大山寺の経筒<sup>(21)</sup>・和泉寺の経塚<sup>(22)</sup>その他にも蔵骨器の出土(上板町神宅字東山)や火葬墓が検出された例(板野町羅漢字磯尾)があり、大山の麓一帯が古代から中世にかけての墓域として認識されていたものとみられる。上板町から土成町にかけては、「条」を付す地名や直行する地割りから条理遺構の一部に推定されている<sup>(23)</sup>。

## 注

- (1) 天羽利夫「徳島県の遺跡」『日本の旧石器文化』3 雄山閣 1976
- (2) 「天神山遺跡・青谷遺跡」『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 1』徳島県教育委員会・(財)徳島県埋蔵文化財センター・日本道路公団 1993
- (3) A. 「試掘調査等」『徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol. 3 1991年度』(財)徳島県埋蔵文化財センター 1992  
B. 「試掘調査」『徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol. 4 1992年度』(財)徳島県埋蔵文化財センター 1993
- (4) 前掲書 注(2)

- (5) 『上板町史』上巻 1983
- (6) 「安楽寺谷墳墓群」『徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol. 3 1991年度』(財)徳島県埋蔵文化財センター 1992
- (7) 『土成町史』上巻 1975
- (8) 天羽利夫・岡山真知子・武蔵美和「土成丸山古墳調査報告」『徳島県博物館紀要』第18集 1987
- (9) 藤川智之「徳島県の埴輪に関する二、三の問題」『徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol. 2 1990年度』(財)徳島県埋蔵文化財センター 1991
- (10) 「菖蒲谷西山A遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol. 3 1991年度』(財)徳島県埋蔵文化財センター 1992
- (11) 藤川智之「人物埴輪からみた阿波の古墳時代」『鳴門史学』第8集 1993
- (12) 長谷川貞彦「阿波國の古器物及び遺跡」『考古学会雑誌』第2編第7号 1898
- (13) 笠井新也「阿波國古墳概説」『考古学雑誌』第4巻第4号 1913
- (14) 沖野舜二編『徳島県古墳調査報告』 1953
- (15) 「山崎古墳群」『掘ったでよ阿波』徳島県教育委員会・徳島県郷土文化会館 1988
- (16) 「神宅遺跡」『掘ったでよ阿波』徳島県教育委員会・徳島県郷土文化会館 1990
- (17) 「十楽寺遺跡」『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』徳島県教育委員会・(財)徳島県埋蔵文化財センター・日本道路公団 1994
- (18) 「松谷遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol. 3 1991年度』(財)徳島県埋蔵文化財センター 1992
- (19) A. 「日吉～金清遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol. 1 1989年度』(財)徳島県埋蔵文化財センター 1990  
 B. 「日吉～金清遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol. 2 1990年度』(財)徳島県埋蔵文化財センター 1991
- (20) 前掲書 注(3) B
- (21) 『徳島県の文化財』徳島県教育委員会 1954
- (22) 蔵田蔵「経塚論 11」『MUSEUM』第170号 1966
- (23) 福井好行「阿波の条理」「阿波の条理 補遺」『阿波の歴史・地理』1964



### III 柿谷遺跡



- 1 本章は四国縦貫自動車道に伴う、柿谷遺跡の発掘調査報告である。
- 2 発掘調査期間及び報告書作成の実施期間は次のとおりである。
  - ・発掘調査    1次調査    平成2年12月11日～平成3年3月1日（本調査）  
                  2次調査    平成3年12月26日～平成3年3月11日（試掘）  
  平成3年4月3日～平成3年4月16日（試掘）  
  平成3年6月7日～平成4年1月3日（本調査）
  - ・整理業務、報告書作成    平成5年4月1日～平成6年3月31日
- 3 遺物番号、挿図番号はすべて通し番号とした。

### III 柿谷遺跡

#### 1 調査の経過

##### (1) 調査の経過

柿谷遺跡は、四国縦貫自動車道建設予定地に石器片が多く分布していること、近隣の水田耕作中に石室の露頭が伝えられていることなどから、旧石器の散布地であり、かつ後期古墳や窯跡の存在が予想された。平成2年度以降に数度にわたる試掘調査が実施され、旧石器や横穴式石室が検出され、本調査を実施すべきであるとの結論に達した。

本調査は用地買収の進展に即して、二次に分けて行われた。第1次調査は平成2年12月11日から平成3年3月1日までの期間に1,000㎡が実施された。第2次調査は平成3年6月7日から平成4年1月3日までの期間に5,410㎡が実施された。それぞれの年次ごとの実施範囲は路線図に記入している（第2図）。

##### (2) 調査の方法

調査区は調査前の状態ですべて田畑として利用されていた。そこで基本的に現況の水田面一面を単位とし、第1次調査の際に1～5、第2次調査の際に6～14の調査区番号を設定し、年報の事業報告

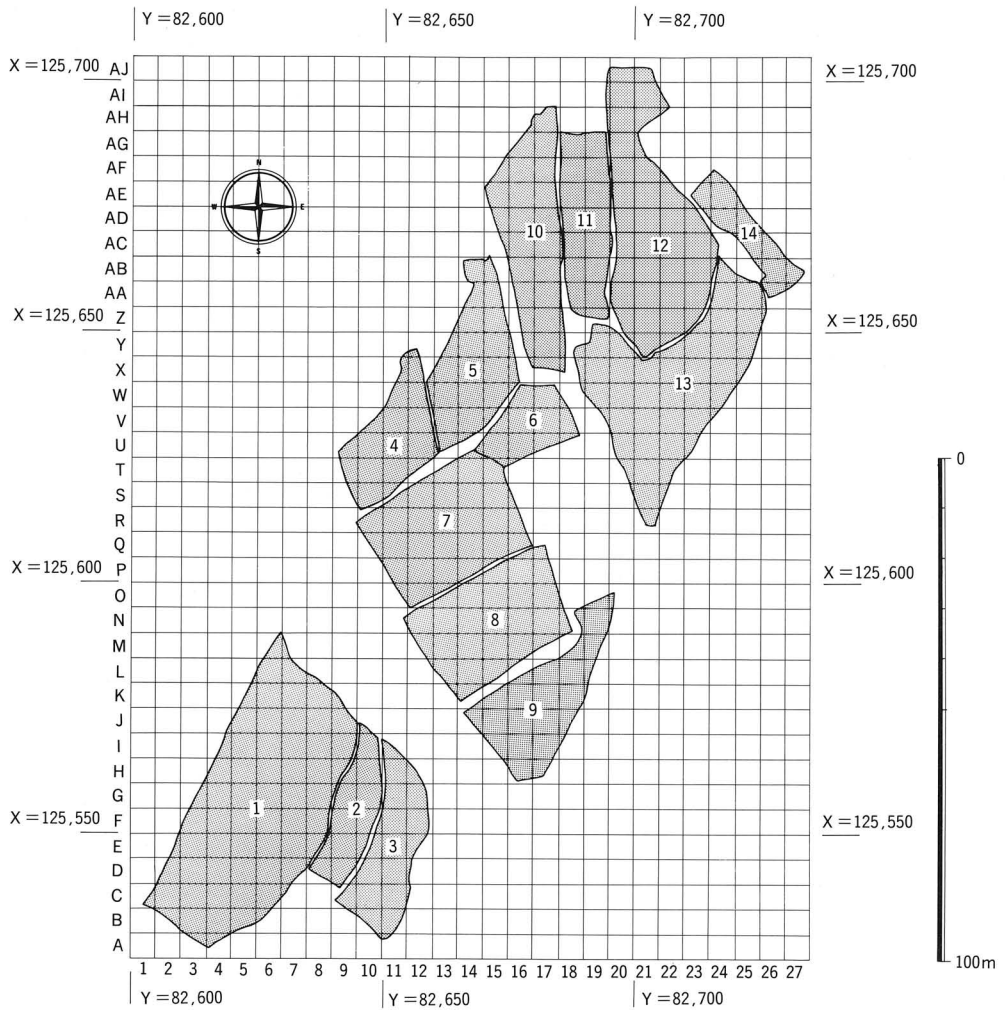
などにも掲載している。しかし、報告書作成の段階では二次にまたがる調査分を一括して扱うため、新たに西側の調査区より東へ1、2、3……となるように再設定している（第1図）。

グリッドは国土座標軸のX軸・Y軸を基に、5m×5mを単位として設定した。グリッド番号は東西方向（X軸方向）をアラビア数字で、南北方向（Y軸方向）をアルファベットで組み合わせて表記する。東西方向は1～27、南北方向はA～AJがあるため、南西隅がA-1、北東隅がAJ-27というグリッド番号となる。グリッド番号に関しても調査区番号と同様に報告書の段階で、整理を行っている。

調査区名	旧調査区名	調査区名	旧調査区名
1	6	8	3
2	5	9	7
3	4	10	10
4	8	11	11
5	9	12	12
6	1	13	13
7	2	14	14

第1表 報告書掲載の調査区番号と旧調査区番号





第1図 柿谷遺跡調査区・グリッド配置図

(3) 調査日誌抄

1次調査

1990年

12月25日 機械掘削開始・調査開始

1991年

1月7日 人力掘削開始

1月8日 SM1001検出

1月9日 SM1001掘り下げ

1月14日 SD1001検出・掘り下げ



写真1 平成2年度調査作業風景

- 2月5日 SM1001・SD1001実測作業開始
- 2月16日 現地説明会 約80名参加



写真2 平成2年度調査現地説明会風景

- 2月18日 同志社大学松藤和人氏・香芝市教育委員会佐藤良二氏現場見学
- 2月19日 クレーン撮影
- 3月6日 SM1001断ち割り
- 3月7日 撤収・調査終了

#### 2次調査

1991年

- 6月24日 機械掘削開始・調査開始
- 6月25日 人力掘削開始
- 6月26日 SM1003検出
- 7月9日 SM1004・SM1005・ST1003検出
- 7月10日 SM1004掘り下げ
- 7月11日 SM1004第2次床面検出
- 7月18日 SM1005実測作業開始
- 7月19日 SM1006実測作業開始
- 7月23日 SM1004第1次床面検出
- 7月30日 SM1003掘り下げ・4区流路検出
- 7月31日 ST1003実測作業開始  
SK1002検出
- 8月1日 第5調査区SD1001検出
- 8月2日 第5調査区SD1001掘り下げ
- 8月6日 SM1003第2次床面検出
- 8月7日 SM1007・SM1008検出

- 8月12日 SM1003実測作業開始
- 8月19日 SM1003第1次床面検出  
SM1008掘り下げ
- 8月22日 ST1009検出
- 8月28日 SD1004検出  
SM1007第2次床面検出
- 9月3日 小竪穴式石室墓群検出(ST1004～1008)  
SM1008床面検出、ST1009床面検出
- 9月4日 SM1007実測作業開始
- 9月5日 SM1002・SK1001検出
- 9月9日 第7調査区SD1002・1003検出
- 9月10日 第7調査区SD1002・1003掘り下げ  
小竪穴式石室墓群実測作業開始
- 9月19日 SM1002掘り下げ
- 9月26日 SM1007第1次床面検出
- 10月2日 SM1002床面検出



写真3 平成3年度調査クレーン撮影風景

- 10月4日 空中撮影  
(ヘリコプター、クレーン)
- 10月8日 徳島県市町村文化財保護審議会見学  
SM1002実測作業開始
- 10月19日 現地説明会約170名参加
- 10月24日 第9調査区SD1002実測作業
- 10月29日 SM1002排水溝検出
- 11月18日 SM1005・1006断ち割り
- 11月19日 ST1001検出



写真4 平成3年度調査現地説明会風景

11月26日 SM1007墳丘断ち割り

12月2日 ST1002検出

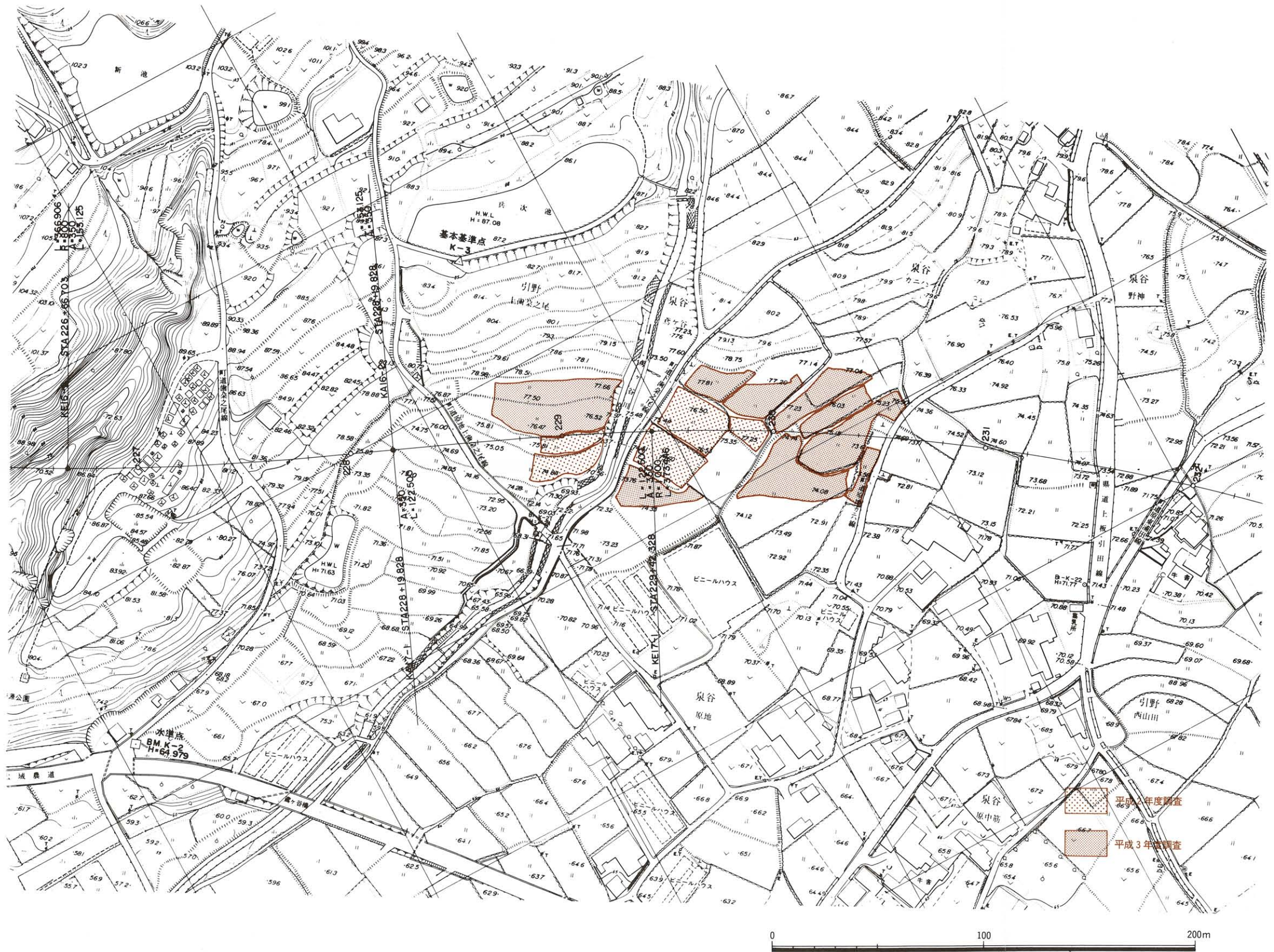
12月3日 SM1002断ち割り

12月11日 第14調査区完掘

12月12日 SM1004墳丘断ち割り

12月16日 SM1003墳丘断ち割り

12月24日 現地作業終了・撤収



第2図 柿谷遺跡調査区位置図

## 2 調査成果

二次にわたって調査の行われた調査区は14であり、これらにおいて検出された遺構は以下の通りで、その位置関係は図の通りである（第3図）。

横穴式石室を主体とする古墳 8基

小竪穴式石室 7基

土壙墓 2基

土坑 2基

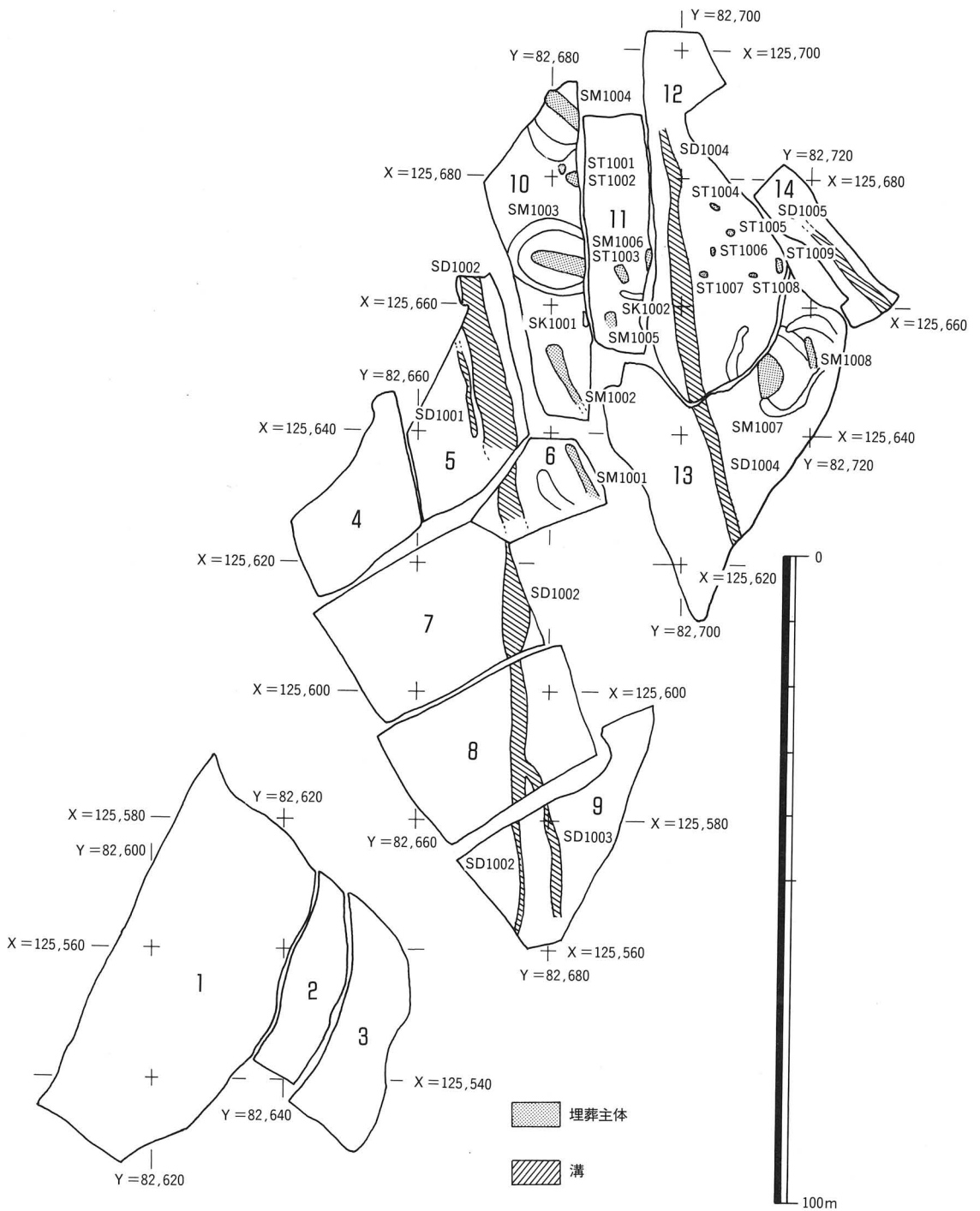
溝 5条

以下では、遺構の分布状況などから14を数える調査区を四つに分けて報告する。まず、鳶谷川の西側の遺構が検出されなかった調査区（第1～第3調査区）を一括して扱う（A）。旧石器や須恵器が出土している。第4～第9調査区では調査範囲を南北に縦断する溝（SD1002・1003）があり、溝を含む6つの調査区をまとめる（B）。1号墳（SM1001）が含まれる。第10・11調査区では、古墳がもっとも密集して検出された。面積上はやや小さいが、2～6号墳（SM1002～SM1006）などを報告する（C）。第12～第14調査区は、2基の古墳（SM1007・SM1008）・6基の小竪穴式石室（ST1004～ST1009）・2条の溝（SD1004・SD1005）が検出され、それぞれの位置関係が重要な意義をもつ（D）。

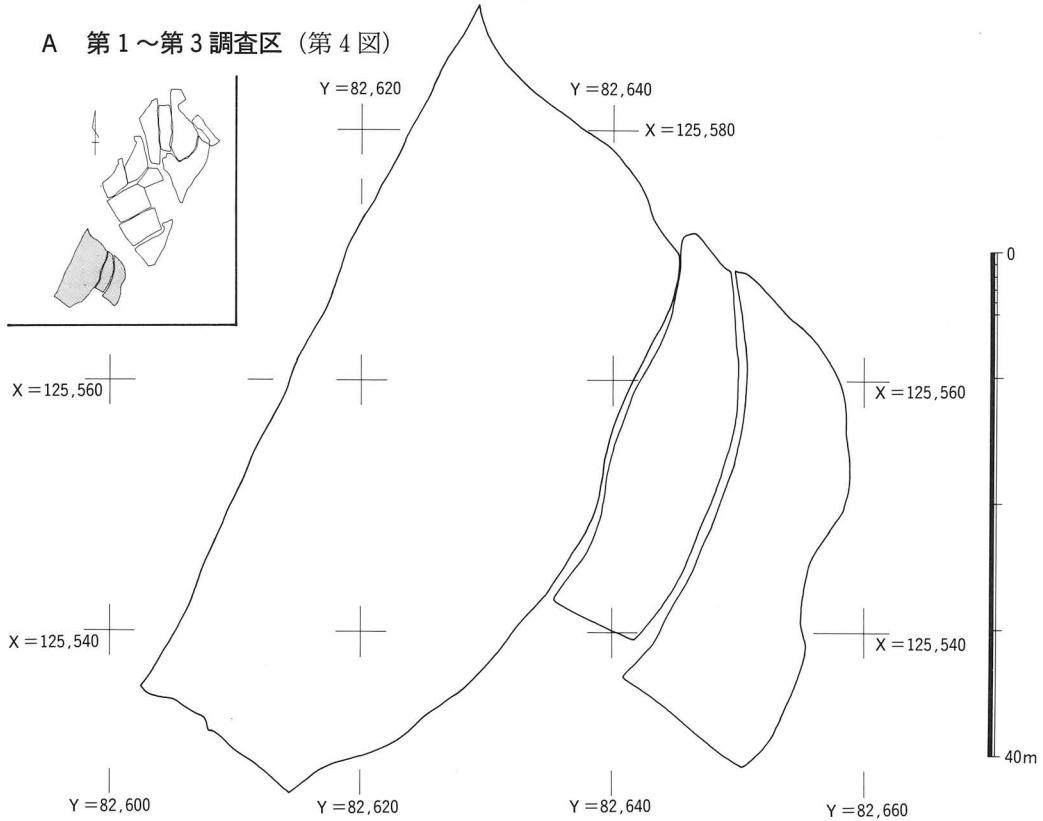
検出された遺構については、年報段階では、調査区名と同様に調査段階でつけられた番号を用いていた。しかし、報告書を作成する段階でそれぞれが報告する順となるよう南西から1、2、3……となるよう再設定している（第2表）。

遺構番号	旧遺構番号	遺構番号	旧遺構番号
SM1001	SM1001	ST1001	ST1006
SM1002	SM1012	ST1002	ST1007
SM1003	SM1002	ST1003	SM1004
SM1004	SM1003	ST1004	ST1005
SM1005	SM1005	ST1005	ST1004
SM1006	SM1006	ST1006	ST1003
SM1007	SM1007	ST1007	ST1002
SM1008	SM1008	ST1008	ST1001
		ST1009	SM1009
		SD1001	SD1005
		SD1002・3	SD1001・2
		SD1004	SD1003
		SD1005	SD1006

第2表 報告書掲載の遺構番号と旧遺構番号



第3図 柿谷遺跡遺構配置図

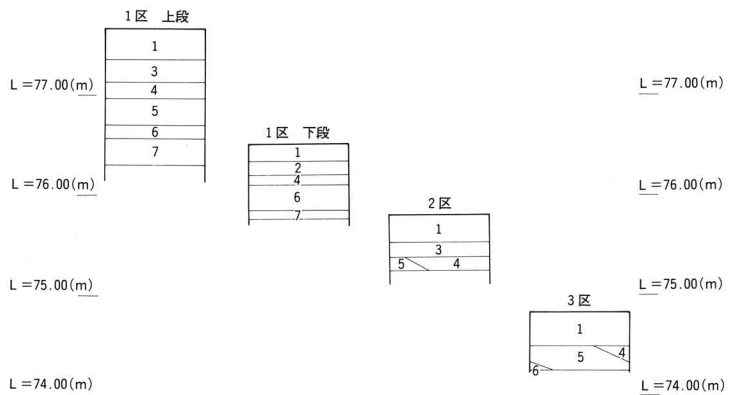


第4図 第1～第3調査区外形図

本章では、第1～第3調査区について触れる。これらの調査区においては、遺構は検出されなかった。しかし、旧石器・石鏃・須恵器がそれぞれ数点ずつ出土し、調査区外の北東部方面にこれらの属する時代の生活面あるいは古墳が存在するという想定が成り立つ。

現況と堆積

調査前の調査区の状況は、第1調査区が2面、第2・第3調査区がそれぞれ1面ずつとなる水田となっていた。それぞれのおおよその標高は第1調査区



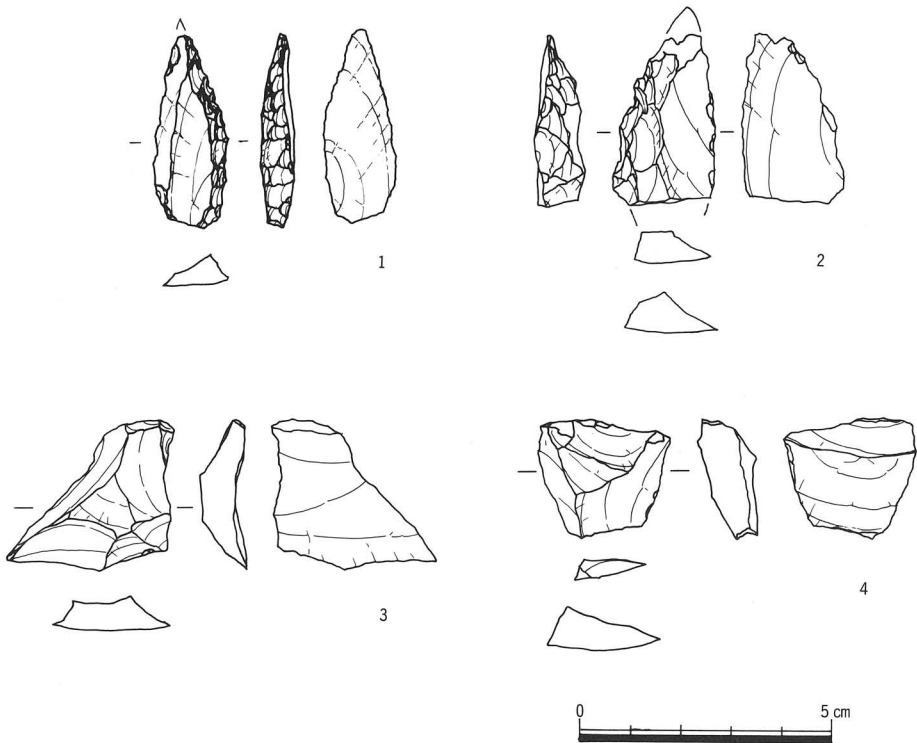
- |                    |                    |
|--------------------|--------------------|
| 1 耕作土・床土           | 5 にぶい赤褐色5 YR5/4砂質土 |
| 2 攪乱               | 6 にぶい黄橙色10YR6/3砂質土 |
| 3 にぶい黄橙色10YR7/2砂質土 | 7 にぶい黄橙色10YR6/3砂質土 |
| 4 にぶい黄橙色10YR6/3砂質土 |                    |

第5図 第1～第3調査区堆積土柱状図

上段が77.50m、同下段が76.47m、第2調査区が75.81m、第3調査区が74.84mである。従って、本来南東方向への緩やかな傾斜をもっていたとされる地形であった箇所が、開墾によって一段ずつの平坦面として大きく改変されていることになる。

堆積はおおむね地形の傾斜に沿って堆積しているが、多少調査区ごとにあるいは地点によっては異なる状況が観察される。表土及び無遺物層である基盤層は共通である。4面の調査区のうちもっとも堆積が良好に残っている第1調査区上段では、表土を含め7層が堆積していた。いずれの層も砂質土ではあるが粘性を強くもつ。砂岩の風化礫を含むが、その含有の度合いは各層ごとに異なる。これらのうち、須恵器を含む古墳時代後期の遺物は第3層中で、旧石器は第5層上面で検出された。第3層については出土状況からみて、古墳時代の包含層とみることが可能である。第5層上面では石器が群として安定した状態で検出されず、同時代の文化面であったかどうかは明らかにすることができなかった。こうした状況はその他の調査区でも該当している。

#### 出土遺物



第6図 第1～第3調査区出土旧石器

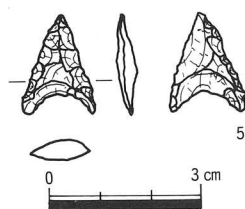


## 旧石器 (第6図)

1と2はナイフ形石器である。1は翼状剥片を素材としたチャート製の国府型ナイフ形石器で、先端部・基部は欠損している。打面を含む縁辺部を急斜度の剥離によって鋸歯状に加工している。また、刃部側の基部にも調整が施されている。長さ38.30mm、幅15.25mm、重さ3.60gを測る。第12調査区出土のナイフ形石器(315)よりもかなり大形であり、素材の用い方も異なる。2はサヌカイト製で横長剥片を素材としている。加工は粗目の剥離によって鋸歯状に仕上げられている。下半部は欠損している。刃部に沿って微細な剥離がみられる。長さ35.15mm、幅20.40mm、重さ5.77gを測る。3と4はサヌカイト製の剥片である。3は背部には多方向からの剥離痕がみられる。4は横長剥片である。

## 石鏃 (第7図)

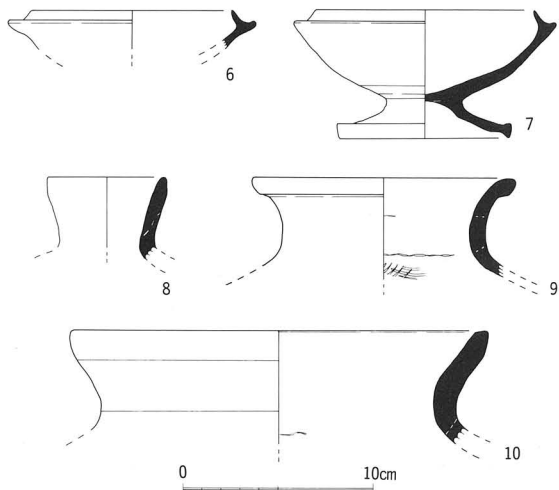
5はサヌカイト製の凹基無茎石鏃である<sup>(1)</sup>。柿谷遺跡出土のものの中では小形である。基部は抉りは深く入っている。両側縁には細かい調整が多く施されている。



第7図 第1～第3調査区出土石鏃

## 須恵器 (第8図)

出土した須恵器はいずれも小片となっており、復元によって全形が明らかとなったものは高杯のみである。杯身・短脚高杯はいずれも立ち上がり短く、内傾して直線的に伸びる。高杯の脚部は短脚化が進行して脚柱部分をほとんどもたない。脚端部は上下に拡張している。田辺昭三氏の須恵器編年<sup>(2)</sup>(以下略)においてTK209～TK217型式に属するものである。瓶類の口縁部は、体部が欠損しているが平瓶と見られる。外面にオリブ灰色の自然釉が付着する。2個体が識別

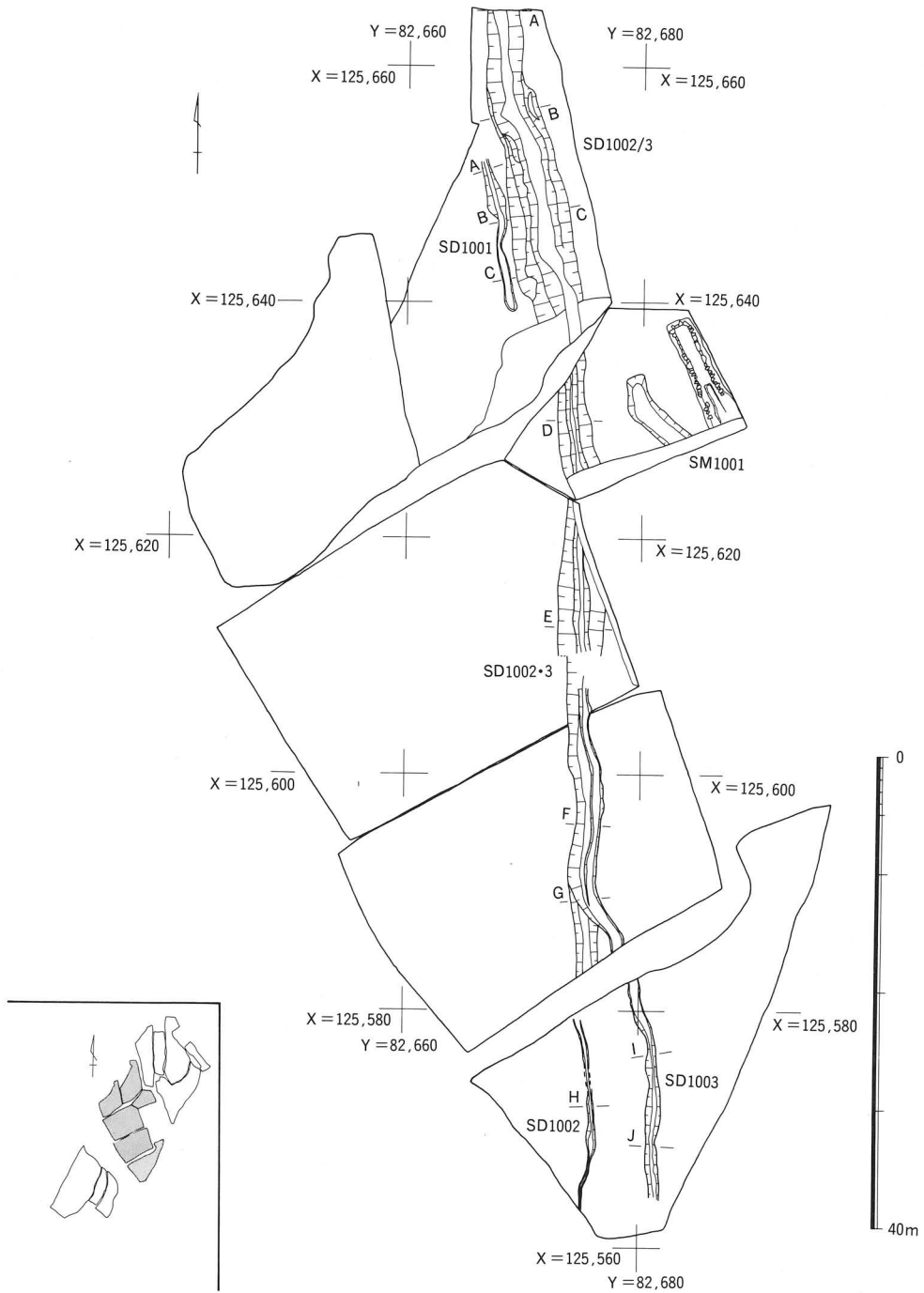


第8図 第1～第3調査区出土包含層須恵器

された甕は法量に相違がある。9は体部最大径35cmくらいの小形のものであろう。10の口縁部は器壁が厚く、拡張せず突帯ももたないもので、より新しい傾向をもつ。

出土した須恵器の年代は7世紀の初頭から前半にかけての時期に位置づけられる。鳶谷川以東に展開する古墳群の築造の中心の時期と比べて、やや新しい方へのずれが認められる。このことは周囲に広がり予想される古墳群の年代やその性格付けの点で重要な意味合いをもつものである。

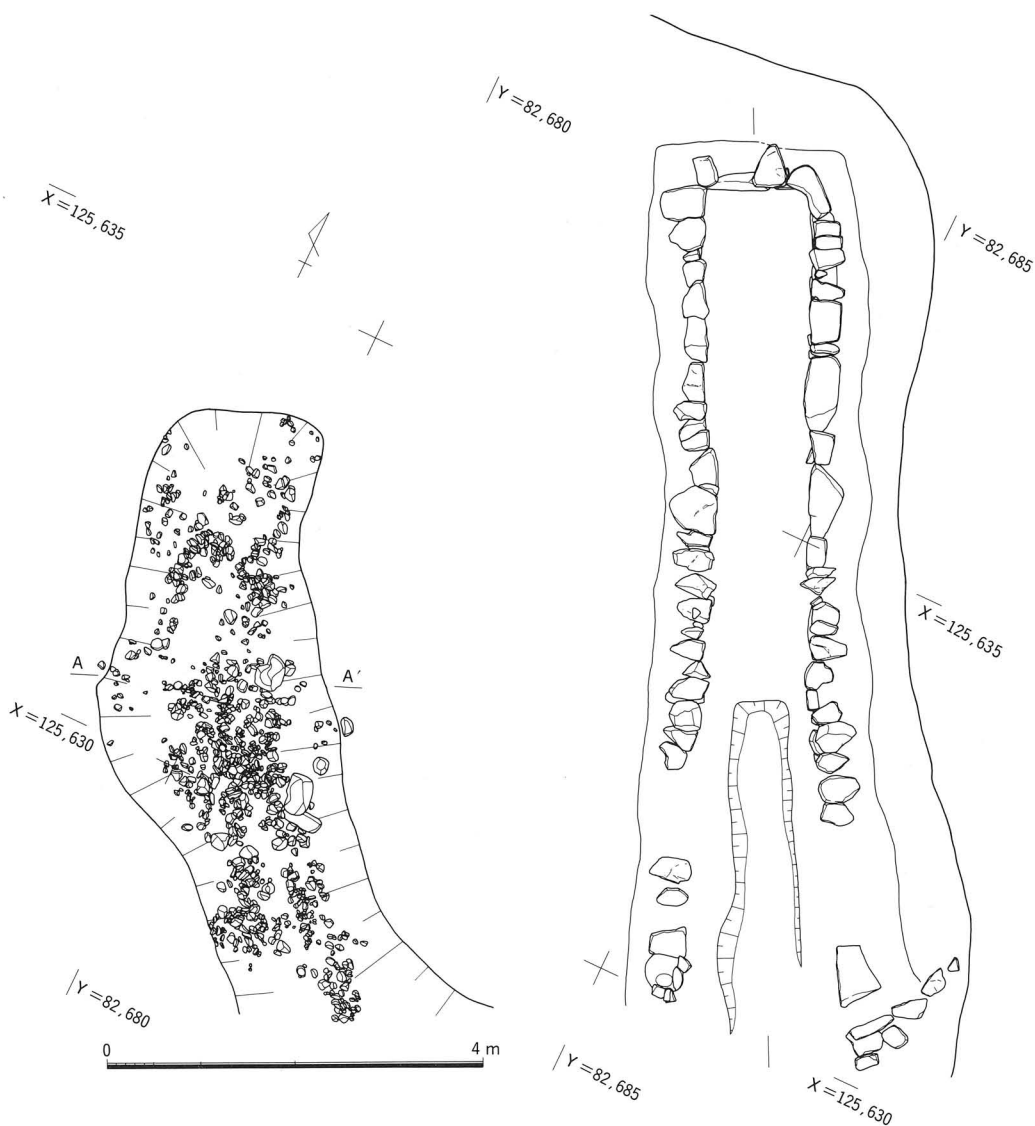
B 第4～第9調査区 (第9図)



第9図 第4～第9調査区遺構配置図

ここで報告する範囲は、第4～第9調査区である。これらの調査区のうち、第4調査区では遺構はまったく検出されず、出土遺物もきわめて少なかった。第6調査区では、横穴式石室を主体とする円墳が検出され(1号墳)、その西裾に接するように第5～第9調査区にかけて南北に溝が走る。この溝は第8調査区において二股に分かれており、二股の部分のうち西の溝をSD1002、東の溝をSD1003とする。

### 1号墳 (SM1001)



第10図 SM1001全体図

## 位置と現状

第6調査区の東半、U～W-16～18グリッドにおいて検出された横穴式石室を主体とする円墳である。調査前の状況では水田として利用されていたため完全な平坦面となっており、墳丘などは大幅な削平を受けている。特に第9調査区と第13調査区との間には2m近い比高差があり、器械力による比較的新しい地形の改変があったと考えられ、1号墳の西側の墳丘・周濠の遺存状態はきわめて悪い。横穴式石室の埋土中には、石室に用いたと想定される大量の石材が落ち込んでいる(第12図)。堆積は基本的には平行であるが、部分的に新しい攪乱を受けている。

## 墳丘

墳丘は若干の盛り土を残してはいるが、ほぼ平坦に削平されており、高さなどは復元できない。周濠の形態から、墳丘は横穴式石室の主軸方向に長い楕円形で、径は約12mに復元される。基盤層の10～40cmの堆積上に、盛り土を行っているが、残存するのは10cm足らずである。堆積は灰白色が中心となる砂質土であり、中心部より裾へ下がる傾斜を有する。互層などの堆積の規則性は認められなかった。

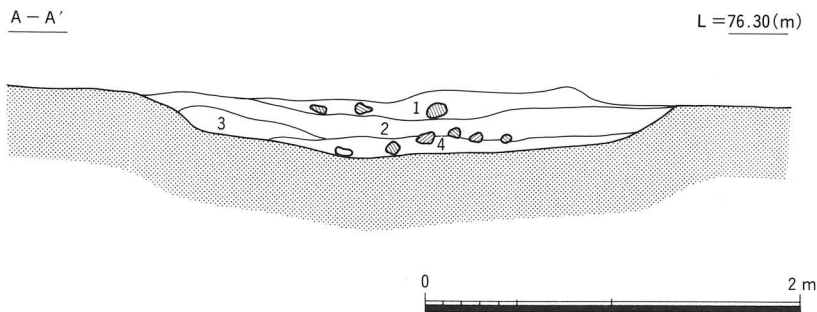
## 周濠

周濠は著しい削平のためその一部を残すのみであった。検出延長は6.5mである。現状では横穴式石室の南西部に円形に巡っているが、周濠の北部において徐々に浅くなっていることより、基本的には墳丘の全周または開口部を前面とする半周に巡っていたことが想定される。その規模は幅が1.6～2.1mで、深さはもっとも深い箇所でも0.3mであった。周濠内の堆積土は4つに分層が可能であったが、黄褐色系の砂質土が中心である(第11図)。その最下層中、周濠底全体

には拳大の砂岩礫が多くみられた。

古墳の破壊と周濠

内の堆積がどのよ



1 にぶい黄色2.5Y6/3砂質土      3 淡黄色2.5Y8/4砂質土  
2 にぶい黄色2.5Y6/4砂質土      4 淡黄色2.5Y8/3砂質土  
第11図 SM1001周濠土層図 (断面ポイントは第10図に図示)

うな過程で進行したかが明らかでないために、これらの礫は性格は決しがたい。

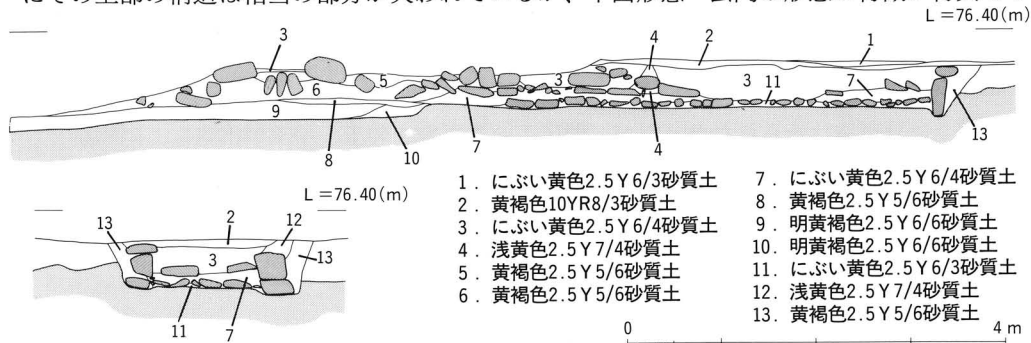
周濠内からは小破片となった須恵器が比較的多く出土したが、復元によってほぼ2個体(42・43)にまとまり余分の破片が少なかったため、周濠内で意図的に破碎された可能性がある。後述するように、横穴式石室内出土のものと大きな時期の隔たりは認められない。

## 墓壇の規模・形態

墓壇は、墳丘がどの程度削平されているか不明であるが、墳丘の盛り土を10cm程度盛った時点で掘り込まれている(第12図)。自然堆積の砂質土を含めた掘り込みは50cmに及び、基盤層だけでも約15cmの掘り込みとなる。奥壁や立石の掘り方の深さは石材の形態により増減する。奥壁部分・基底石に板石を立てて用いている箇所、立石を用いる玄門・前門部分ではさらに若干の掘り下げが行われている。形態は基本的に長方形であるが、羨道部分より緩やかに外側へ広がってゆく。その規模は全長が9.10m、幅は奥壁部の一番狭い箇所で2.11m、玄室中央部分で2.18m、開口部のもっとも広い箇所で3.11mである。石室全長より墓壇が小規模であるのは、開口部付近が失われているためである。

## 石室の構築状況

主軸を南北からやや西に振ったN-26°-Eにもつ横穴式石室である(第13図)。墳丘とともにその上部の構造は相当の部分が失われているが、平面形態・玄門の形態の特徴が特異なも



第12図 SM1001横穴式石室内堆積土層図

のである。玄室は若干の歪みが見られるものの長方形である。2箇所に立石を設ける副室構造であるが、玄室・前室・羨道がいずれもその幅を違えず、玄門・前門の突出がない「疑似両袖」の形態をもつ。前門についてはその平面的な位置に1石分のずれが見られ、副室構造が退化している様子が観察できる。玄室の平面形態は基本的に長方形であるが、中央部よりやや奥壁に近い箇所に最大幅があり、わずかな胴張りの傾向を見いだすことができる。2段目が残る奥壁部分では石材を斜めに積む三角積みにしており、コーナー部の丸みは上段へゆくほど徐々に増すことが想定される。

玄室奥壁部はやや横長の板石を小形のものごとを組み合わせ、2段目以上は小口積みとしている。いずれも厚みはさほどない。玄室の側壁は奥壁同様の横長のものを腰石として巡らせている。板石を立てる部分では、小礫を用いた裏込めを行っている場合がある。前室・羨道及び玄門付近では、玄室と比較して小形の石材が用いられる傾向がある。前室・羨道部は開口部に向け徐々に幅が広がる。

石室各部の計測値は全長9.39m、玄室長4.14m、玄室の奥壁部の幅1.11m、中央部の幅1.15

m、玄門部の幅0.93m、前室長0.96m、前室幅1.14m、羨道部長3.73m、羨道部の前門部の幅1.14m、開口部での推定幅2.04mである。

## 床面の形成

### 第一次床面（第14図）

墓壙を掘削の後に、平たい礫による礫床を敷いている。その際の整地土は5cm以下で薄い堆積を示す。用いられている礫の規模は一辺5～20cmのものが中心である。石材は奥壁部分では壁沿いに敷き詰め、さらに玄室中央部分でも幾分直行する石目の並びがみられる。玄室内を区画するための施設か、棺を設置する施設である可能性が高い。いずれの可能性にしても礫床上の埋葬の痕跡が全くみられなかったため、断定するのは困難である。玄門よりの半分については、礫の敷き詰め方に粗さがみられ、平坦さも損われている。礫床の下部では壁面沿いを中心に一辺5～10cmの小礫を充填することにより、面の平坦を整えている。床面のレベルは標高75.7mである。

### 遺物の出土状況

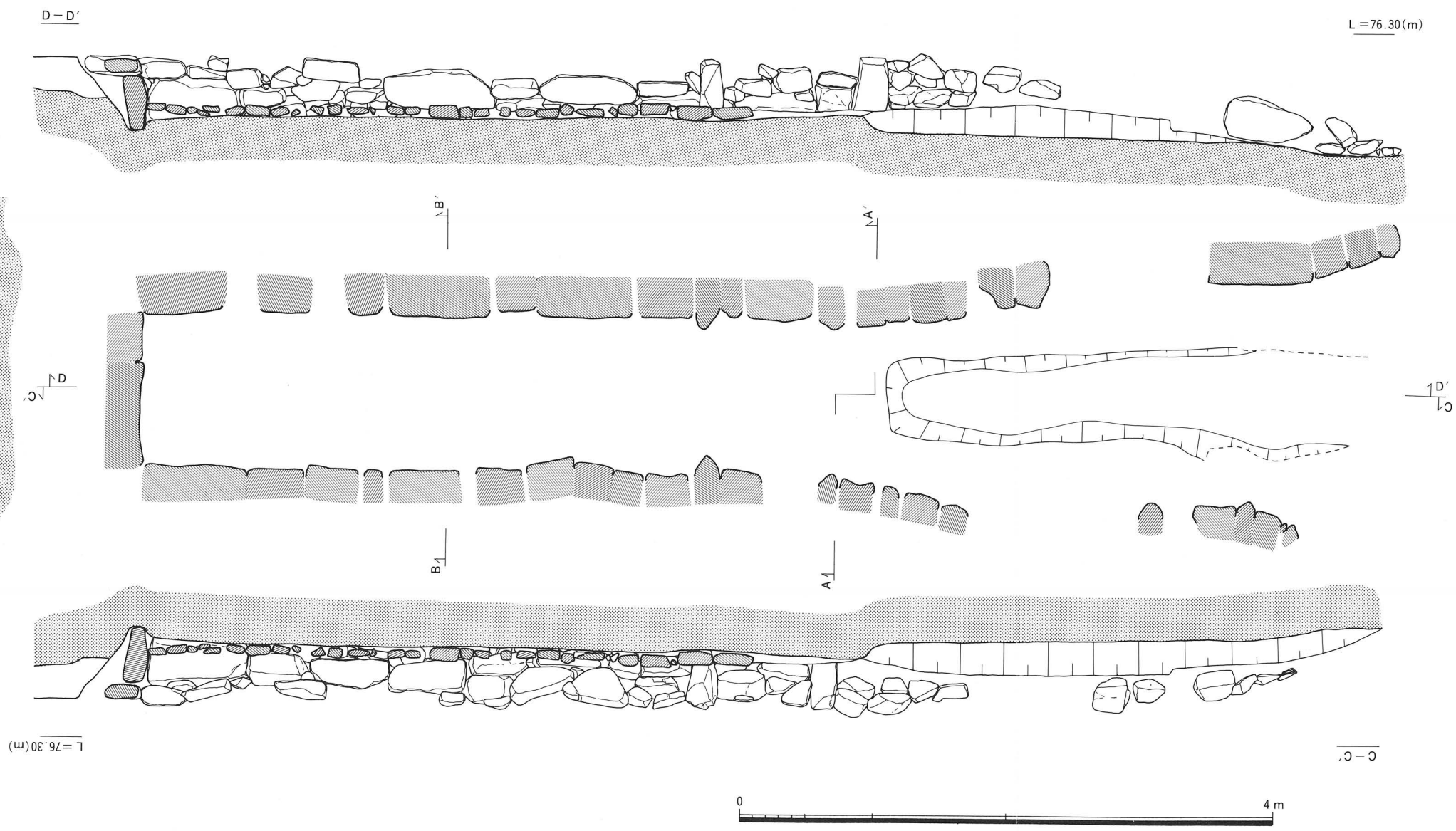
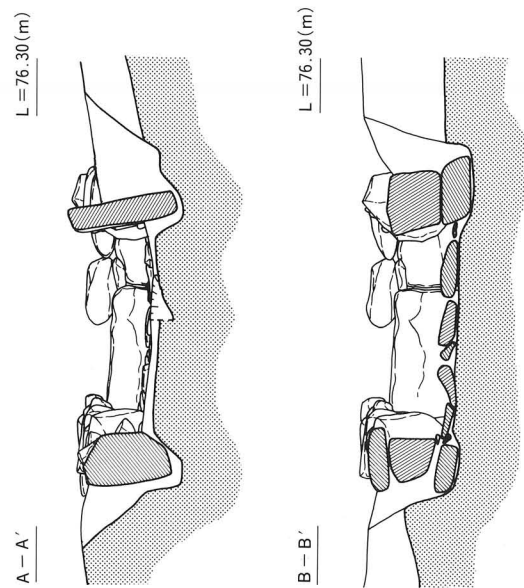
礫床上には遺物はみられなかったが、礫床下から耳環、勾玉、平玉が出土し、副葬品としてこれらの装飾品を伴っていたことが明らかである。ただし、出土位置が集中しておらず、奥壁よりの区画内にも取まっていないことから、この面における複数回の埋葬の可能性を示唆するものである。

### 第二次床面（第15図）

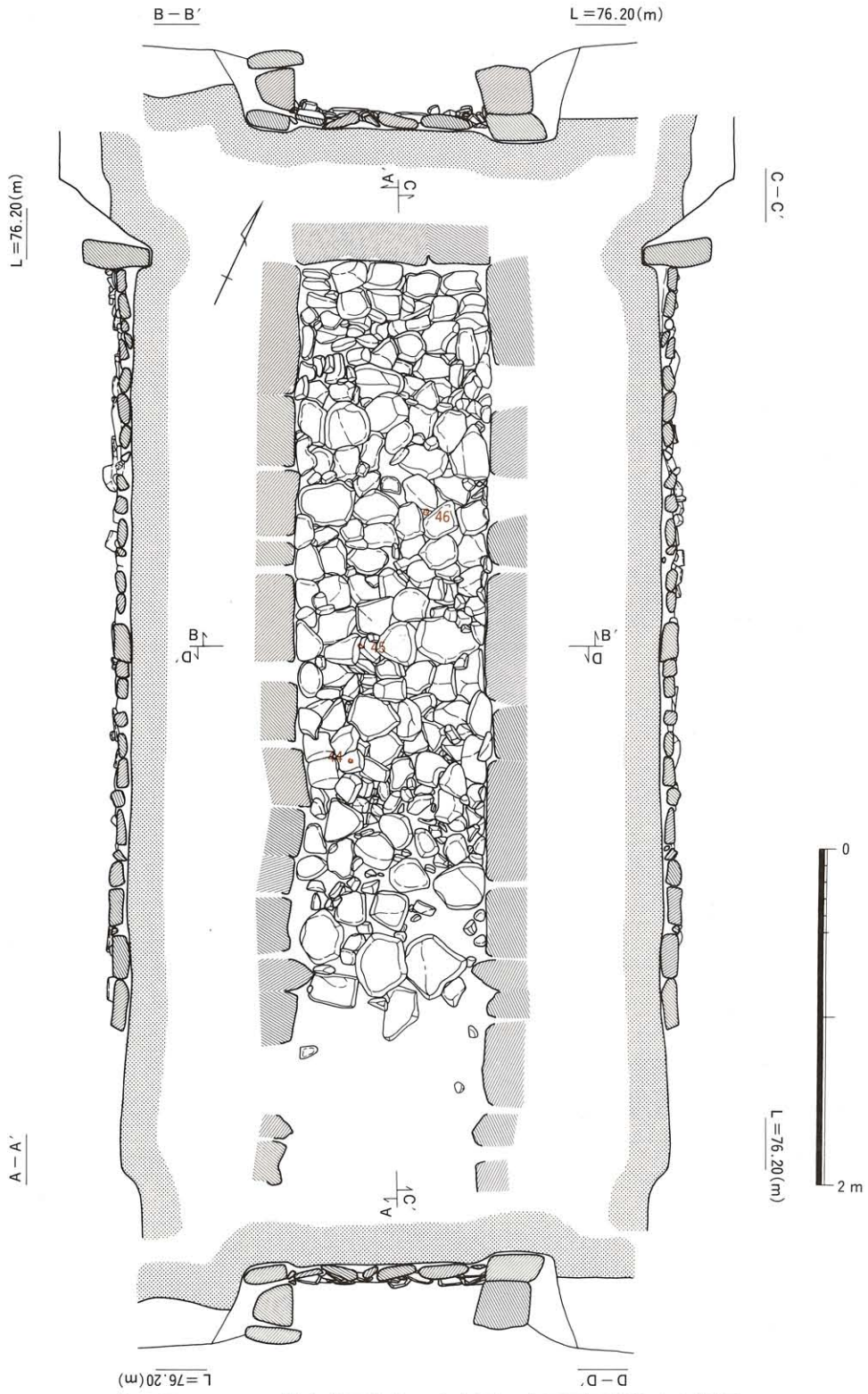
先に形成された第一次床面の礫床上に若干の整地土を敷き詰め、一辺約50cmの砂岩の円礫を用いて築く。この床面のレベルは標高75.8mである。玄門部よりの玄室内部では石材を大きめの石材を二列に敷き、間の部分を小礫で埋めている状況がよく残っている。奥壁に近い部分では礫がかなり失われており、この時点ですでに下位の第一次床面の存在が明かとなった。また、前室部分でみられた礫については、面を揃えており礫床との境界を見いだすことができなかったが、排水溝に伴う蓋石である可能性が指摘できる。床面上には須恵器片が数点出土しているが、遺物の型式に基づけばこの床面の埋葬に伴うのではなく、第一次床面への副葬後の二次的な移動による可能性もある。

### 遺物出土状況

遺物はきわめて少なく、玄門近くに2点の須恵器（17・23）がみられるのみである。この蓋杯については、遺物の項で詳しくみるが、横穴式石室内出土の須恵器の中でもっとも古い型式上の特徴をもっており、第一次床面に伴う土器が追葬の際にこの位置へ動いた可能性が高い。

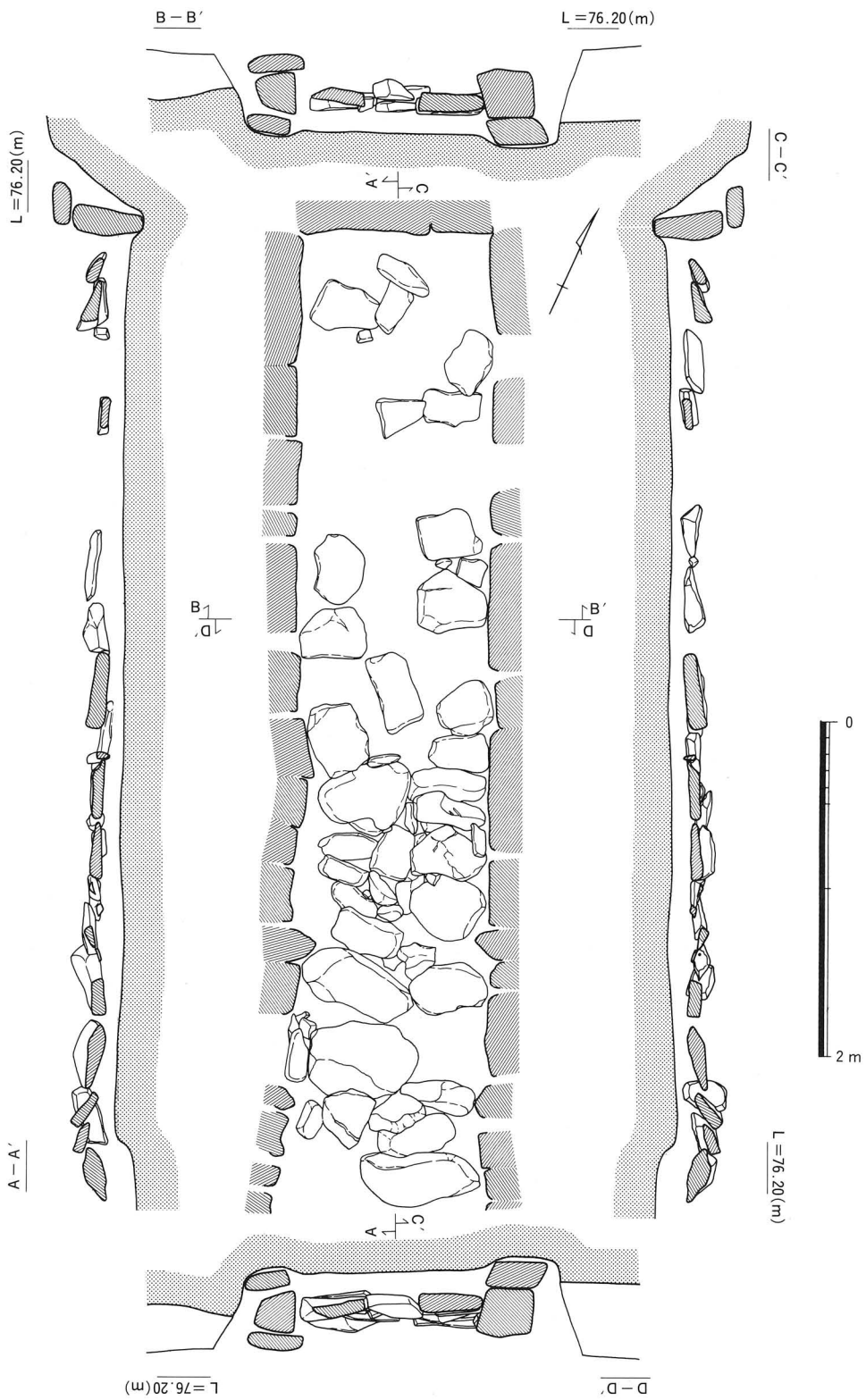


第13图 SM1001横穴式石室实测图



第14図 SM1001横穴式石室第一次床面・床面下層遺物出土状況





第15图 SM1001横穴式石室第二次床面

## 排水溝

排水溝は玄室内から前庭部にかけて直線的にのびる形で検出された(第16図)。溝のみの主軸は、横穴式石室と同じN-26°-Eである。長さが3.47m、幅は玄室に近い部分で0.56m、もっとも幅の広い外側の部分で0.84mである。開口部方向へのごくわずかな傾斜をもつ。溝内の堆積は2層に分層されたが、いずれも黄褐色の砂質土で基本的な平行であることから、意図的に他所の土を運んで埋めたものではないことや攪乱はこの部分まで及んではないことがわかる。

1号墳の横穴式石室で出土した土器のうち、そのほとんどは排水溝の上面及び溝内の堆積土中より検出された。上面で検出された土器のうち数個体については、完形品も含まれているが、破損したものが広い範囲に散っており、追葬あるいは盗掘が行われた際に持ち出されて投棄されたものである。また、底面よりサヌカイト製のスクレイパー2点が出土しているが、どのような状況で持ち込まれたかは不明である。

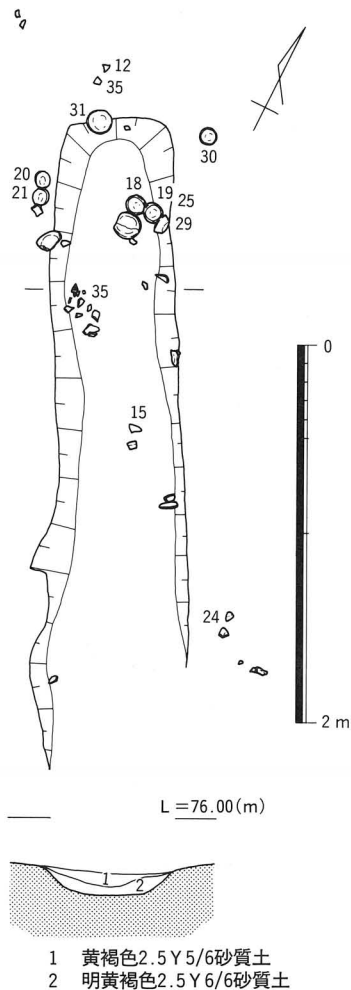
## 出土遺物

### 玄室内出土遺物(第17・18図)

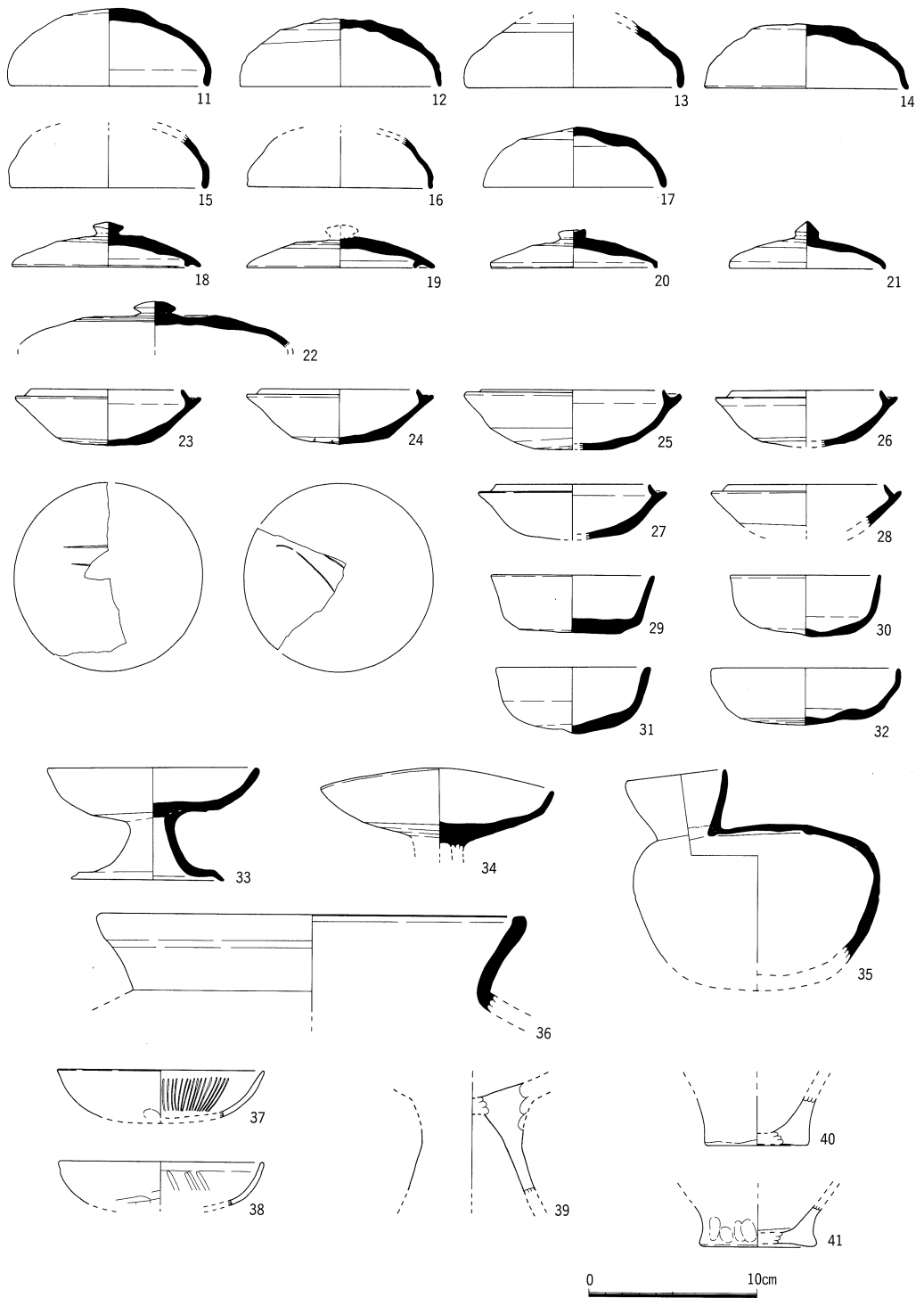
#### 須恵器(11~36)

蓋杯は23点が出土しているが、法量・形態にバリエーションが多くグルーピングが可能で、追葬による複数回の副葬の段階が土器によって逐える。第一のグループには杯蓋11~17の7点、杯身23~28の6点が含まれる。杯身は口径にややばらつきがあるものの、杯の深さに比して短く内傾する立ち上がりは共通する要素である。杯蓋もやや法量が一定していないが、杯身とは対応するものである。やや復元径に問題はあるが、色調・調整の共通点から12と26はセットであろう。また、11・14・15は軟質

の焼成で白っぽい色調、ヘラ切り後の調整を行わない点で共通しているが、これらとセットとなる杯身はみられない。12・24・26・27にもヘラ切り後の調整は施されていない。16は硬質の焼成で非常に器壁が薄い点が際だっている。23には2条の、24には非常に弱い2条のヘラ記号がある。第一のグループはTK217型式に相当する。第二のグループには杯蓋18~21の4点、杯身29~32の4点が含まれる。このグループの杯蓋には内面のかえりのあるものとな



第16図 SM1001排水溝遺物出土状況・堆積土層図



第17图 SM1001横穴式石室内出土土器

いものとでさらに二分することが可能であるが、かえりの時期差が明確な画期となりうるか、という問題点をクリアできないためここでは一括して扱う。18・20・21の焼成・色調に認められる類似、つまみの形態もその一因である。これらの中で19と29、20と30または31はセット関係をなすものである。このグループは飛鳥Ⅲ～Ⅳ式に相当する<sup>(3)</sup>。第三のグループに属するのは杯蓋22のみである。やや大形の口径に非常に偏平な器高をもつ。宝珠形の花つまみは原形をとどめないほど退化して偏平となっている。きわめて軟質の焼成である。飛鳥Ⅴ式に相当する。

高杯2点はともに無蓋高杯である。33は完形品で短脚で、端部に向けて水平に開くもので、端部が斜め下方へ強く拡張する。柿谷遺跡出土の高杯の中でももっとも新しい要素をもつ。34は杯部が大きく歪んでいる。やはり短い脚部がつくものであろう。杯の第一のグループに伴うものと考えられる。

平瓶35は体部下半を欠く。体部の最大径が上位寄りにある。口頸部中位には、2条の沈線が巡っているが、きわめて弱いために凶化していない。体部内面粘土板充填の痕跡が、外面からも観察できる。

甕36は口縁部のみの破片で、口縁端部の上面に平坦面をもつ滑らかな器形である。

#### 土師器 (37～39)

杯37・38は緩やかなカーブを描き、口縁端部がわずかに外反するものである。ともに外面は静止ヘラ削り、内面は放射状暗文がみられるが、単位などにやや違いがある。実測できなかった破片も含め3個体が確認された。また、杯と同様の胎土を有しているもので、甕とみられる頸部片もみられるが、小片のために凶化できなかった。胎土はいずれも精選されたもので、混入砂粒もきわめて少量である。第一のグループに並行する飛鳥Ⅰ～Ⅱ式の杯Cにあたる。

高杯39はごく一部の破片であるが、器壁が厚く、2号墳出土のもの(99・100)よりもやや大形となるものであろう。杯や甕とは異なり、胎土はやや粗く、結晶片岩の微細粒のほか大粒の砂粒を混入する。

#### 弥生土器 (40・41)

2点ともに底部の破片であるが、体部の立ち上がりの角度は急で甕形土器の一部であろう。胎土は密であるが混入砂粒が多く、40には結晶片岩を含む。41の内面にはヘラケズリの痕跡がわずかにみられるが、遺存状況は悪い。弥生時代中期から後期にかけてのものと思われる。

#### 装身具類 (42～44)

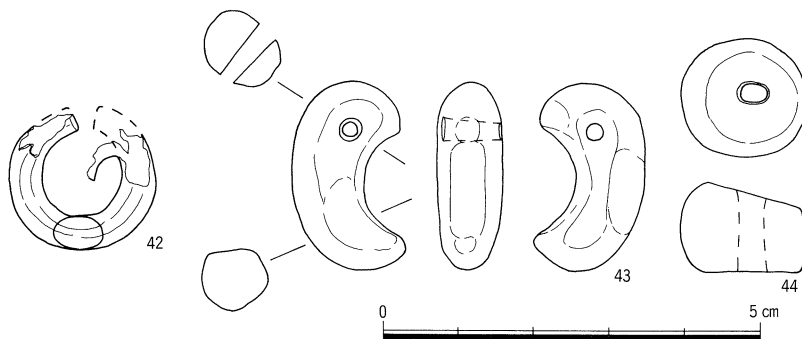
3点とも第一次床面の下部より出土したものである。

耳環42は銅芯銀張りで縦径17.40mm、横径19.50mmの小形のものである。端部は2箇所とも

表面が剥離するなど、遺存状況は不良である。対となるべき耳環は出土していない。

勾玉43はひすい製で、材質はさほどよくはないものの遺存状況はよい。頭・尾の部分の湾曲が少ないが、

頭部はやや角ばり、背が直線的となる中間部分の長い形態である。穿孔は主として図左側側面より行われている。

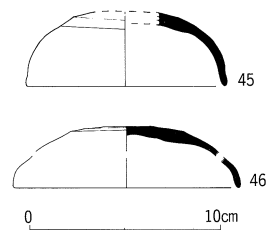


第18図 SM1001出土装飾品

平玉44は滑石に近いやや粒子の粗い軟質の石材を用いた平玉である。丁寧な研磨により、非常に平滑に整えられている。穿孔は両面より行われており、その形態も不整形である。

#### 周濠内出土遺物（第19図）

周濠内より出土した須恵器はいずれも杯蓋であるが、形態にはやや違いがみられる。45の方が口径が小さく、器高が高いより古い形態の特徴をもつ。しかし、2点とも肩部の稜や口縁端部内面の沈線は退化している。46は玄室内出土の12・26との焼成・色調を呈する。いずれも、田辺氏の須恵器編年のTK209型式に位置づけられ、玄室内出土のものとは比べて時期差はまったくないか、ほとんどない状態であるといえる。



第19図 SM1001周濠内出土須恵器

1号墳は全体に遺存状況が非常に悪かったが、横穴式石室の形態などを比較するのにいくつかの問題点があげられる。複室構造は玄門・前門が突出しない退化した形態ではあるものの、県内では3号墳や麻植郡鴨島町西宮古墳などでわずかにみられる希少な構造である。複室構造を有する横穴式石室については山崎信二氏の論考<sup>(4)</sup>に詳しく、九州地方を中心に発達することが知られており、柿谷遺跡の被葬者を巡る問題として重要である。築造時期は出土した土器の中の第一のグループであるTK217型式の段階、7世紀の前葉と考えられる。その後、飛鳥Ⅲ～Ⅳ式の段階とⅤ式の段階の土器にもまとまりがみられ、すくなくとも7世紀の後葉と7世紀末～8世紀初頭の2度にわたる追葬があったことが考えられる。第一次床面の礫床の区画が棺台としての機能を意識していたとすると、さらに1～2度の追葬があったとみる余地がある。

## 1号溝 (SD1001) (第20図)

第5調査区において検出された溝で、その両端は削平によって途切れているが、検出された延長は13.2mである。隣接してSD1002・1003が走る。溝底のレベルは北端で標高76.65m南端で76.85mとなっており、明確な傾斜はみられない。方向は南から東へ10°振っているが、ほぼSD1002・1003と平行している。幅は0.55~0.89mと不安定である。深さは北側A-A'断面では0.34mを測るが、南へゆくほど浅くC-C'断面では0.11mとなるが全般に底面の形状も不安定である。出土遺物は全くなかった。

こうした点からSD1001の評価を行うことは非常に困難であるが、その位置関係からSD1002・1003と近い時期に掘削され、付帯的な役割を果たしていたのではないかと推定するにとどめた。

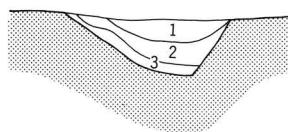
## 2・3号溝 (SD1002・3) (第21~24図)

第5調査区から第9調査区において検出された溝で、検出された延長は約100mである。溝底のレベルは第5調査区で標高75.8m、第9調査区で73.3mとなっており、緩やかに南方向へ傾斜している。方向は第5調査区では南から

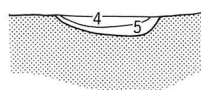
7~18°東へ振っているが、第6~8調査区においてはやや南へ戻して5°程度の振れとなる。二股に分かれて以後は2条ともにやや蛇行はするものの真南へ向かう。遺存状況は調査区によって一様ではなく、北側の第5調査区で最も残りがよく、南側の第9調査区では自然流路によってもその流れが切られている。調査区をまたぐ箇所の下位の段においては、傾斜地を水平に開墾しているために削平が著しく、特に遺存状況が悪い。また、第5調査区北端・南端、第6調査区、第9調査区では大規模な攪乱がみられた。

まず、遺存状況のよい第5調査区から南下しながら、状況を見てゆくことにしよう。ちなみに、5つの調査区にまたがっており、その堆積は十分に対応させることはできなかったため、調査区ごとに土層番号は独立している。大規模な攪乱はみられたものの、堆積の状態が観察できる(第21図)。堆積土の内、第1~第13層は溝本来の堆積ではなく、北西から南東へ傾斜する遺構面の段差に溝埋土上にのる形で堆積した、包含層の残欠である。したがって、

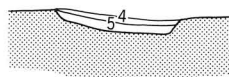
A-A' L=77.20(m)



B-B' L=77.20(m)



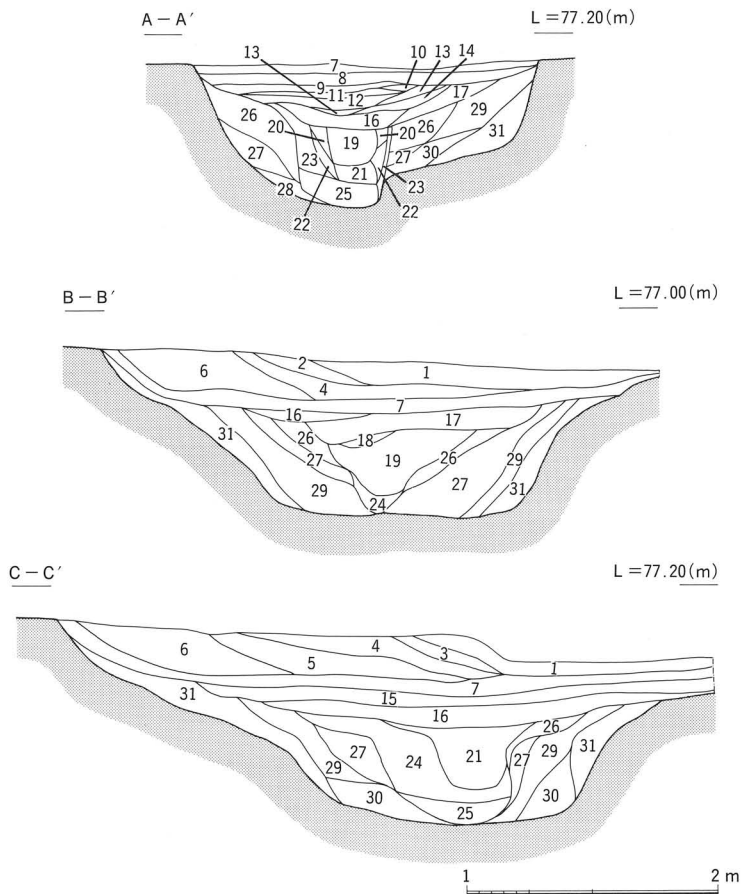
C-C' L=77.20(m)



- 1 淡黄色2.5Y8/4砂質土
- 2 浅黄色2.5Y7/4砂質土
- 3 明黄褐色2.5Y6/6砂質土
- 4 にぶい黄色2.5Y6/3砂質土
- 5 灰白色2.5Y8/2砂質土



第20図 SD1001堆積土層図(断面ポイントは第9図に記入)



- |                   |                     |                     |
|-------------------|---------------------|---------------------|
| 1. 灰黄色2.5Y7/2砂質土  | 12. にぶい黄色2.5Y6/3砂質土 | 22. にぶい黄色2.5Y6/4砂質土 |
| 2. 灰黄色2.5Y5/2砂質土  | 13. にぶい黄色2.5Y6/3砂質土 | 23. にぶい黄色2.5Y6/4砂質土 |
| 3. 浅黄色2.5Y7/3砂質土  | 14. 黄褐色2.5Y5/3砂質土   | 24. 灰黄色2.5Y7/2砂質土   |
| 4. 浅黄色2.5Y7/3砂質土  | 15. 灰黄色2.5Y6/2砂質土   | 25. にぶい黄色2.5Y6/3砂質土 |
| 5. 灰黄色2.5Y7/2砂質土  | 16. 暗灰黄色2.5Y5/2砂質土  | 26. 明黄褐色2.5Y6/6砂質土  |
| 6. 灰黄色2.5Y6/2砂質土  | 17. 浅黄色2.5Y7/4砂質土   | 27. 浅黄色2.5Y7/3砂質土   |
| 7. 灰白色2.5Y7/1砂質土  | 18. 黄褐色2.5Y5/3砂質土   | 28. 黄褐色2.5Y5/3砂質土   |
| 8. 淡黄色2.5Y8/3砂質土  | 19. にぶい黄色2.5Y6/3砂質土 | 29. 淡黄色2.5Y8/4砂質土   |
| 9. 浅黄色2.5Y7/3砂質土  | 20. にぶい黄色2.5Y6/4砂質土 | 30. 淡黄色2.5Y8/4砂質土   |
| 10. 黄褐色2.5Y5/3砂質土 | 21. 黄褐色2.5Y5/3砂質土   | 31. 明黄褐色2.5Y7/6砂質土  |
| 11. 浅黄色2.5Y7/3砂質土 |                     |                     |

第21図 SD1002・3 堆積土層図 (第5調査区) (断面ポイントは第9図に記入)

掘削の単位がみられ、10度以上の再掘削の後に埋没したことが分かる。こうした再掘削の様子はB-B'断面、C-C'断面においても対応する単位が観察される。これらの再掘削において断面U字形となった溝底には、数度にわたって意図的に砂岩の拳大の礫を充填する傾向が認められている。第19層・第25層のそれぞれ下位において、礫の充填が面的に確認された。

ここでの溝の幅は、2.74m (A-A'断面)、4.11m (B-B'断面)、4.83m (C-C'断面) となっており、南側での遺存状況のよさが明らかである。溝の断面形態はU字形となっている部分や逆台形を呈する部分がある。逆台形部分では、底の平坦面は1.8~2.1mに及ぶ。深さは最も深い箇所では1.63mを測る。各断面で堆積土層の観察によると、複数回の再掘削が行われていることが分かる。A-A'断面で主な単位を拾っていると、①第27・29層上面、②第26層上面、③第23・25層上面、④第20・21層上面の4度があげられ、これらの単位の中においても1~2回程度の小規模な再掘削の単位がみられ、10度以上の再掘削の後に埋没したことが分かる。こうした再掘削の様子はB-B'断面、C-C'断面においても対応する単位が観察される。これらの再掘削において断面U字形となった溝底には、数度にわたって意図的に砂岩の拳大の礫を充填する傾向が認められている。第19層・第25層のそれぞれ下位において、礫の充填が面的に確認された。

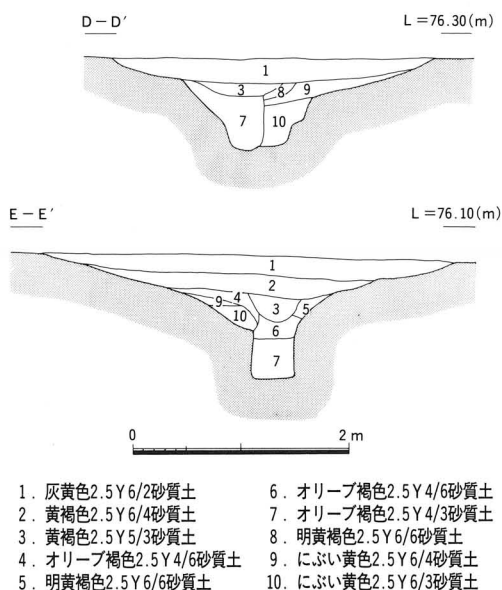
遺物は溝全体を通して第9調査区の範囲内で最も多く出土した。最も多かったのは古墳時代の須恵器であるが、弥生土器も散発的ではあるが含まれている。下層にゆくほど弥生土器の出土の割合が増えている。出土した須恵器は、古墳出土のものと接合しなかったが、同時期のものが古墳の近くで集中する傾向がみられることも注目される。

第6調査区では調査区内の西寄りに走っており、1号墳周濠と最も接近する箇所です。幅は上面で2.99m、下面で0.52m、深さは0.87mを測る。D-D'断面での堆積は、基本的な再掘削は1単位が認められる(第22図上 第8・9・10層上面)。

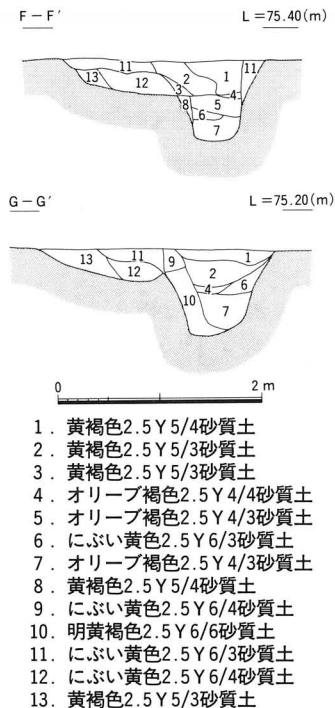
下層の堆積に粘質土が含まれる。ここでの攪乱内に管玉1点、ガラス玉6点が出土している。

第7調査区では調査区内の東端を走る。断面形態は底の部分に明確な角を伴う方形となる箇所が多い。幅は上面で3.82m、下面で0.39m。E-E'断面での堆積では、再掘削の単位が2単位認められる(第22図下 ①第9・10層上面 ②第4・5・6層上面)。深さは1.18mであるが、再掘削前は緩やかなカーブの断面形態で深さも0.73mと浅い。最下層である第7層のみ粘質土の堆積でその他は砂質土の堆積である。

第8調査区はやや南寄りでは、溝が二股に分かれる。堆積関係の切合いから新旧の流れが判別でき、そのうち古い流れをSD1002、新しい流れをSD1003とした。流れが一つであるF-F'断面、流れが2条に分かれているG-G'断面のいずれにおいてもいったん浅く掘込んだSD1002を、SD1003が再掘削の際に東側に深く付け替えている状況が窺える(第23図)。SD1002は第12・13層、SD1003は第1～11

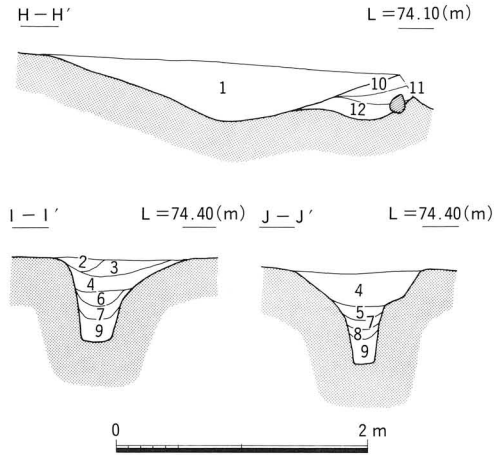


第22図 SD1002・3堆積土層図(第6・第7調査区)  
(断面ポイントは第9図に記入)



第23図 SD1002・3堆積土層図(第8調査区)  
(断面ポイントは第9図に記入)





1. 自然流路堆積土
2. 灰黄色2.5Y7/2砂質土
3. 灰黄色2.5Y6/2砂質土
4. 褐灰色10YR6/1砂質土
5. にぶい黄橙色10YR6/3砂質土
6. 褐灰色10YR5/1砂質土
7. 灰黄褐色10YR4/2砂質土
8. 灰黄褐色10YR4/2砂質土
9. 褐灰色10YR5/1砂質土
10. 褐灰色10YR5/1砂質土
11. 明黄褐色10YR6/6砂質土
12. 明黄褐色2.5Y7/6砂質土

第24図 SD1002・3堆積土層図(第9調査区)  
(断面ポイントは第9図に記入)

層が相当し、深さはSD1002が0.31~0.34m、SD1003が0.68~0.86mである。幅は上面で1.96m、下面で0.42m~0.55mで下面の場合はSD1003の下面ということになる。また二股に分かれて以後の幅はSD1002が1.82m、SD1003が1.11mである。SD1002・SD1003とも、下層の埋土には若干の粘性をもつ傾向がある。1号墳などの古墳から離れると、出土遺物数の減少傾向は一層進む。

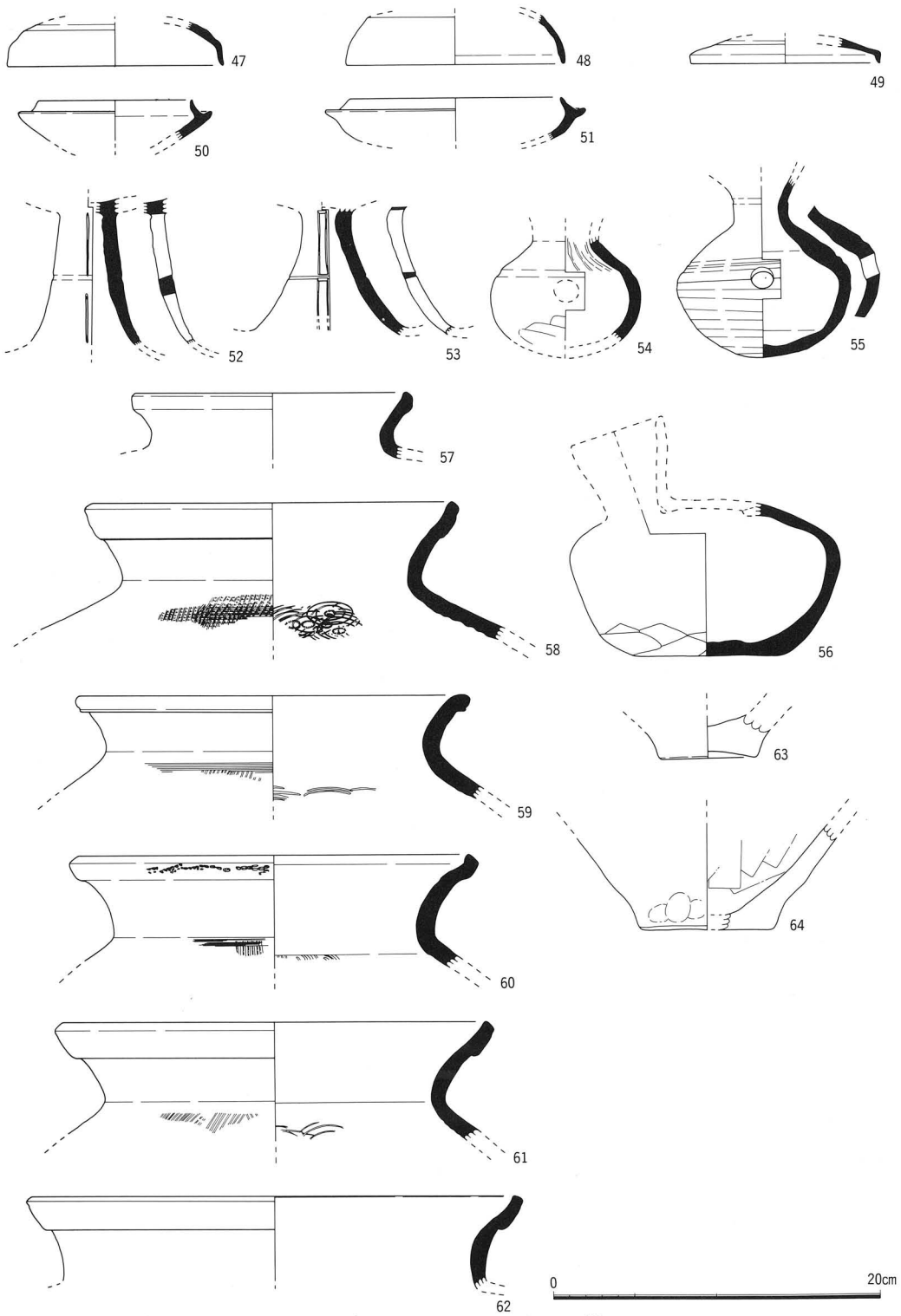
第9調査区ではSD1002の流れは自然流路によって切られているために、平面的におさえにくくなっている。H-H'断面の箇所ではさらに攪乱を受けているために、幅も不明となっている。深さは0.37mである(第24図上)。SD1003も削平などにより大きく失われている。断面形態が方形となっている点は第7調査区部分と共通している。上面の幅0.90~1.00mをもち、下面の幅は0.19~0.24mとかなり狭くなっている。深さは0.65m~0.73mである。基本的には砂質土の堆積であるが、下層では粘性が強くなる傾向がある。上位の調査区でみられた再掘削の痕跡は確認されなかった。出土遺物はきわめて少ない。

層が相当し、深さはSD1002が0.31~0.34m、SD1003が0.68~0.86mである。幅は上面で1.96m、下面で0.42m~0.55mで下面の場合はSD1003の下面ということになる。また二股に分かれて以後の幅はSD1002が1.82m、SD1003が1.11mである。SD1002・SD1003とも、下層の埋土には若干の粘性をもつ傾向がある。1号墳などの古墳から離れると、出土遺物数の減少傾向は一層進む。

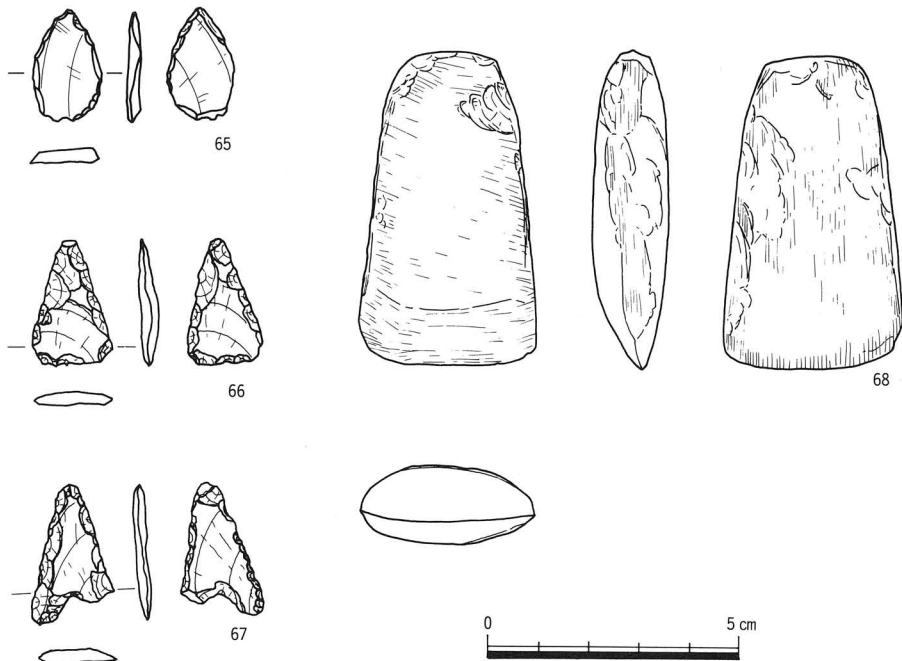
## 出土遺物(第25~27図)

### 須恵器(47~62)

蓋杯47・48は丸い天井部をもち、48の口縁端部内面には弱い稜が巡る。49はきわめて偏平な器形で下方へ口縁部が強く折れ曲がる。飛鳥V式に位置づけられる。同型の別個体の破片が他にも出土している。杯は小片で口径の復元にもやや問題が残る。短い立ち上りを有し口縁端部は鋭い。高杯2点はいずれも長脚2段透かしの脚部のみの破片である。透かしは2方向で、形状は52がスリット状、53が長方形である。甕は2個体が出土し、ともに頸部以下の破片で頸部が細くしまるものである。54は頸部内面に強い絞りの痕跡をとどめている。平瓶56は体部だけの破片で、底部をナデによって平坦・平滑に整形している。胎土がこの器形としては非常に精良である。甕はSD1002・3の遺物の中でもっとも多くの点数が出土し、口縁部片だけでも6個体が確認・図化された。法量・口縁端部の形状には個体ごとの差異がみられるが、調整技法は外面が縦方向の平行タタキ後回転カキメ調整、内面が同心円文当て具



第25图 SD1002·3 出土土器



第26図 SD1002・3 出土石器

による調整という点では共通している。58には同心円文は中心部に刻みのある車輪文となっている。60の口縁端部外面には工具の先端による刺突文が連続して付加されている。型式的にはTK43～TK217の範疇にすべて収まっているものと考えられるが、その中でも59の口縁端部外面にみられる断面三角形の突帯は古い特徴を残している。

#### 弥生土器 (63・64)

図化を行った2点も含め、溝内からは多くの弥生土器が出土している。出土の傾向としてはより下層に集中していた。破片はすべて摩滅を強く受け、表面の調整を観察できるものはほとんどない。底部2点はともに壺形土器の底部と考えられ、結晶片岩を含めた多量の砂粒を混入している。64の外面には板ナデらしい痕跡が、内面には縦方向のヘラケズリ調整が認められる。弥生時代中期のものであろうか。

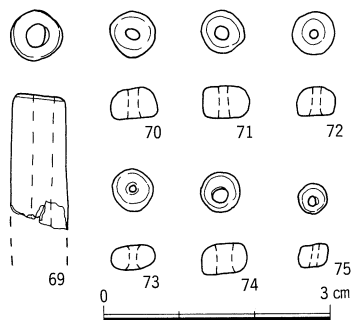
#### 石器 (第27図)

65～67はいずれもサヌカイト製の石鏃である。鏃身・基部の形状がそれぞれ異なる。65は表裏に素材の剝離面を大きく残し、縁辺に調整を施したものである。66は平基式である。67は凹基式で基端の一部を欠いている。調整は基面の内部まで深くは及んでいない。形式は異なっているものの、3点とも法量は近似している。68は蛇文岩製の磨製片刃石斧である。長さ62.20mm、刃部幅34.05mm、厚み15.45mm、重さ57.25gを測る。台形状の形態を呈する。最大幅は刃部がある。表面には横方向の、裏面には縦方向の研磨の痕跡が主として観察される。

裏面には敲打痕及び剝離痕がみられる。

#### 玉類 (第28図)

これらの玉類は SD1002を切っているいくつかの攪乱のうち、第6調査区において出土したものである。第一次調査の時点では付近に別の古墳の存在を予想したが、第2次調査の結果では検出されなかった。出土位置からみれば、これらの一群は1号墳に伴う可能性があるが、その他の古墳に伴う可能性も残される。



第27図 SD1002・3攪乱出土玉類

#### 管玉 (69)

柿谷遺跡においては唯一の碧玉製管玉で、全体に脆く一端が欠損している。穿孔は主として図の上面より行っている。側面では研磨の単位が弱い面をなしている。

#### ガラス玉 (70~75)

6点の法量は径で2mm、厚みで1mm未満とばらつきは認められない。しかし、重量の上からは4倍近い格差があり、ガラスへの気泡の含有率など密度が一定でないことを示している。色調は紺系統と濃緑・明緑系統で占められている。端面の研磨は行われているものと、行われていないものが半数ずつある。

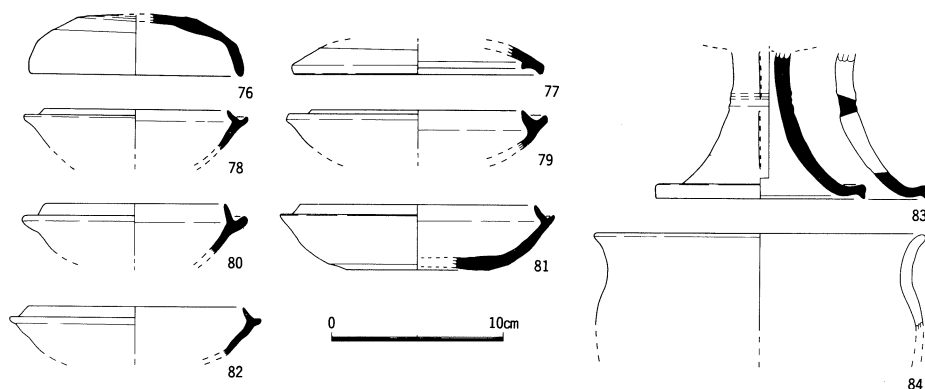
SD1002・1003は北から南へ流れる大規模な溝である。小規模のものを含めると10度にわたる再掘削が行われており、その規模や硬質の基盤層を考慮にいと、背景に鉄器の利用が想定される。築造時期については不明であるが、出土した土器に古墳時代を下るのがみられないことから埋没時期がこの時期にあたることは疑いない。また周囲に展開する遺構の年代からみても、築造が古墳群築造と共に進行したと考えるのが最も妥当性が高いであろう。埋土中下層からは、摩滅がかなり進行し、図化はできなかつたものの比較的多くの弥生土器が出土しており、柿谷遺跡周辺での弥生時代の遺構の広がりが予想される。

機能の面からみると、調査区の範囲内では不明な部分も多いが、古墳群の消長と出土土器の年代がほぼ一致していることからみて、古墳群の群構成や区画に少なからぬ影響を与えたことが想定される。このことはSD1002・1003のみならずSD1004・SD1005とも併せ検討する必要がある。ただし、度重なる再掘削や流れの付け替えは、一般生活にとっての重要性を示すものとも考えられ、農業用水利的な機能も加味した評価を与えておきたい。

#### 第4～9調査区包含層出土遺物

##### 土器 (第28図)

76～83は須恵器である。杯蓋76は全体に厚い器壁をもつ。TK43型式に属する。77は口縁端部だけの破片で短いかえりは口縁より下へ伸びない。TK48型式、飛鳥Ⅲ式にあたり、7世紀の第3四半期の年代が与えられる。杯身5点（78～81）はともに内傾する短い立ち上がりをもち、12～13cmの口径を測る。TK43～TK209型式に位置づけられる。高杯83は脚部だけの破片で、長脚ではあるがやや短く端部が下方へ拡張する特徴がある。2段に穿たれた透かしは



第28図 第4～第9調査区出土土器

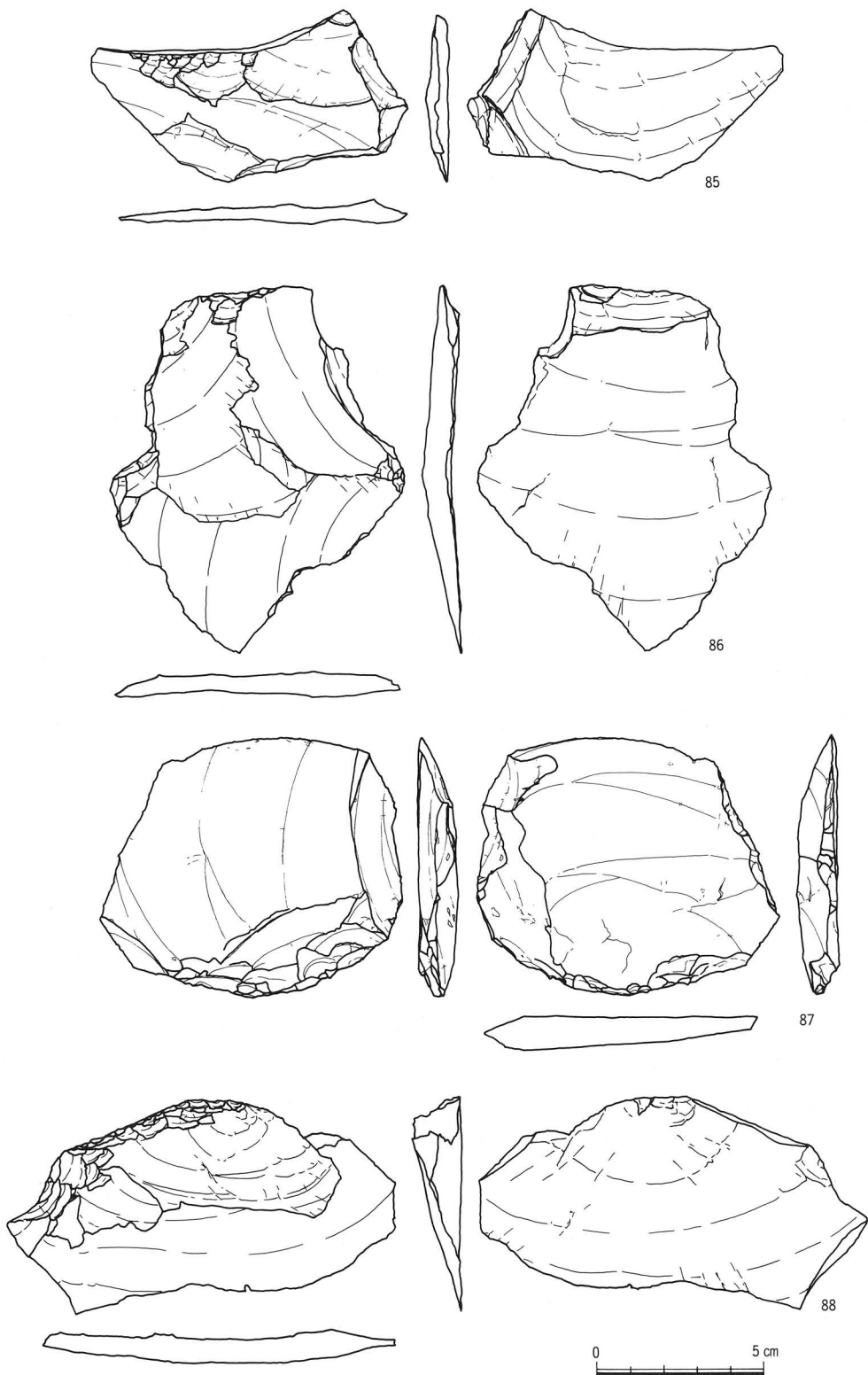
スリット状で、2方向で上下並列である。TK209型式に相当する。弥生土器の甕形土器口縁部84は、弱く屈曲して端部を丸くおさめる。胎土中に結晶片岩を含む粗い砂粒を多量に混入する。調整が観察不可のため、弥生時代中～後期のものとしておきたい。

#### 旧石器（第29図）

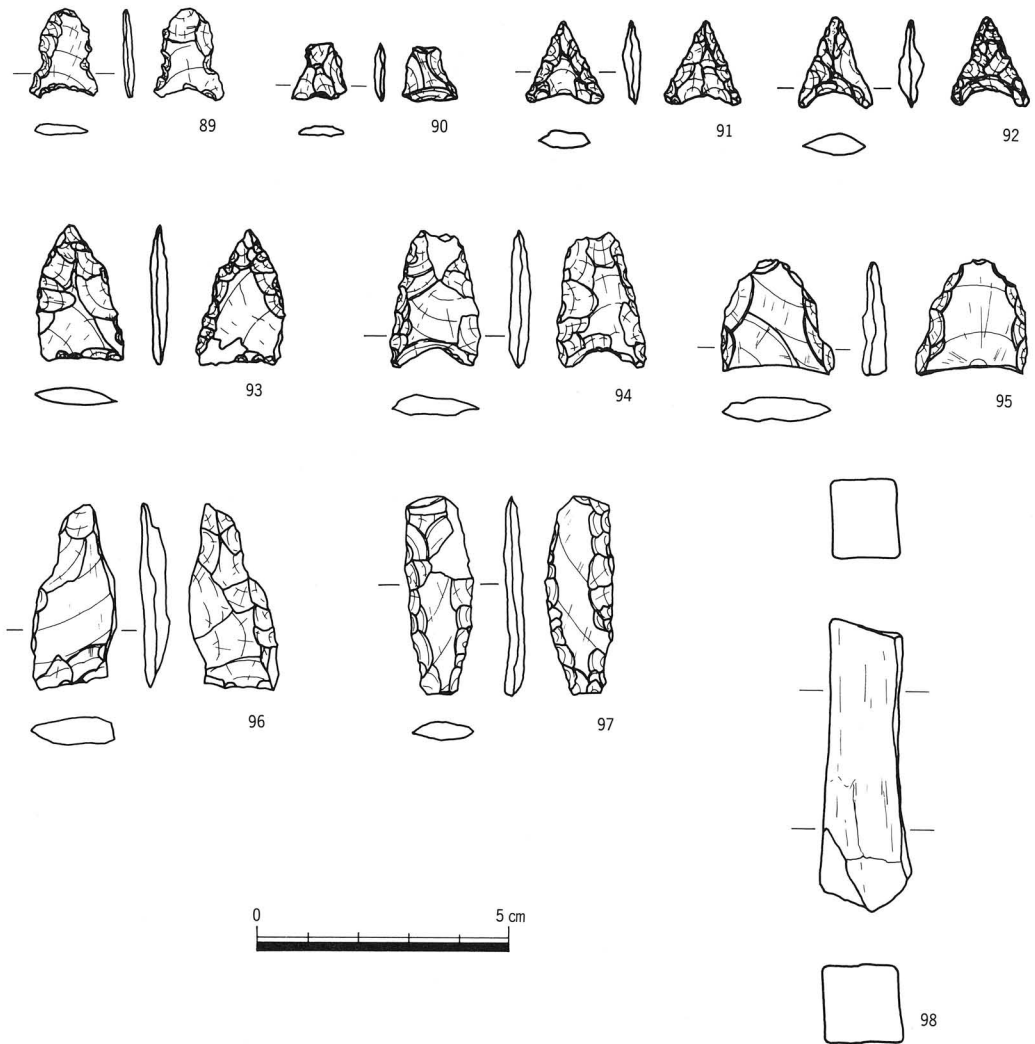
出土した4点はいずれもサヌカイト製である。85・86・88の3点は剥片で、うち85と86は打面が欠損している。背面は主要剥離面と異なる方向からの剥離も観察される。また、薄手で側面からみた形状が山形を呈することからみて、尖頭器か石斧の調整剥片である可能性が高い。87は大形の剥片を利用したスクレイパーである。素材は一部に自然面を残す、やや寸づまりの縦長剥片を用いており、打面は除去されている。刃部は剥片の左側縁にあり、腹面方向にはやや粗目の剥離が、また背面側には丁寧で細かい調整が施されている。刃部の角度は40度とやや鋭角で、平面形状はゆるやかに外湾している。刃部と反対側の側面部には微細な剥離痕がみられる。

#### 石器（第30図）

89～97はサヌカイト製の石鏃であり、そのうち95・96は石鏃の未製品と考えられるものである。89は五角形鏃とされるもので、凹基無茎のものである。縄文晩期に盛行する形態であるが<sup>(5)</sup>、この年代の土器は出土していない。90～92は凹基無茎式でいずれも長さが20mmに満たないものである。95は凹基式・96は凸基式石鏃の未製品である。97は凸基式で、先端・基



第29図 第4～第9調査区出土旧石器



第30図 第4～第9調査区出土石器

部ともに欠損しているが、鏃身・基部ともに長めとなるものとみられる。基部を中心として細かい調整が両側縁に施されている。98は緑色凝灰岩製の砥石である。石材は軟質で欠損部分が多いが、3側面に使用痕跡および研ぎ減りが確認できる。古墳の副葬品の可能性があり、1号墳はその有力な候補である。

### C 第10・第11調査区 (第31図)

ここで報告する範囲は、第10・第11調査区である。これらの調査区においては、横穴式石室を主体とする円墳または円墳と想定される古墳が集中的に検出された(2～6号墳)。その他に、これらの古墳と何らかの関係をもつと考えられる土壙墓・石室墓や土坑が検出された。ここでは、密集して検出された横穴式石室を中心に記述を進める。

#### 2号墳 (SM1002)

##### 位置と現状

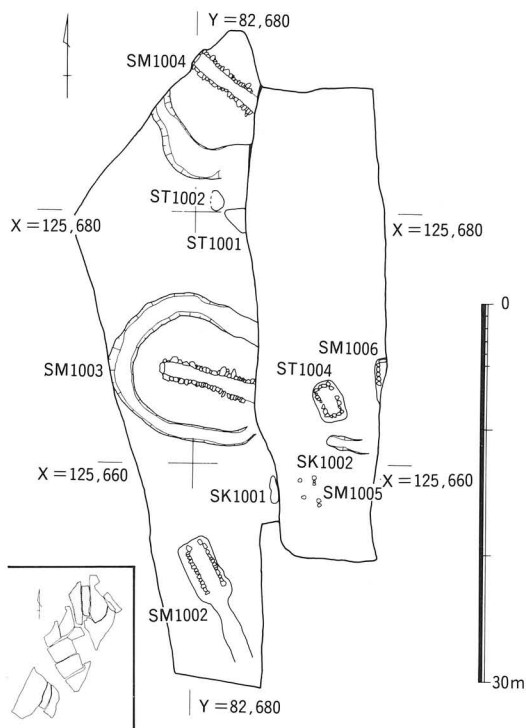
第10区の最も南よりY・Z-16・17グリッドで検出された。1号墳と3号墳の間に位置する。墳丘及び石室は基盤層の直上まで完全に削平を受けており、基底石の一部と排水溝を残すのみであった。したがって、2号墳の墳丘規模などの外部施設や横穴式石室内の堆積状況については一切不明のままである。

##### 墓壙の規模・形態

横穴式石室の形状に即した長方形のもので、幅は最も広い部分で2.82mであるが、石材による壁体をもたない玄室前道部分では墓壙は検出されなかった。

##### 石室の構築状況 (第33図)

横穴式石室は基底石を残すのみであり、全容を窺い知ることはできない。羨道部の基底石はみられず、特別な玄門構造は確認されない。したがって、基底石の残存部分を玄室と考え、その外側については壁体構造を伴わない玄室前道であると考え。玄室のプランは基本的には長方形であるが、奥壁部分と玄門部分でわずかに丸みをもっていることから、胴張りの非常に退化した形態をもつものと理解したい。基底石に使用されている石材はすべて砂岩の自然礫で、やや角ばっているものが選ばれている。石材は一辺20cm程度の小形の石を上面が平坦となるように並べているが、玄門付近では一辺40cmを越えるやや大形のものも用いられている。玄室の平面形は長方形であるが、奥壁が3石か4石で構成され若干の丸みをもち、玄室中央部がごくわずかに膨らむ。玄室奥壁は石材が失われているため、復元長3.68m、奥壁部での幅1.19m、最も広い中央付近での幅1.20m、玄門部の幅1.08mである。これらの部分



第31図 第10・第11調査区遺構配置図



における高さは不明である。

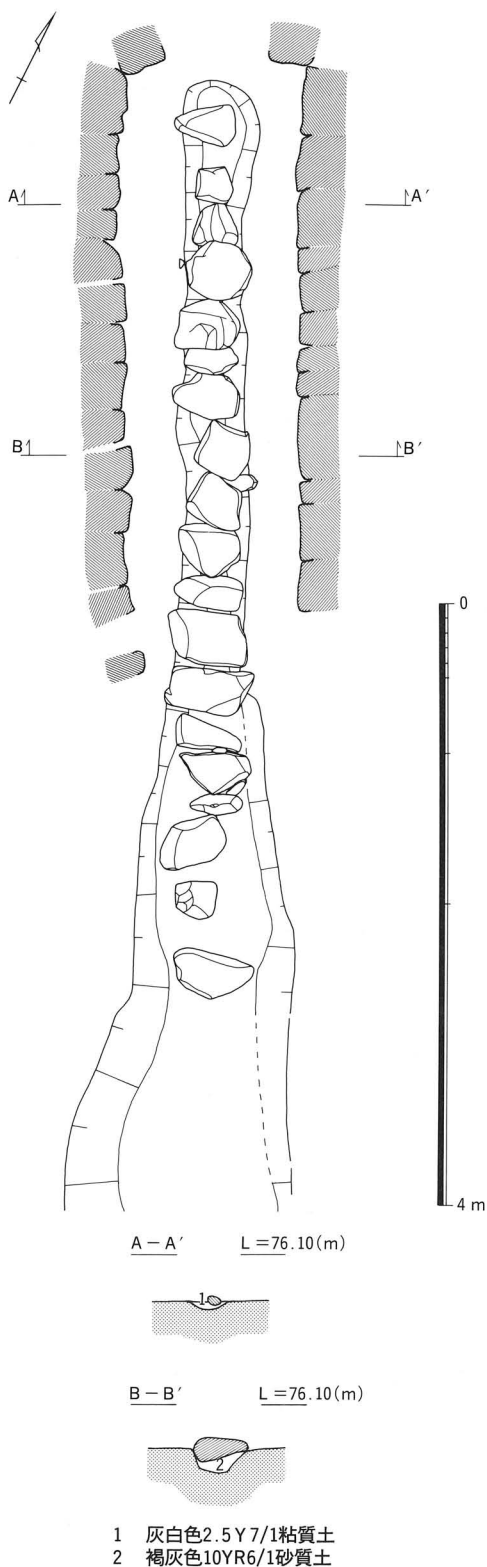
床面には砂岩の自然礫による礫床が形成されていた。一辺20~40cmの石材を中心に、拳大の円礫によって隙間を補っている。小形の円礫を多く用いない平坦さに欠ける礫床の構造は、1号墳第二次床面と共通する。

#### 排水溝 (第32図)

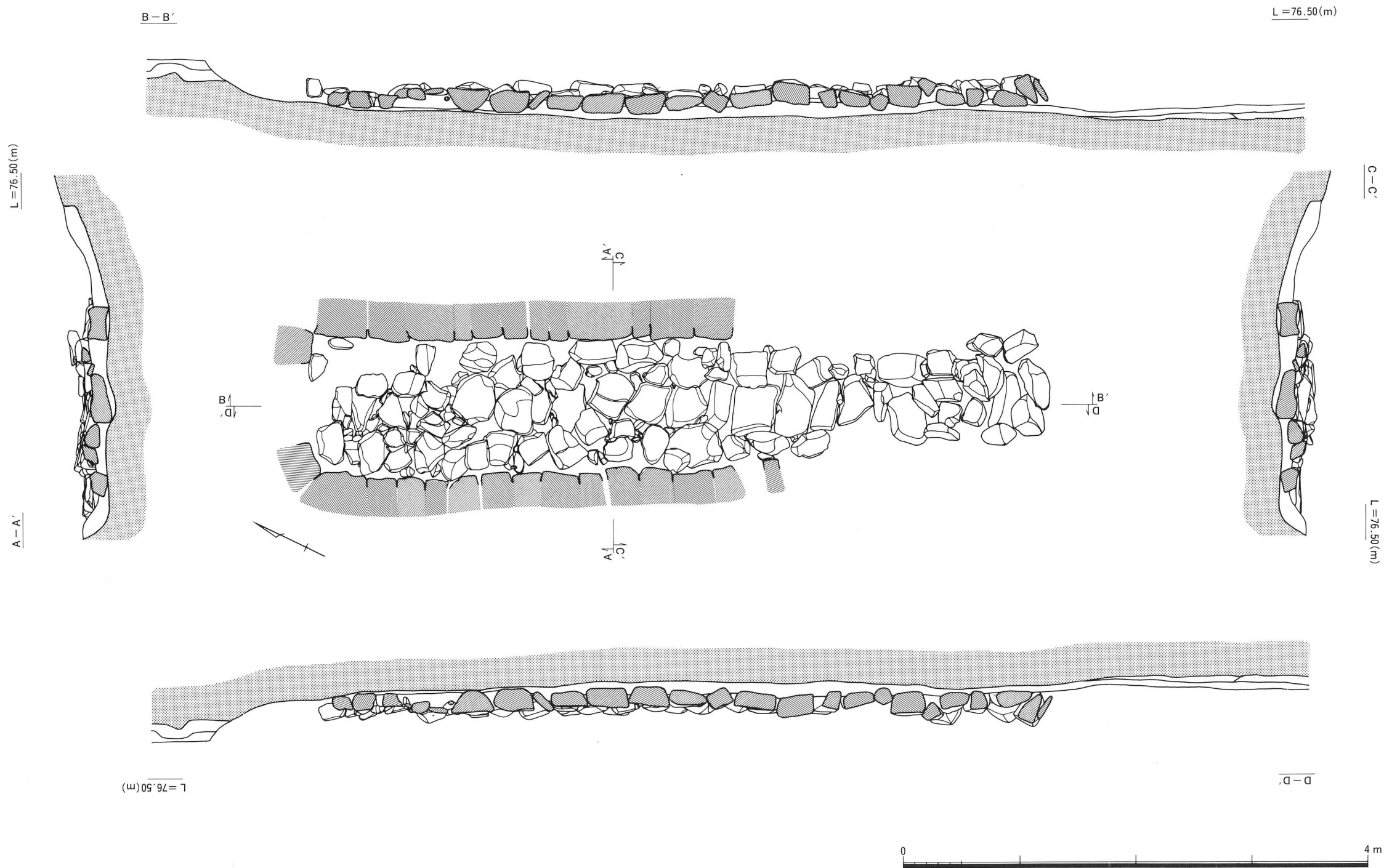
横穴式石室内の奥壁手前から開口部方向へ延びる溝である。その方向は石室の主軸と一致している。検出延長は7.5mを測る。石室内においては、幅は40~50cmであるが、玄室より外側では徐々に開き、最も広い箇所では150cmを上回る。深さは5~15cmと一定しない。埋土には粘質の強い土の堆積がみられ、偶然に混入したとみられる弥生土器が含まれていた。奥壁部から開口方向へ緩やかな傾斜が確認された。蓋石として一辺20~40cmの砂岩の自然礫が用いられているが、これらは礫床床面としての役割をも合わせもつ。したがって、玄室内部の蓋石は上面が揃えられている。

#### 遺物の出土状況 (第34図)

排水溝の末端部および玄室奥壁部分よりわずかながら遺物が出土している。奥壁部分中央からは鉄製品が3つのまとまりをもって出土している。奥壁部中央では素環鏡板付轡一式と鋳が集中して出土しているほか、北西部コーナー付近から留め金具1点、やや開口部寄りから鉄鍬・鉸具が各1点出土している。奥壁部分に集中するこれらの鉄製品の出土位置は本来の副葬位置から大きくは離れていないものと推定される。排水溝からは須恵器・土師器が出土していたが、いずれも底面からは浮いた状態の出土で



第32図 SM1002排水溝平・断面図



第33图 SM1002横穴式石室实测图

あり、二次的な移動によるものと想定され、追葬の可能性についての重要な示唆となろう。

## 遺物 (第35・36図)

### 土器

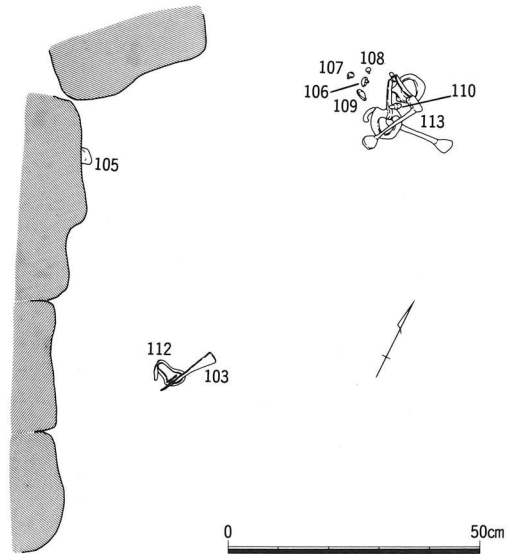
土器はいずれも排水溝上面付近に集中していた。

#### 土師器 (99・100)

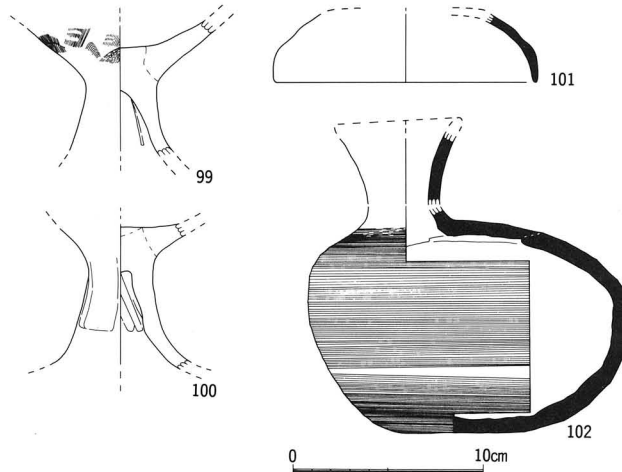
いずれも欠損部の多い高杯破片である。いずれも脚の裾が端部へ向け直線的に開くタイプと考えられる。口縁部を欠いているのが惜しまれる。

#### 須恵器 (101・102)

杯蓋101は数点の破片で構成されているため、実際はもう少し口径が小さい可能性がある。丸い天井部を有する。これに伴う杯身の出土はなかった。平瓶102は多数の破片となっていたが、ほぼ全体の形が復元された。体部上面は緩やかな曲線をもつ。口縁端部は失われているが、端部付近で大きく開く形態である。



第34図 SM1002遺物出土状況



第35図 SM1002出土土器

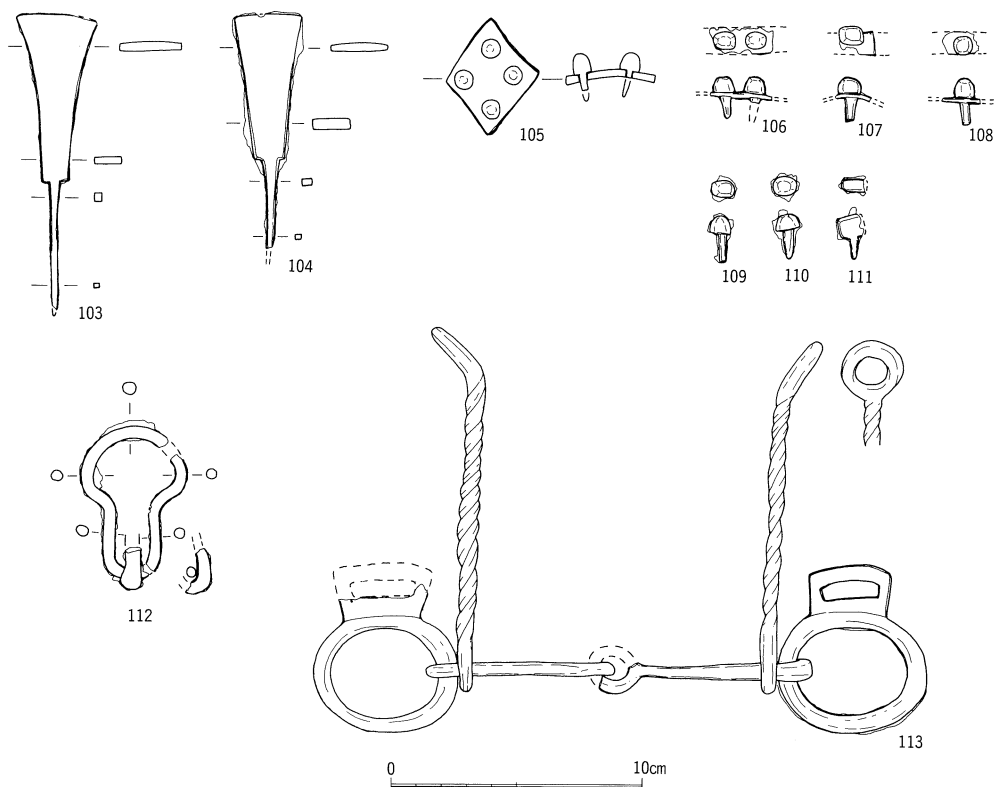
これらの土器のうち、須恵器の型式からみるとTK209型式に中心をもち、若干の時間幅をもつ可能性がある。

## 鉄製品 (103~113)

### 鉄鏃 (103・104)

出土した2点はいずれも平造方頭式で、茎部先端を欠いている。102の鏃身は直線的であるのに対して、103は刃部に向かってバチ形に開く特徴がある。鏃身は両角関で、茎部は断面正方形に近い長方形である。103は104と比較して、全体に大振りである。

### 留め金具 (105)



第36図 SM1002出土鉄製品

菱形の平面形をもち4箇所 of 鉾を有する、縦5.65cm、横3.7cmの金具である。座金は厚みが3～3.5mmで、中央部が反り上がっているが、本来の反りであるかは不明である。鉾の脚はいずれも破損しているが、鉾の頭の径が7.5～8.5mmで脚の長さは10～11mmに復元される。

#### 鉾金具 (106～111)

鉾は6点出土しているが、構造からは座金を伴うもの(106～108)と伴わないもの(109～111)とに分けられる。座金は0.85～1cm幅のもので長さは不明である。106は一連の座金に2箇所の鉾を伴う。座金を伴わないグループでは、鉾頭が通常 of 円形のもの(109・110)と薄く叩き延ばしたもの(111)とがある。これら5点の用途は有機質部分が失われているために明確にはしがないが、出土状況からみて轡との関連が強く面繫の革部分に用いたものと考えられる。111は床面から浮いた出土状態であり、用途が違う可能性がある。

#### 鉸具 (112)

出土状態では3つのパーツに分かれていたが、断面形態などから同一個体と判断された。瓢箪形の部分と刺金具とからなり、刺金具の先端は欠損している。全体の法量は長さ6.5cm、瓢箪の幅広の部分4.25cm、狭い部分2.35cmで、径0.5cmの棒を用いている。

### 轡 (113)

二連式銜をもつ素環鏡板付轡である。引手と銜は連結しているが、連結部は欠損している。鏡板は横長の楕円形を呈する環状で、左側長径5.8cm、短径4.7cm、右側長径5.9cm、短径4.9cmを測る。立間は横長長方形の透かしをもつ矩形である。引手は両端に小円環をもつ一条造で柄と壺部が一体成形である。全長は左側が16.4cm、右側が16.0cmである。引手壺はそれぞれ外側に約50°開いている。

2号墳は横穴式石室の基底石をわずかに残す程度の遺存状況のきわめて悪い古墳であったため、情報量は余り多いとはいえないが、いくつかの点が明らかとなった。

横穴式石室は羨道部の壁体を構築しない玄室前道を有していること、その主軸の方位は1号墳と近接していること、出土遺物の中に馬具を含むこと、6世紀末～7世紀初頭の築造が想定されることなどである。馬具は7号墳周濠より不明鉄片が出土しているのを除くと、柿谷遺跡の古墳群中唯一のものである。このことは、近隣の後期古墳との保有状況の違いを比較する上で重要な問題提起となるものである。

### 3号墳 (SM1003)

#### 位置

第10区中央部、AB～AD-15～18グリッドに位置する横穴式石室を主体とする円墳である(第37図)。南側の2号墳、北側の4号墳、東側の5号墳・6号墳などと隣接し、古墳の密集地域の中心の位置を占めている。

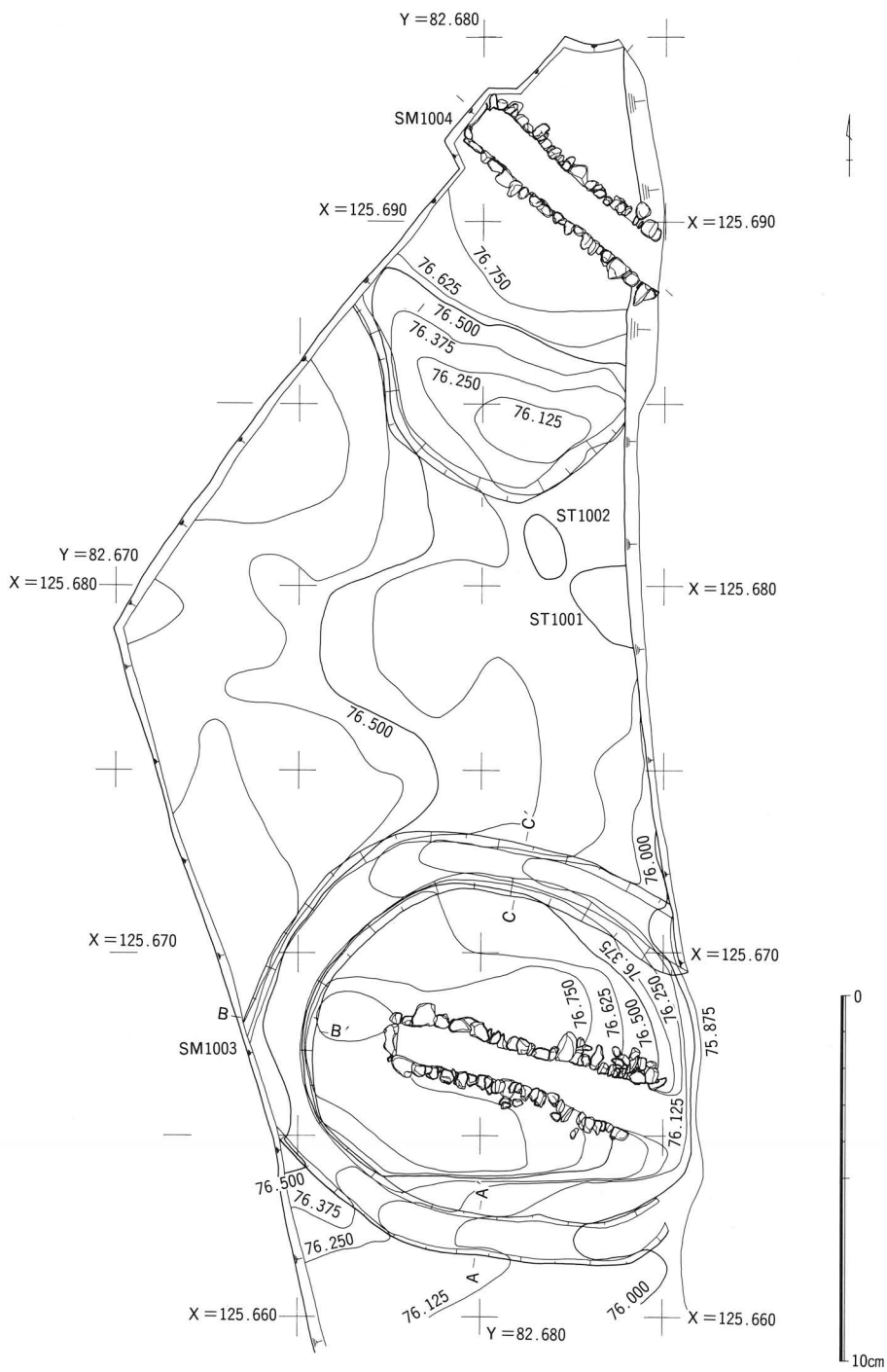
#### 現状

表土直下で検出された時点では、墳丘と壁体のほとんどが削平され、特に羨道部には人頭大の砂岩の自然礫が多数落ち込んでいた。各古墳それぞれ遺存状況が悪い中で、壁体が3段分残っているなど良好とはいえないものの検討する要素は多い。また、3号墳の墳丘と4号墳の墳丘の間には多数の砂岩礫を敷き詰めた範囲があり、3号墳との関連が強いものであり、別項を設けてそこで詳述している。

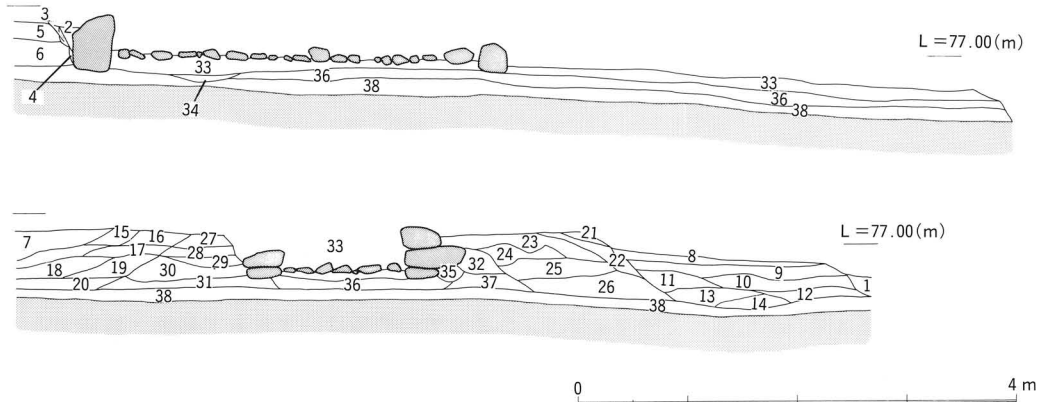
#### 墳丘

円墳ではあるが東西にやや長い楕円形を呈している。周濠を含めると長径(東西)12.6m、短径(南北)11.3mで、墳丘径は長径10.9m、短径9.2mである。

墳丘はすべて盛り土であるが、削平によってそのほとんどが失われているために盛り土は0.5～0.6m程度しか遺存していなかった(第40図)。盛り土はいずれも黄褐色を基本とする土で行っているが、粘性の違いによって明確な互層ではないものの、粘性の強い土と弱い土を適宜使い分けている。整地を行った層(36・37層)をわずかに掘り込むことによって墓壇と



第37図 SM1003・SM1004墳丘平面図



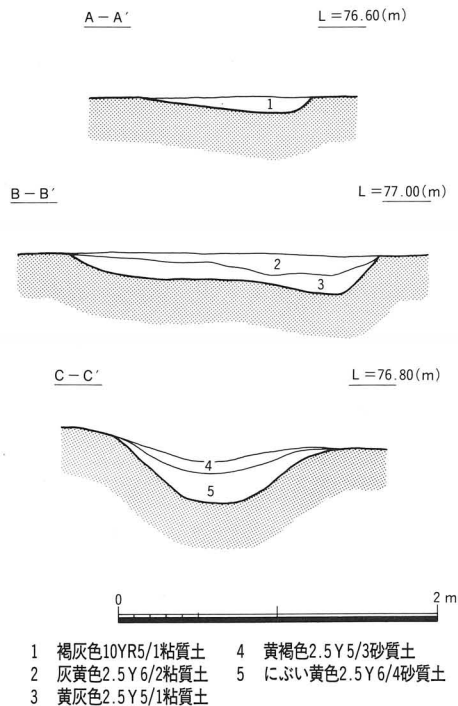
- |                      |                     |                     |
|----------------------|---------------------|---------------------|
| 1. 黄灰色2.5Y6/1粘質土     | 14. にぶい黄色2.5Y6/3砂質土 | 27. 黄褐色2.5Y5/3砂質土   |
| 2. にぶい黄褐色10YR6/1砂質土  | 15. にぶい黄色2.5Y6/3粘質土 | 28. 明黄褐色2.5Y6/6砂質土  |
| 3. 暗灰黄色2.5Y5/2粘質土    | 16. 浅黄色2.5Y7/4粘質土   | 29. 暗黄灰色2.5Y5/2砂質土  |
| 4. 黄褐色2.5Y5/3粘質土     | 17. 暗黄灰色2.5Y5/2砂質土  | 30. 黄褐色2.5Y5/4粘質土   |
| 5. 灰黄褐色2.5Y6/2粘質土    | 18. にぶい黄色2.5Y6/4粘質土 | 31. にぶい黄色2.5Y6/3粘質土 |
| 6. 浅黄色2.5Y7/4粘質土     | 19. 浅黄色2.5Y6/3粘質土   | 32. 明黄褐色2.5Y6/6砂質土  |
| 7. 浅黄色2.5Y7/4粘質土     | 20. 浅黄色2.5Y7/3粘質土   | 33. 黄灰色2.5Y5/1砂質土   |
| 8. 褐灰色10YR5/1粘質土     | 21. 黄灰色2.5Y6/1砂質土   | 34. 黄褐色2.5Y5/3砂質土   |
| 9. 灰黄褐色2.5Y6/2粘質土    | 22. 黄灰色2.5Y7/3粘質土   | 35. 暗黄灰色2.5Y5/2砂質土  |
| 10. 明黄褐色2.5Y7/6砂質土   | 23. 黄褐色2.5Y5/3砂質土   | 36. にぶい黄色2.5Y6/4砂質土 |
| 11. にぶい黄褐色2.5Y6/3粘質土 | 24. 黄灰色2.5Y5/1砂質土   | 37. 黄褐色2.5Y5/3砂質土   |
| 12. 暗黄灰色2.5Y5/2砂質土   | 25. にぶい黄色2.5Y6/4砂質土 | 38. 灰黄褐色2.5Y6/2粘質土  |
| 13. 黄灰色2.5Y4/1砂質土    | 26. 暗黄灰色2.5Y4/2砂質土  |                     |

第38図 SM1003墳丘土層図

し、基底石を据え(35層)、さらに礫床を据えるために砂質土(33層)を敷き詰める。その後は壁体1~2段分ごとに盛り土の作業単位がみられ、石室北側と南側の墳丘でそれぞれ3度以上に分けて盛り土を行っていたことが分かる(北側墳丘:①32・35層、②21~26層、③8~14層、南側墳丘:①27~31層、②15~20層、③7層)。これらの作業単位のほかに25・32層の上には砂岩礫による集石と須恵器を中心とする遺物の集中した出土があり、蓋杯・高杯・平瓶・甕が出土している。中でも甕は一辺3~10cm程度の細片となっており、墳丘築造時に意図的に砕いた、墳丘築造に伴う祭祀の可能性が高い。

周濠

周濠は墳形の形状に合わせやはり楕円形を呈している。幅は最も広い石室の北西で2.05m、南側で1.1mである。削平を受けている南側は10cmから15cmと浅く、北側では30~40cmとやや残りがよい。いずれも黄褐色系の砂質土が堆積し



- |                 |                   |
|-----------------|-------------------|
| 1 褐灰色10YR5/1粘質土 | 4 黄褐色2.5Y5/3砂質土   |
| 2 灰黄色2.5Y6/2粘質土 | 5 にぶい黄色2.5Y6/4砂質土 |
| 3 黄灰色2.5Y5/1粘質土 |                   |

第39図 SM1003周濠堆積土層図  
(断面ポイントは第37図に記入)

ている(第39図)。須恵器や弥生土器などが数点出土しているが、特別なまとまりなどはみられなかった。

### 石室の構造

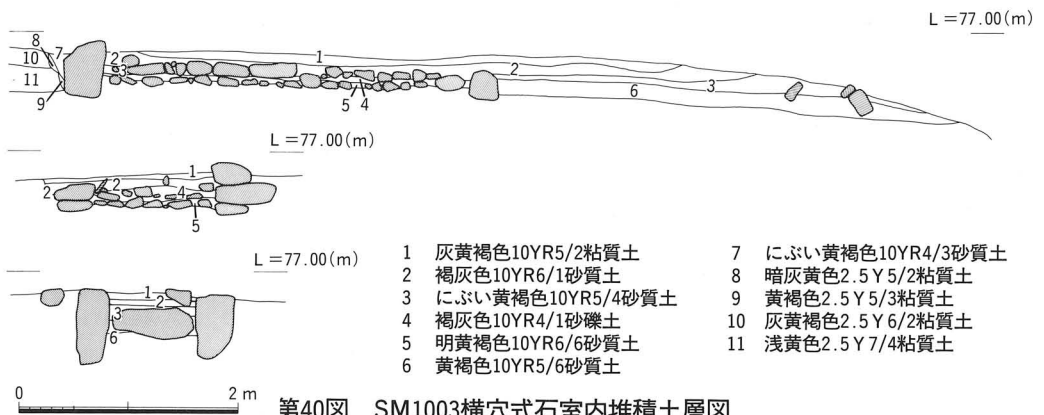
狭長なプランの玄室をもつ横穴式石室で、2カ所に立石を設ける複室構造を有する。玄門・前門ともに立石が突出しない「疑似両袖」式である。主軸はN-74°-Wで、東南東方向に開口する。羨道部は開口部に向けて徐々に開く。ここまでの特徴はいずれも1号墳と共通する。用いられる石材はすべて砂岩の自然礫であり、形態は不揃いである。玄門・羨門ともに石材自体の高さ60cmは、想定される石室全体の高さに比して低いものである。また、石材の幅が細いこと、前門の位置がずれていることなどからも、複室構造が形骸化しているといえる。開口部の左側側壁に用いられている立石は羨門の機能を果たしていたものであろうか。右側側壁では欠落している。玄室は中央部が緩やかに膨らむ胴張りの形態をわずかに残すが、胴張りの度合いはきわめて低い。奥壁は横長の板石と小形のをいずれも立てて、組み合わせて用いている。壁面は両側とも奥壁に接する1石のみ板石をたてて用いている。その他はいずれも比較的小形の石の小口の平坦面を内側に向けて積み、部分的にやや大きいものを併用しているが規則性はみられない。残存する範囲では、玄室とその他の部位での積み方に差異はみられない。

石室の各部の計測値は全長6.83m、玄室長3.30m、玄室最大幅1.15m、奥壁部幅0.95m、玄門部幅0.83m、羨道部長3.30m、羨道部幅(立石部)1.28m、(開口部)1.31mである。

### 床面の形成

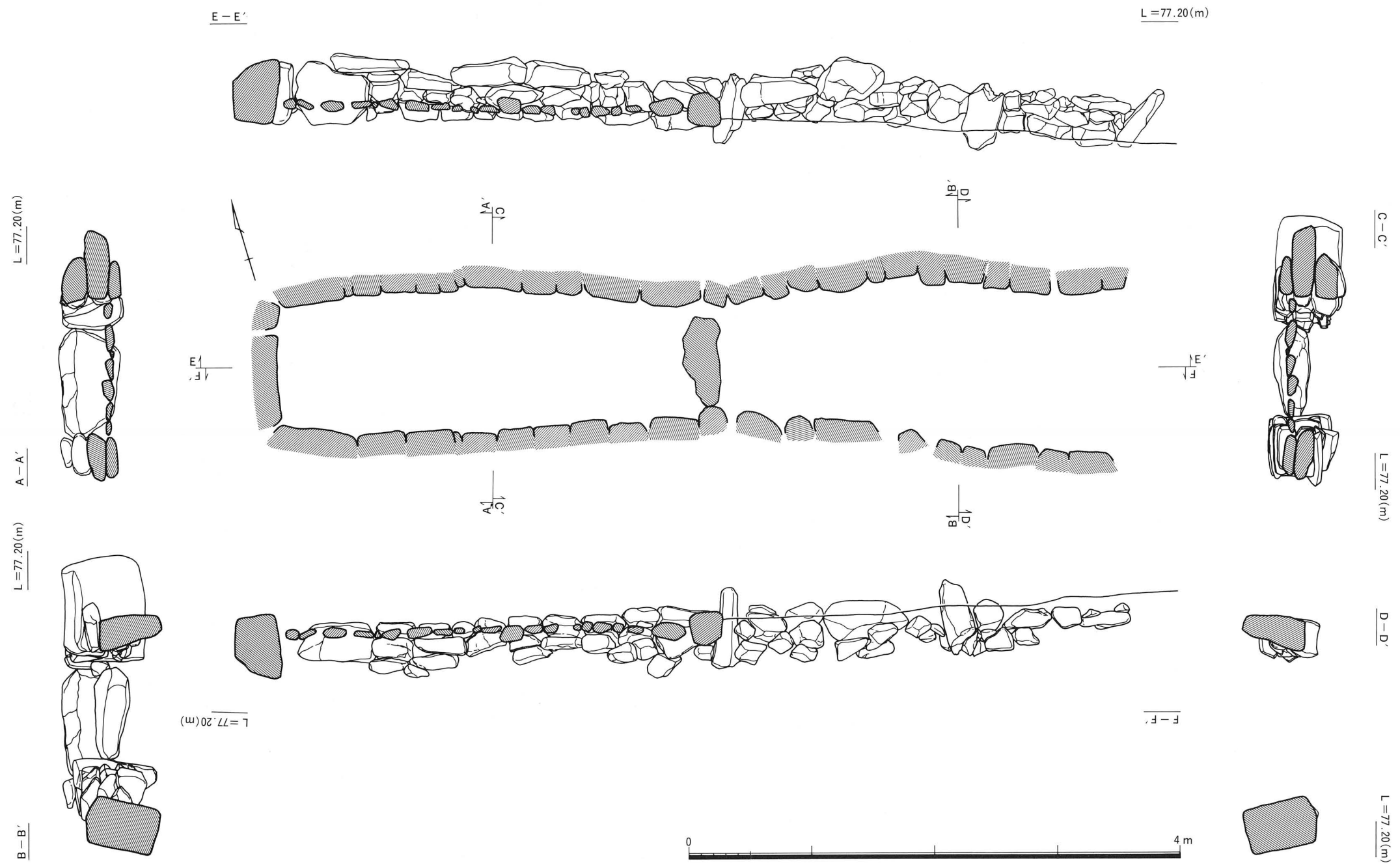
#### 第一次床面(第42図)

床面の平坦に整える層(第38図33層)を敷き、礫を敷き詰めることによって床面としている。礫は一辺10~30cm程度の砂岩の自然石を用い、標高76.5~76.6mに床面を整えているが、

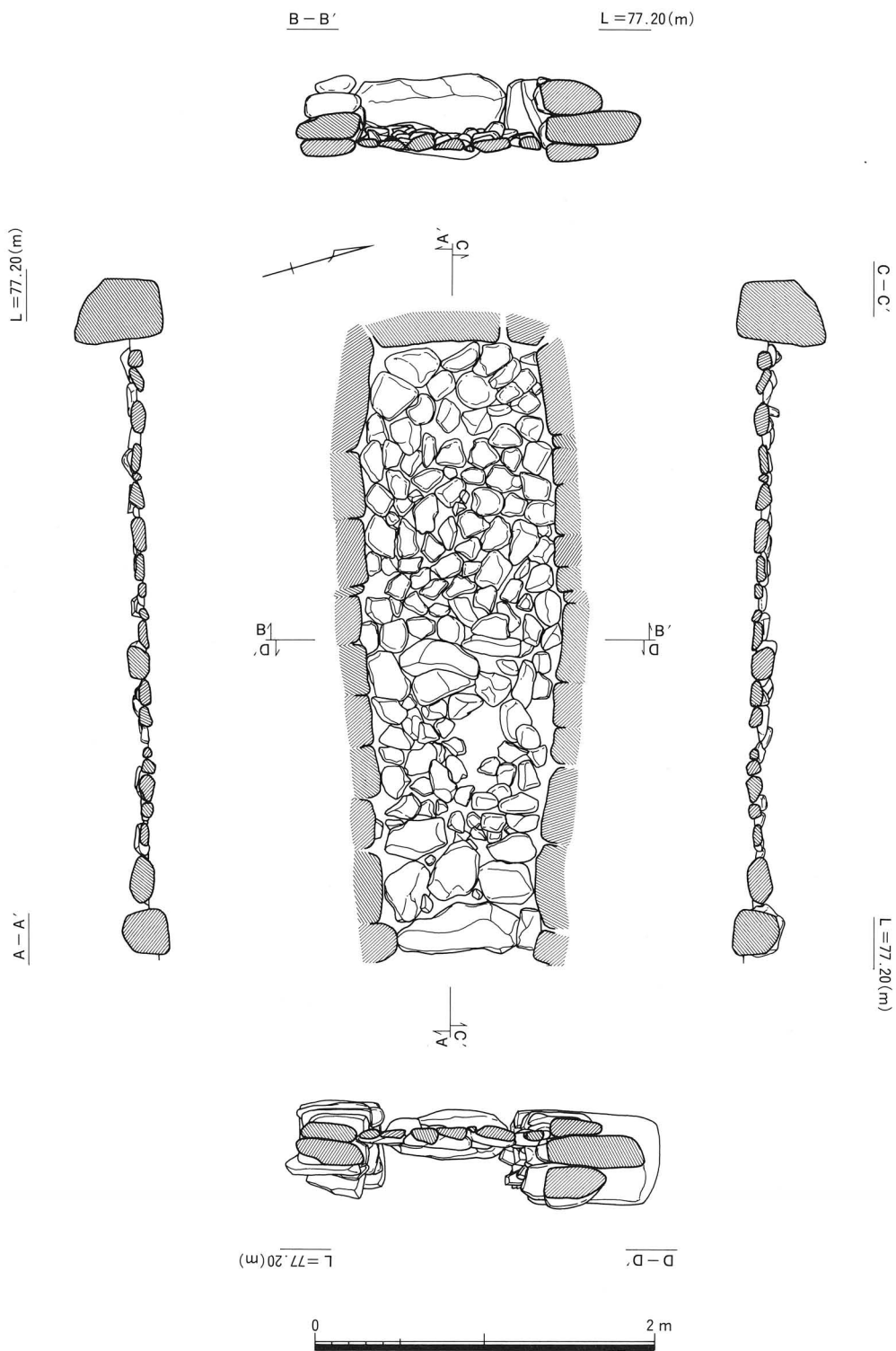


第40図 SM1003横穴式石室内堆積土層図

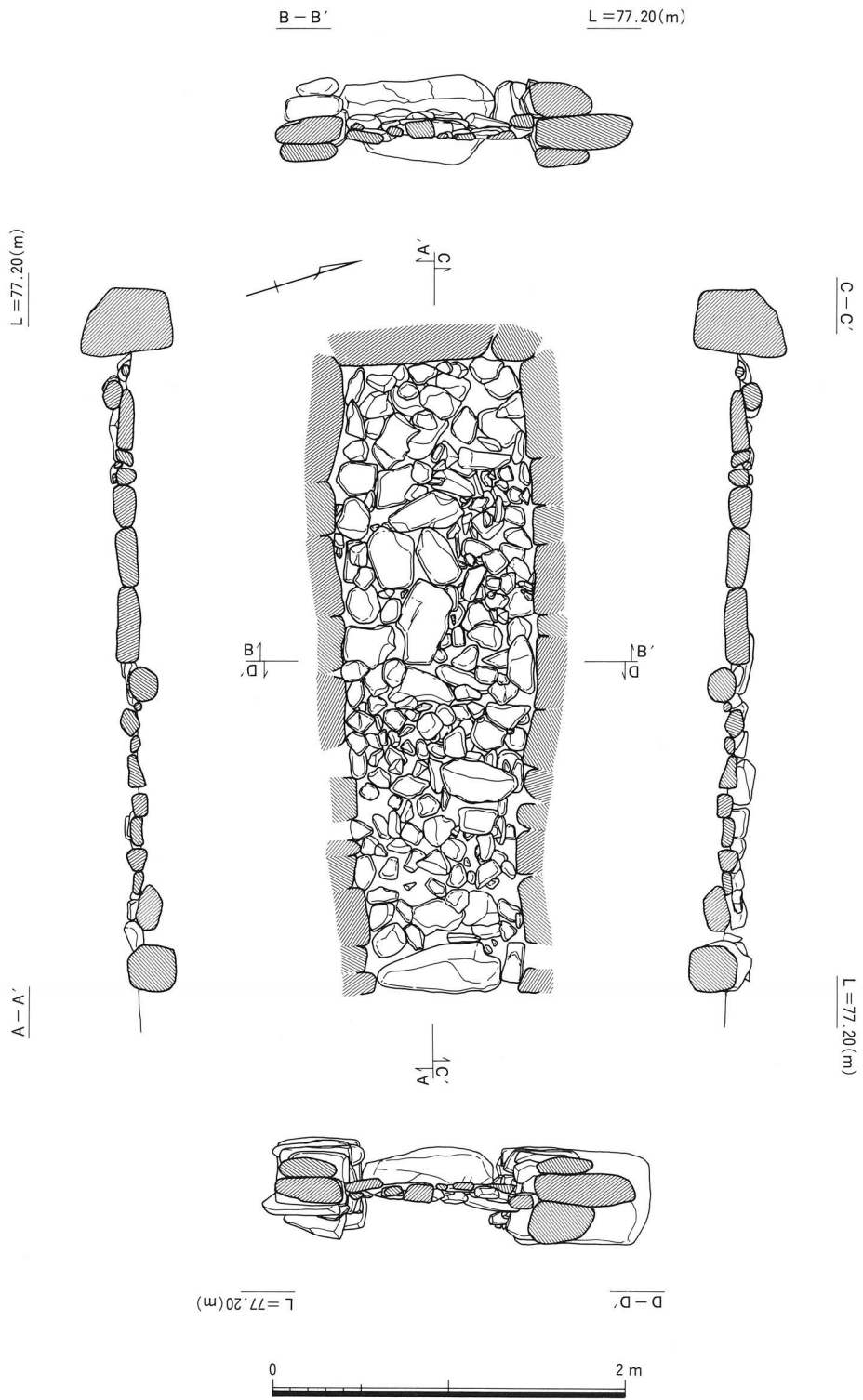




第41图 SM1003横穴式石室实测图



第42図 SM1003第一次床面平面図・断面見通し図



第43図 SM1003第二次床面平面図・断面見通し図

奥壁から開口方向へ緩やかな傾斜がある。羨道部においては33層上面がこれに対応すると考えられるが、やはり開口方向へ緩やかに傾斜している。釘などの緊束道具はみられない。玄室中央部と框石の右側壁寄りには、やや大きめでレベル的にも一段高い石材が用いられており、棺台と考えられる。棺台から想定される棺の規模は長さ1.55m、幅0.60mである。棺台の周辺は礫床の敷き詰めにも乱れがあり、追葬時に礫床の一部を改変したものとみられる。この床面で奥壁寄りと框石寄りの2体の埋葬が復元できる。

#### 遺物の出土状況（第44図）

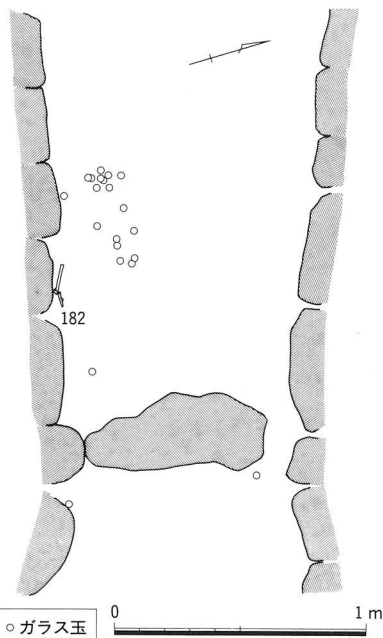
玄室内からは須恵器などの土器類は出土せず、棺台の周辺部からガラス玉49点、刀子1点が出土した。ガラス玉は棺台の中間部分にそのほとんどが集中しており、被葬者の上半身の位置がほぼ特定できる。刀子は右側壁沿いから出土しており、やはり棺内におさめられていたものである。

#### 第二次床面（第43図）

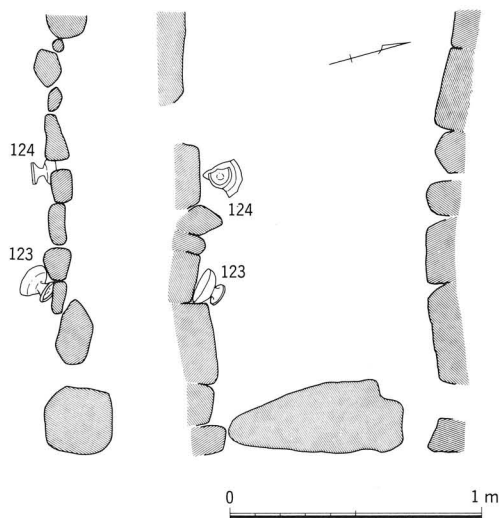
第一次床面における埋葬後、若干の盛り土（4・5層）とともに礫を敷き詰めることによって形成している。床面の平均的なレベルは標高76.65mである。このとき、框石より外側の前室部・羨道部にも盛り土（6層）が行われ、玄室と同レベルを保っていたことが注意される。ただし、前室・羨道部においてはこの床面に伴う遺物はみられなかった。床面は全体が平坦というわけではなく、奥壁右袖部寄りにはやや大形の石を用いた長さ1.70m、幅0.65mの長方形の範囲がある。この範囲内では、周囲の床面よりも5～10cm高く礫を置いている。その規模や位置なども考慮して、棺台の施設と考えてよいであろう。範囲内全体を面として整えている点が、柿谷遺跡の棺台の中では注目される。

#### 遺物の出土状況（第45図）

玄室内から出土した土器は2点で、棺台と框石の間の右側壁沿いに置かれていた。いずれも



第44図 SM1003第一次床面遺物出土状況図



第45図 SM1003第二次床面遺物出土状況図

須恵器の高杯で、1点は伏せて、もう1点は正置した状態での出土である。

#### 羨道部遺物出土状況

羨道部からは杯蓋・甕・土師器の杯など完形品も含めてややまとまった出土があった。これらの出土状況は面的にみて安定しておらず、第二次床面形成時の整地土（第38図6層）に含まれ、初葬時・追葬時いずれの段階に属するかは断定しがたい。

#### 遺物

##### 横穴式石室内出土遺物（第46・47図）

##### 須恵器（114～129・130・131）

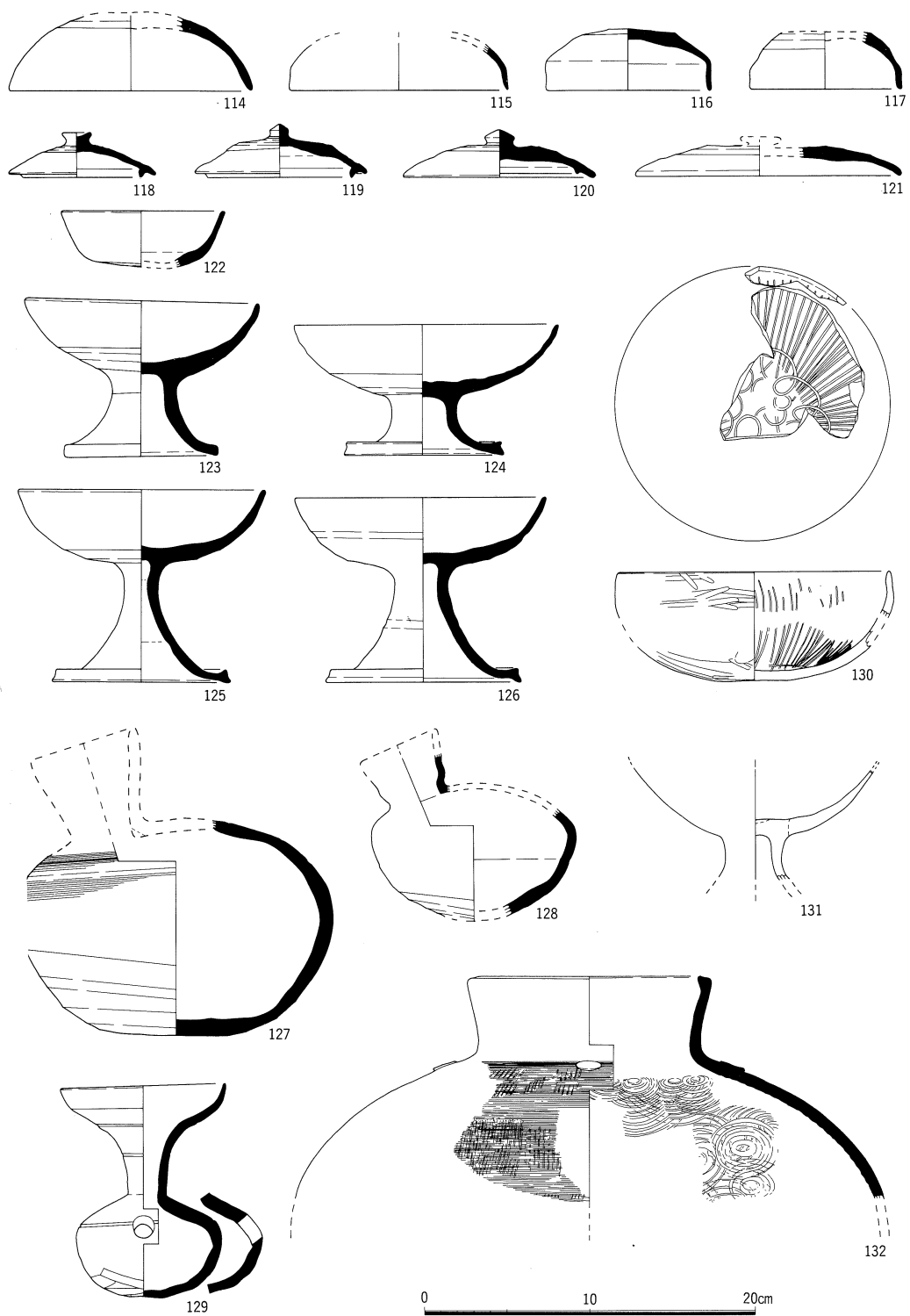
蓋杯は杯と蓋とを合わせて9点が出土しているが、8点の杯蓋が含まれており、うち4点は蓋身逆転後のものである。杯蓋114～117の形態は個体ごとの形態差が著しい。116は小形の蓋であるが、肩に弱い稜を残しており、短頸壺に伴う蓋に多い特徴であるが該当する短頸壺は出土していない。その他の3点についても、これらに見合う杯身はみられない。杯蓋118～121はそれぞれつまみを伴う偏平な器形であるが、法量・つまみの形状・内面のかえりの角度・突出はそれぞれ異なる。118は中央部がくぼむつまみをもつ小形のものである。119・120はやや退化した宝珠形つまみをもつもので、かえりの角度はやや異なる。TK46型式、飛鳥Ⅱ～Ⅲ式に相当する。121はつまみは欠いているものの偏平なものがつくものとみられ、かえりは消失している。MT21型式、飛鳥Ⅴ式に相当する。杯122は石室外の各所出土の破片と接合した。底部外面には回転ヘラ切りの痕跡の痕跡を明瞭に残す。法量的には蓋は118・119が伴うのであろうか。

高杯はすべて無蓋高杯で、4点出土している。浅い皿形となる杯部に脚部を付すものであるが、脚の形状はさまざまで短脚に近いもの（124）、短脚と長脚の間のもの（123・125）、長脚ほどは長くないもののごく弱い沈線によって2段に区画しているもの（126）がある。脚端部の形状もバラエティーが豊富で、水平近くまで開き上下に拡張するのは、比較的新しい要素である。123・126は焼成が不良で、123は杯部内外面が瓦質に近いものとなっている。TK217型式に相当する。

平瓶は大小2点が出土している。127は口頸部を完全に失っているが、体部上面は丸みを帯び下面はやや平坦である。128は遺存する部分が非常に少なく、口縁端部は完全に失われている。体部は上下面とも丸みをもつ。

甕129は羨道部から出土したもので、完形品である。頸部がもっとも細くしまり、急激に口縁部が広がる形態をもつ。したがって、穿孔時に内側に落ちた粘土塊が内部に残る。壺部・口頸部などに沈線を巡らせる。

甕132は羨道部を中心に多数の破片が出土したが、体部1／3以上のみの復元・図化となっ



第46图 SM1003横穴式石室内出土土器

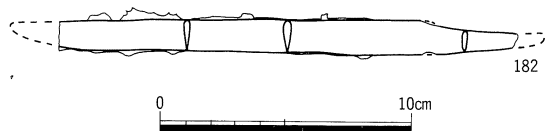
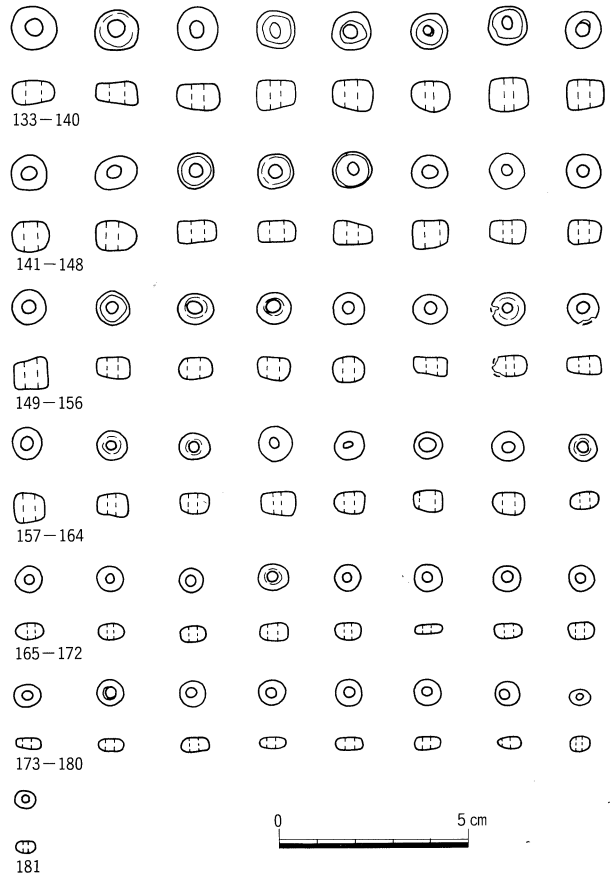
た。体部最大径に比して小形の口頸部を有し、直立する口縁部の上部に端面を有し、内面端部は大きく拡張している。頸部直下の肩にはボタン状の円形浮文を巡らせる。全周で4箇所が付されたものとみて図化してある。外面縦位の平行タタキ後回転カキメ調整、内面は同心円文当て具の痕跡を残す。当て具の直径は8.6cm以上である。

**土師器 (130・131)**

杯130は丸みを帯びた体部に直立し、やや内湾する口縁部がつく。内面に放射状暗文とラセン状暗文、外面口縁部にも横方向のヘラミガキが施されている。底部外面は静止ヘラ削りが施され、ナデ消されている。飛鳥Ⅰ～Ⅱ式の杯Cに相当し、7世紀前半の年代が与えられる。高杯131は杯部と脚部との接合部のみの破片で全形は不明である。混入砂粒は多く、胎土は特に粗い。

**ガラス玉 (132～181)**

49点が出土したが、そのほとんどは第一次床面上框石よりの棺台に集中し、一部が床面よりやや浮いた状態であったり、框石の外側に散乱していた。一連のものともみてよいであろう。径・厚み・重量にややばらつきがみられ、もっとも大きい133ともっとも小さい181では、径で約3.5mm、重量で0.16gの開きがある。色調は紺系統（パーリッシュブルー、ブックウィング、ミッドナイトブルー、ダービーブルー、オックスフォードブルー、インキブルー）のものが27点でもっとも多く、次いで濃緑系統（プルシアンブルー、ピーコックブルー）が21点、青緑（シーグリーン）が1点含まれる。明確な線引きができるわけではないが、紺系統のものが濃緑系統のものよりもやや大型となる傾向がある。



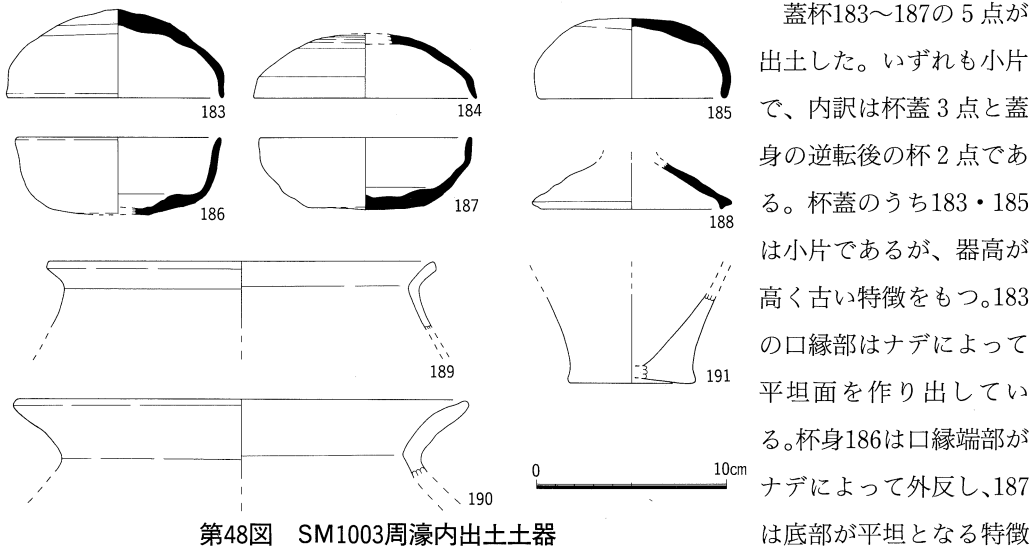
第47図 SM1003出土玉類・刀子

## 刀子 (182)

第一次床面上より出土した。両先端部と関部を欠いている。刃は無関で、背には角関を有していたものと考えられる。遺存する18.35cmのうち、15.15cmが刃部である。刃部幅はほぼ一定で、最大幅は1.3cmである。茎部は断面隅丸方形で中央部付近は幅0.9cm、厚み0.2cmである。木質の痕跡は認められないが、漆とみられる付着物が観察される。

柿谷遺跡調査古墳唯一の工具の出土である。工具類の出土頻度の少なさは、鉄製品の保有率自体の低さとともに古墳群全体の位置づけに関わる問題といえる。

## 周濠内出土土器 (第48図)



第48図 SM1003周濠内出土土器

がある。188は直線的に八の字状に開く脚部で、短脚の高杯のものと思われる。

弥生土器は2点が図化されたが、その他の破片とも非常に摩滅しており、調整の観察できるものは全くなかった。甕189はくの字状に弱く屈曲する頸部をもつ。底部191は甕の一部とみられ、結晶片岩を含む。いずれも胎土中への砂粒の混入は多い。弥生時代後期と推定される。

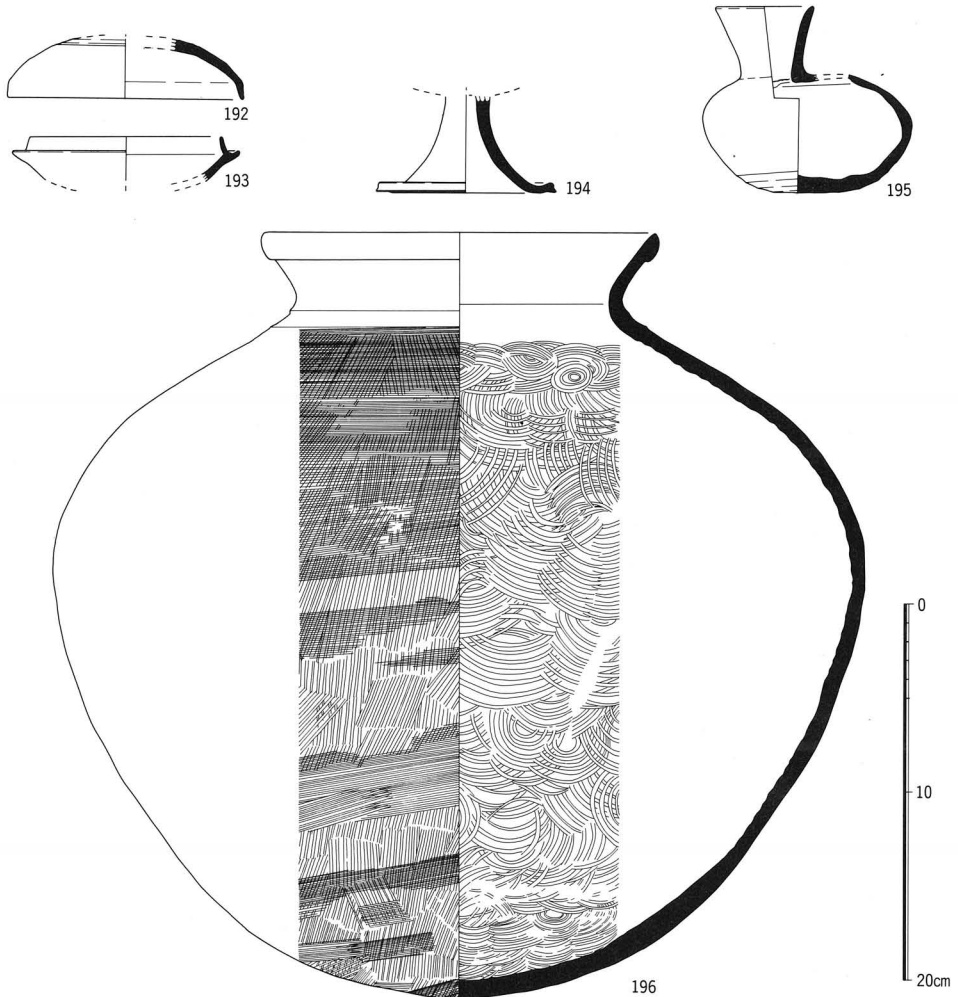
土師器の甕190は口縁部のみ破片で、大きく開く口縁部と粒子の粗い砂粒を多く含む点に特徴がある。内外面に横ナデの痕跡を明瞭にとどめる。

これらの土器から年代を明確におさえることは困難である。しかし、須恵器に関すればTK43~TK217の各型式を含んでおり、横穴式石室内での須恵器の状況とほぼ一致している。土師器の甕は後述する石敷状遺構周辺での類似の土器の出土状況や、この年代の良好な一括資料の少なく、年代を限定することはむずかしく飛鳥~奈良時代の幅をもって捉えておきたい。したがって、横穴式石室内で出土したもっとも新しい飛鳥V式の段階までにはおさまるといふ見通しにとどめたい。



墳丘内出土須恵器 (第49図)

蓋杯は一組分が出土しているが、本来のセットではない。蓋192は低い器高の偏平な器高をもち、肩部に弱い稜が巡る。周濠内出土の蓋184と同一個体の可能性がある。杯身193は軟質で白っぽい焼成になっている。高杯194は脚部のみの破片で、短い脚部の裾部が大きく八の字状に開く。平瓶195は小片となっていたが完形品として復元できたもので、この器形としてはやや小形である。精良な胎土と薄く仕上げられた器壁から丁寧につくられた感を受ける。甕はほぼ完形に復元されるものである。体部の最大径は、中半よりやや上位に位置し、肩部の張りは弱い。底部は緩やかな丸みをもつ。口頸部は短く直線的で、外面端部には断面蒲鉾形の突帯が巡る。体部外面は平行タタキ後に回転カキメ調整を施しているが、平行タタキは縦位で、単位は3cm四方程度で一単位内の条数は11条である。内面の同心円文当て具は径6~7



第49図 SM1003墳丘内出土須恵器

cmで、体部の最大径付近でパターンが変化することから製作単位を示すものと思われる。体部下半及び口頸部内面には、オリーブ色の自然釉が付着する。これらの他に、内面に放射状暗文を施した土師器杯片が出土している。破片の保存状況が悪く、横穴式石室内の杯173と同一個体であるかは断定しがたい。

これらの土器は一型式内の範囲を越えて、TK43～TK217の各型式内に収まる。したがって、杯192・193のように横穴式石室内出土の土器よりも確実に古いものも含まれているが、高杯194・平瓶195・甕196のように破片がより多く散っていた土器が、古墳築造と同年代になる土器には注意しておく必要がある。これは墳丘の項でもみたように意図的な破碎行為を伴う墳丘上祭祀の痕跡とみるべきであろう。

3号墳は疑似両袖式の玄門による複室構造を有しつつ、玄室が胴張りの退化形態を呈するという点が際だった特徴をもつ。2面の整った礫床床面をもち、第一次床面についても礫床の改変による追葬が行われ、最低3体以上の埋葬が行われた。出土した土器も石室内外のものも含めると、かなり多いものとなっている。出土土器の年代からみると、①横穴式石室内で出土したもののもっとも古いグループと墳丘内の土器とが一致するTK217型式の7世紀前葉、②TK46型式・飛鳥Ⅱ～Ⅲ式（7世紀中葉）、③MT21型式・飛鳥Ⅴ式（7世紀末～8世紀初頭）の3つの時期にまとまりがみられる。このうち、第二次床面上で出土した高杯（123・124）が追葬の段階で伴うものとするれば、確실히行われた3体の埋葬は7世紀前葉までに終了していたとみることができる。

#### 4号墳（SM1004）

##### 位置と現状

第10区北端、AF～AH-16・17グリッドに位置する横穴式石室を主体とする円墳である。最も近い3号墳と周濠同士で約9mはなれている。

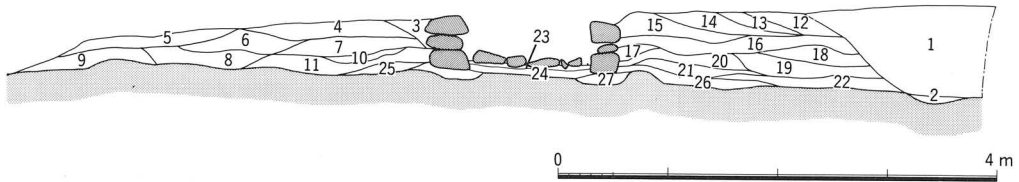
表土直下において検出されたが、検出された時点ですでに墳丘・石室上部構造・開口部が削平されていた。また、石室の北東側には大規模な攪乱があり、墳形はほとんど旧状をとどめていない。

##### 墳丘

調査範囲の関係上全面的な調査が行われていないことと、前庭部が大きく削平されていることから本来の規模は不明であるが、墳丘径8.5mの円形であったと考えられる。ただし、周濠の形状や3号墳の墳丘をみると、正円ではなかったという想定も成り立つ。

墳丘は検出時において、周濠の立ち上がりからの高さが約70cm残っており、そのすべてが盛り土であった（第50図）。盛り土の分層は第51図のようになされ、標準土色帳による黄褐色

L = 77.20(m)

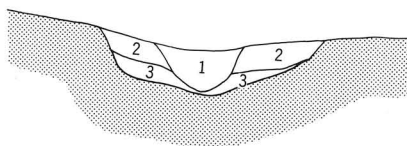


- |                 |                    |                    |
|-----------------|--------------------|--------------------|
| 1 攪乱            | 10 灰黄色2.5Y7/2砂質土   | 19 にぶい黄色2.5Y6/3砂質土 |
| 2 灰黄色2.5Y6/2砂質土 | 11 浅黄色2.5Y7/3砂質土   | 20 灰黄色2.5Y6/2砂質土   |
| 3 浅黄色2.5Y7/2砂質土 | 12 にぶい黄色2.5Y6/4砂質土 | 21 浅黄色2.5Y7/3砂質土   |
| 4 灰黄色2.5Y6/2砂質土 | 13 浅黄色2.5Y7/3砂質土   | 22 にぶい黄色2.5Y6/4砂質土 |
| 5 灰白色2.5Y8/2砂質土 | 14 灰黄色2.5Y6/2砂質土   | 23 灰オリーブ色5Y5/3砂質土  |
| 6 浅黄色2.5Y7/3砂質土 | 15 浅黄色2.5Y7/3砂質土   | 24 浅黄色2.5Y7/3砂質土   |
| 7 灰黄色2.5Y7/2砂質土 | 16 暗灰黄色2.5Y5/2粘質土  | 25 にぶい黄色2.5Y6/4砂質土 |
| 8 浅黄色2.5Y7/3砂質土 | 17 浅黄色2.5Y7/3砂質土   | 26 灰黄色2.5Y7/3砂質土   |
| 9 浅黄色2.5Y7/3砂質土 | 18 にぶい黄色2.5Y6/3砂質土 | 27 にぶい黄色2.5Y6/3砂質土 |

第50図 SM1004墳丘土層図

系の色調を付している。これらのうち、肉眼観察によって黄色味の強い層（3・8・12・15・17層）、黒味の強い層（9・14・16・20・26層）、灰色味の強い層（5・7・13層）は、他の

A - A' L = 76.60(m)



- |                 |
|-----------------|
| 1 黄灰色2.5Y5/1砂質土 |
| 2 浅黄色2.5Y7/4粘質土 |
| 3 黄灰色2.5Y4/1粘質土 |

層と容易に区別ができた。こうした特徴のある層は、互層状態で観察できる部分が見られることから、墳丘築造工程の単位として捉えられるもので、その入念な作業ぶりが窺える。

#### 周濠（第51図）

第51図 SM1004周濠内堆積土層図（ポイントは第37図に記入） 横穴式石室の南側に検出された。その他の部位は調査区外かまたは削平されて失われている。幅は一定ではなく中央部分で広く検出されるなど、その立ち上がりは鮮明ではない。墳丘側での肩は明確ではないが、標高76.50mを目安とすると幅は1.8~4.5mの間で推移する。

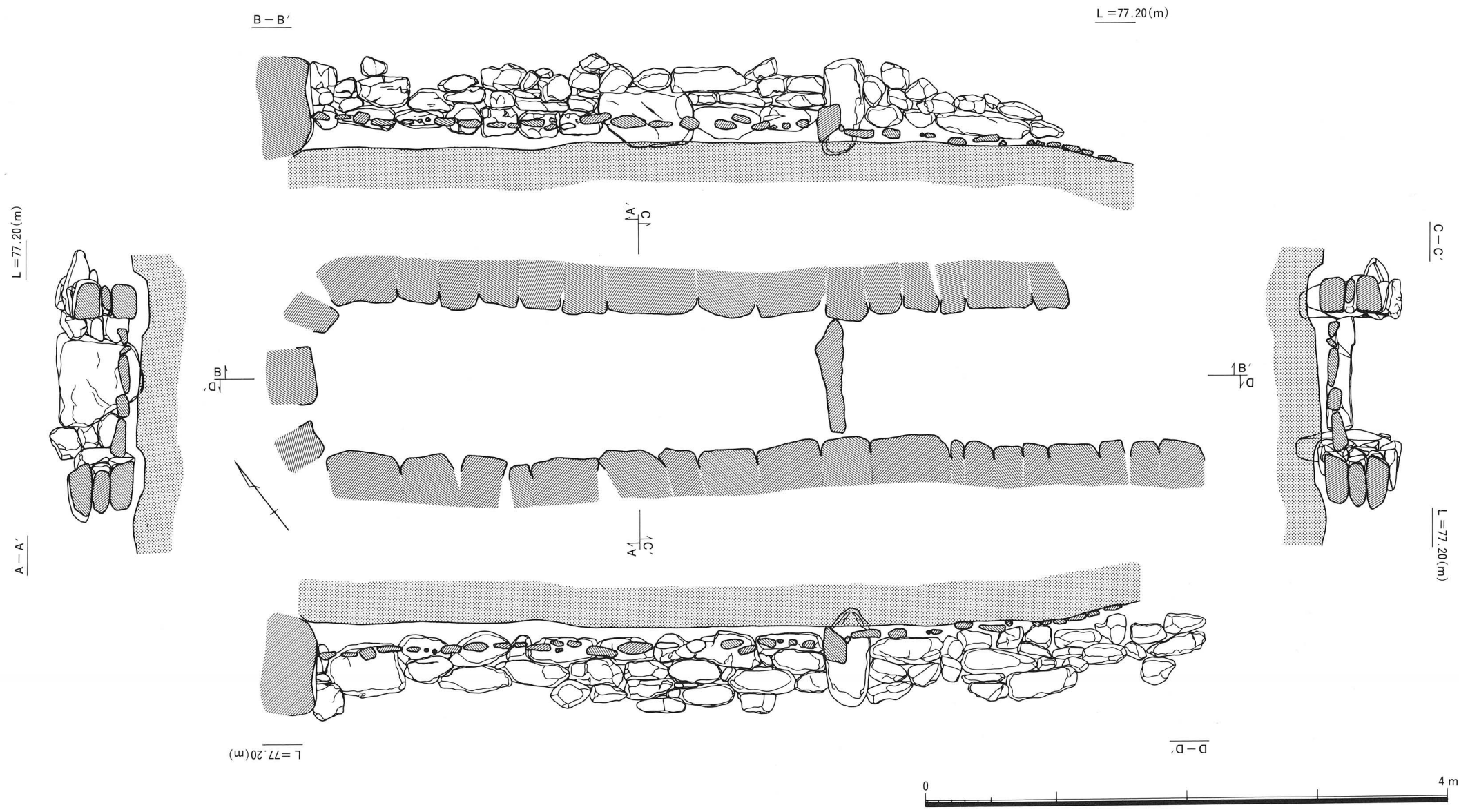
#### 墓壇の規模・形態

調査範囲の制限により、奥壁の後ろ側部分の調査が行われなかったためその全体の規模などは不明であるが、長楕円形の形態をとっていたものと推定される。全長6m以上（推定では約m）、幅は1.70~2.01mの幅を有する。玄門部の立石については、掘り方の底面をさらに5~10cm掘り込んで石材を据えている。

#### 横穴式石室

##### 石室の構築状況

検出された横穴式石室は、玄門部の袖石を羨道部より突出させない形態で、いわゆる「疑



第52图 SM1004横穴式石室实测图

似両袖」式である(第52図)。主軸はN-50°-Wで、南東方向に開口する。玄室と羨道部の幅は基本的には変わらない。全長は現存値で6.80m、玄室長3.88m、玄室の中間部の幅が1.04m、奥壁寄りの最大部分で1.18m、羨道部長は現存値で2.92m、羨道部は玄室よりの最も狭い部分で0.94m、開口部よりの広い部分で1.04mである。石室で最も残りの良い部分で壁体が4段分遺存しており、その部分での第1次床面からの高さは約0.70mである。

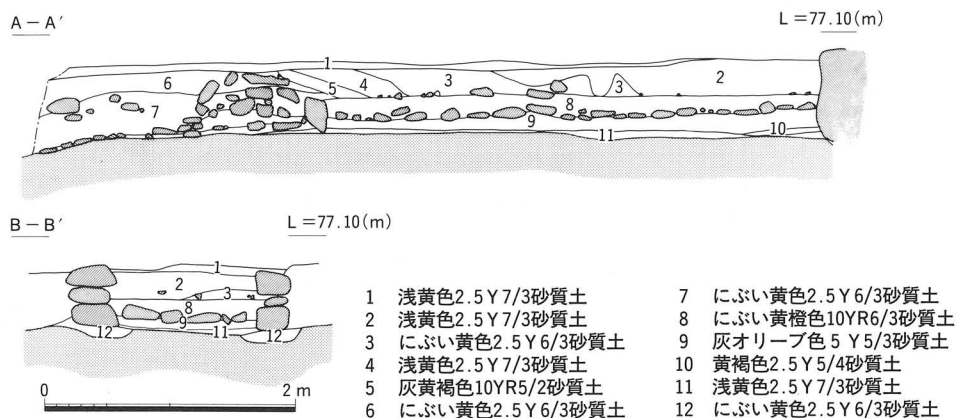
玄室の平面形は大きくみると長方形とみることも可能であるが、玄室の奥壁よりが緩やかに膨らむ点からは胴張りの、後で触れる奥壁の構造からは隅丸の形態を呈する。ただし、胴張りに関しては7号墳で見られるような形態とはやや異なり、退化したものといえる。

玄門部の立石は高さ70cm程度の低いもので当然天井石までは達していない。

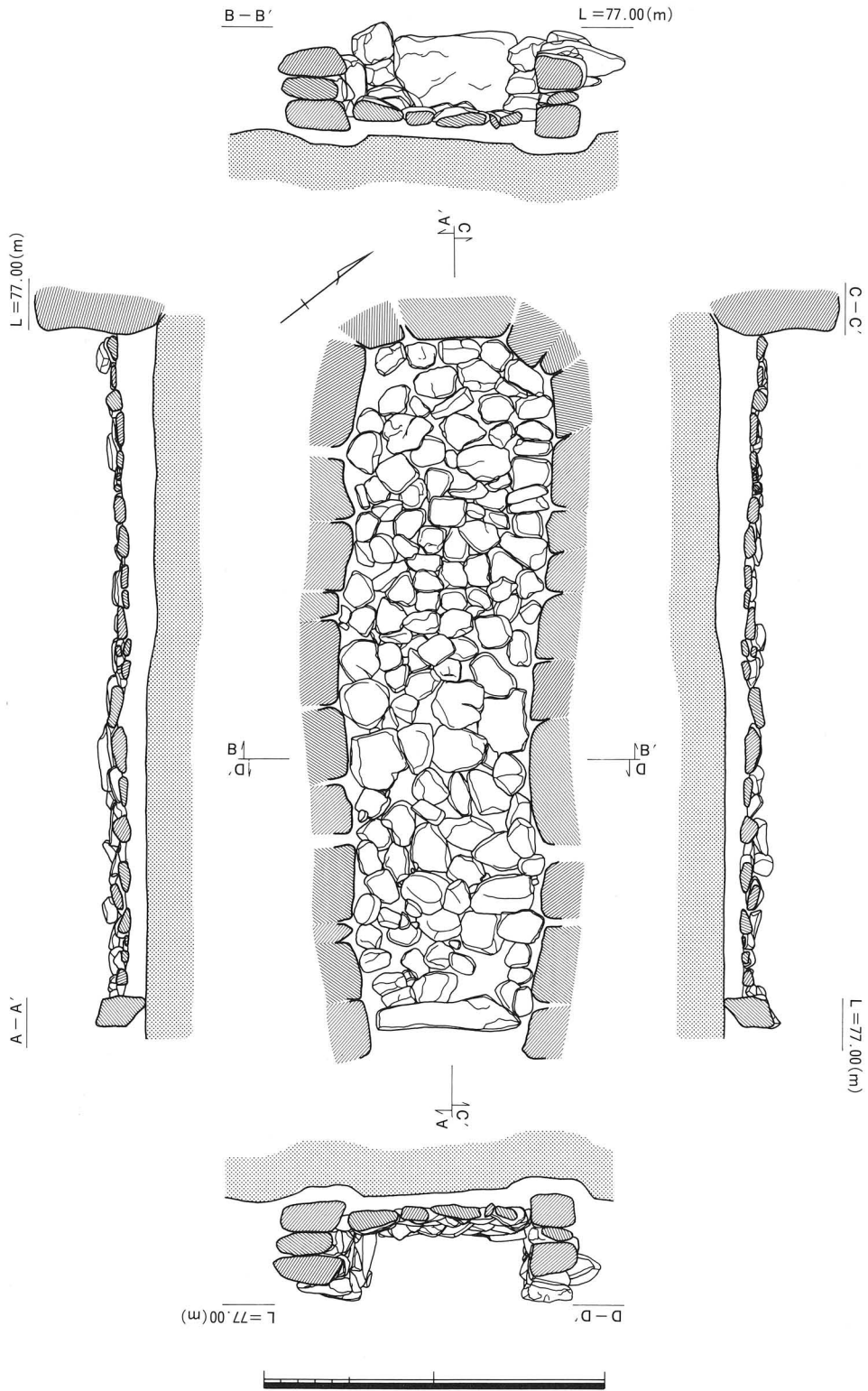
奥壁は玄門の立石と同じ高さの板石を中心に据え、その左右を側壁と同様の石材で縦に積み重ねてゆくもので、この段階まででコーナーでの「三角積み」は行われていない。この奥壁の構造は、奥壁に複数の石材を用いている横穴式石室でも際だった特徴である。

側壁の壁体は基本的に偏平か角柱状の石材の平坦面を内側に向ける小口積みであるが、右側壁の奥壁に近い石材1石・左側壁中央部については2段分の高さをもつ板石を立てて用いている。側壁は2~4段分の遺存がみられるが、両側壁とも中央部やや奥壁よりは小形の石材を中心として積まれている。

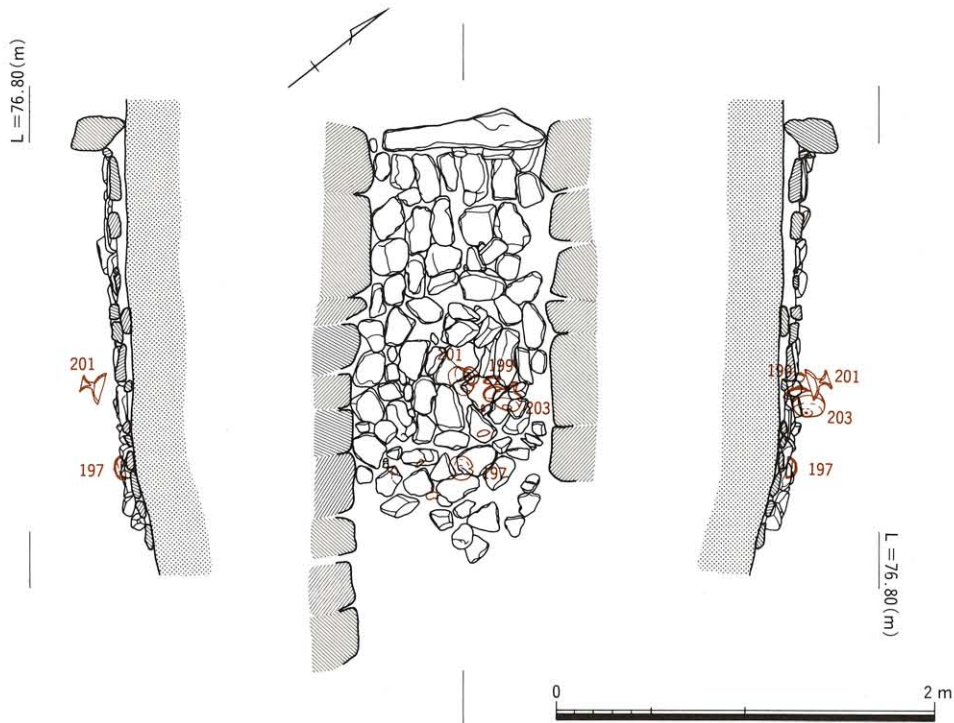
横穴式石室内には二次的な堆積が非常に固くしまった状態で堆積していた(第53図)。玄門部付近では、開口方向より玄室内へ向けて傾斜する堆積(3~6層)が注意される。これらの堆積は第二次床面(8層上面)を覆っており、開口部または羨道部の天井石の隙間からの流入土と考えられる。また、1層は水田耕作時のハガネで、2層は流入土(3層)を切り込んでおり、石室破壊後の堆積とみられる。こうした状況からは、流入土がある程度堆積する段階までは、古墳の破壊が進行していなかったことを示す。そして、破壊後は開墾して田畑



第53図 SM1004横穴式石室内堆積土層図



第54図 SM1004第一次床面平面図・断面見通し図



第55図 SM1004羨道部遺物出土状況

としての利用が行われたのであろう。

### 閉塞石

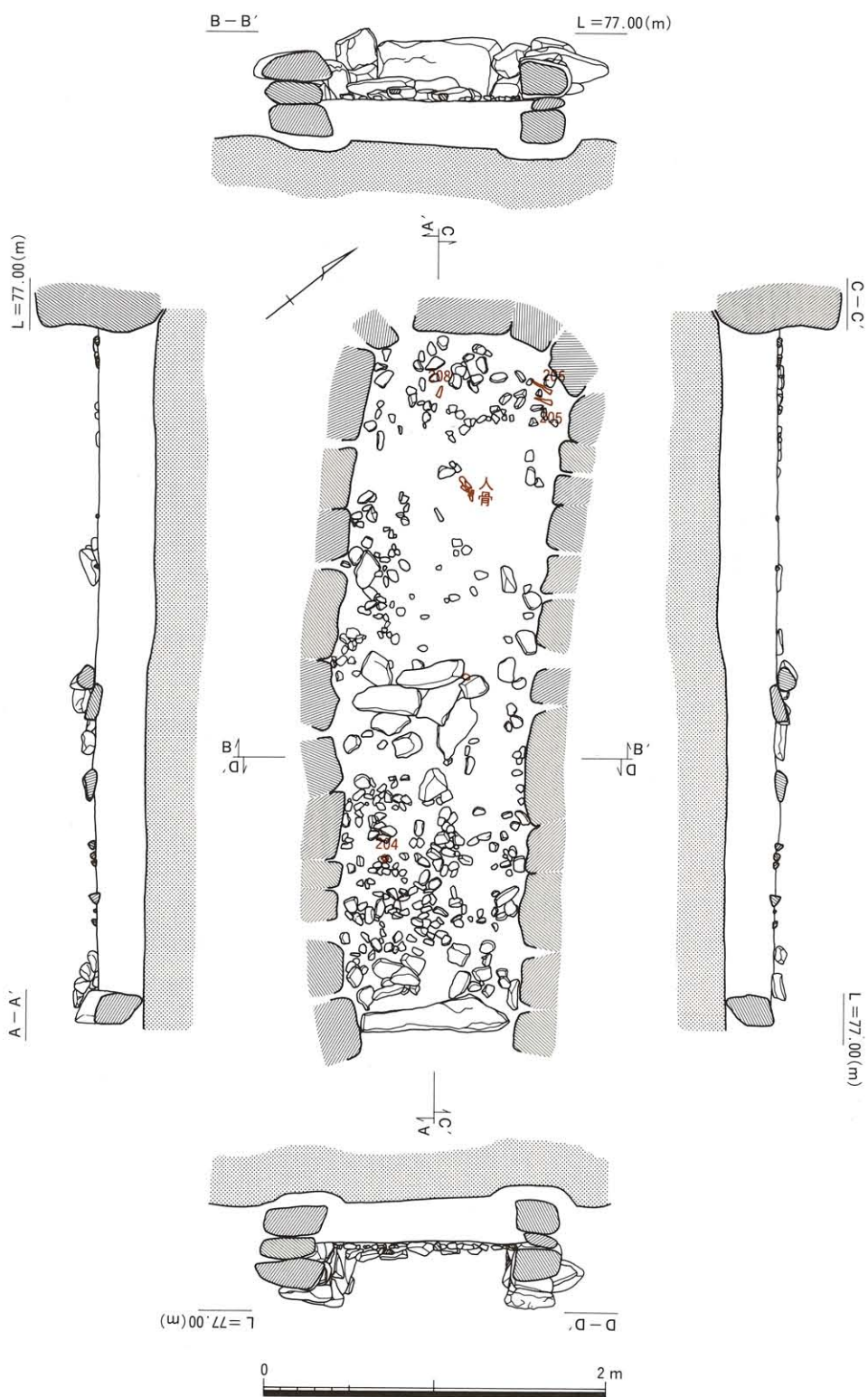
閉塞石は框石を境に羨道部の礫床上を人頭大の礫によって覆っている。検出時には框石より1mの部分に集石の高さのピークがあった。そのため開口方向側には緩く、玄室方向にはやや急な勾配をもっている。玄室内には2面の礫床をもっているが、閉塞石には積み方に一定のまとまりみられず、検出状態の閉塞は2度目の床面に伴うものと考えておきたい。閉塞内には高杯・平瓶など数個体の須恵器を混入していた(第55図)。しかし、後述するように第二次床面に複数の埋葬の可能性が考えられることから、どの埋葬時の副葬時のものかを特定することはできない。

### 床面の形成

玄室内では、二面の床面を検出した。それぞれに異なる点がみられるので、初葬時に形成された第一次床面からみてゆくことにする。

#### 第一次床面(第54図)

墓壇掘削後、基底石を据え整地した(第53図9~11層)段階で礫床の敷設を行っているが、



第56図 SM1004第二次床面平面図・断面見通し図



整地層（9層）と礫床敷設時の層（11層）は分層によって確認された。礫床に用いられているのは砂岩の自然礫で、平らなものを選択している。礫床は玄室の奥半分では一辺20cmのやや小形のものを奥壁や側壁の形状にあわせて丁寧に敷いているのに対して、手前側半分では一辺30cmを越えるものを多く用い、やや平坦さにも欠ける。奥壁側の状況は、奥壁側へ棺を置くための施設と理解でき、その範囲は長さ200cm、幅110cmとなる。この規模を3号墳の各床面における棺台施設と比較すると、幅には問題があるが長さの点ではほぼ一致している。奥壁側へ奥壁と直行するような埋葬が行われていたことが推定される。

羨道部においては、第一次床面と同様の方法で礫床が敷設されている。框石に沿って2列に敷かれている部分があり、羨道部は玄室とは異なる工程単位によっていることが分かる。ただし、より開口部に近い部分では石材の形態などにもやや粗さが目立つ。

礫床は玄室部分がほぼ平坦で、そのレベルは標高約76.50mである。羨道部では框石付近では開口方向へ向けて徐々に傾斜している。

#### 第二次床面（第56図）

第一次床面上に砂質土を敷き詰め平坦にした後、径5cm未満の小礫を敷き、床面を形成している。奥壁側では特別な施設はみられなかったが、中央寄りにはわずかではあるが人骨片が出土している。大腿骨と想定され、奥壁付近へ奥壁と石室主軸に平行な遺体の埋葬が行われていたことはまず間違いないだろう。遺存状況がきわめて悪いため、性別・年齢などの鑑定は行っていない。人骨のさらに奥壁寄りには鉄鏃が7個体出土しているが、破損品を含むことや切先の方向に一定の方向性がみられないことから本来の状況は失われているものの、奥壁よりの被葬者への副葬遺物とみるのが妥当である。中央の羨道部寄りでは一辺20～40cmのやや大形の石材が集中していることと、框石内側に沿ってやや小振りながら同様の集石がみられることから、棺台を構成していたものと考えられる。この集石間には、小礫の密度が濃いことや耳環が1点出土していることから、棺台の可能性が高い。棺台施設から復元される棺の規模は長さ195cm、幅75cmである。したがって、第二次床面上では2体の埋葬が行われたと考えられる。

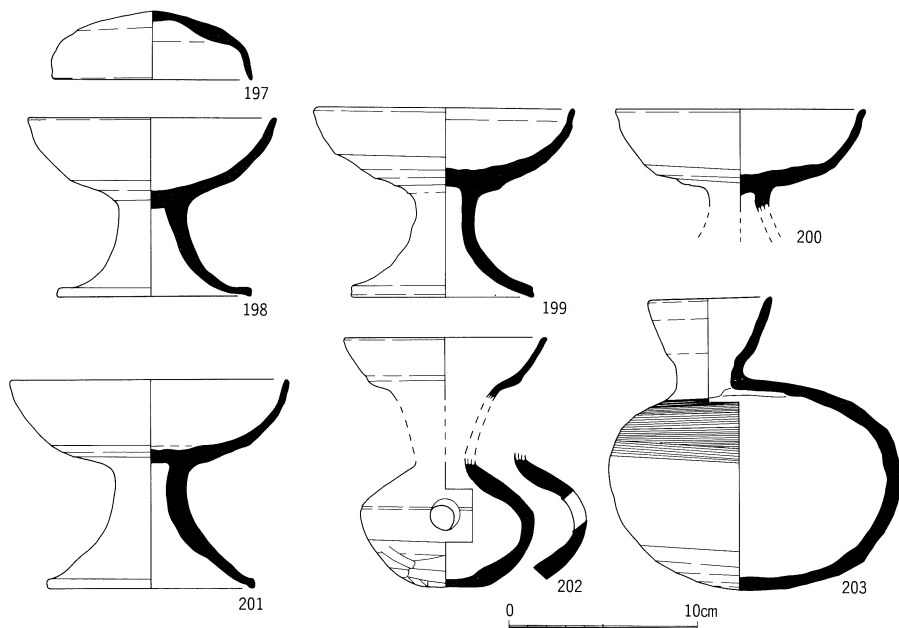
羨道部においては、第一次床面形成以後は閉塞施設が設けられているため、レベルを整えた特別な施設はみられない。

## 遺物

### 横穴式石室内出土遺物

#### 須恵器（第57図）

玄室・羨道部より出土した須恵器のうち、図化を行ったものは7点である。そのうち4点を無蓋高杯が占めるといふ特殊な副葬状況を示している。



第57図 SM1004横穴式石室出土須恵器

蓋197は口径が10.5cmと小形で短頸壺などに伴うものとみられるが、壺本体は遺存していなかった。回転ヘラ切りの痕跡が明瞭に残る。

高杯4点はいずれも

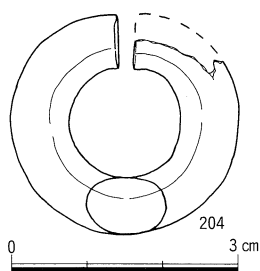
浅い皿形の杯部と裾で八の字状に大きく開く脚部からなる。器形上特に目立ったバリエーションはないが、198と201は焼成が軟質である。脚端部の下方への拡張も共通しており、同工によるものと考えられる。198～200の3点は口縁端部がやや屈曲する。

臬202は破片となって横穴式石室内の各所に分散していた。頸部がすばまり口頸部が大きく開く形態のもので、壺部最大形の沈線は非常に退化している。焼成は軟質で、高杯198・201と共通の色調をもつ。

平瓶203は口縁部の一部を欠くがほぼ完形となるもので、やや丸みの強い体部と大きく開く口縁部に特徴がある。口縁部・体部上面を中心に自然釉の付着がみられる。

これらの須恵器の各器種のうち、高杯杯部の形態や脚部の形状を中心に考えると、TK209型式、6世紀末～7世紀初頭の年代が与えられる。

その他に、小片となっていたために復元図化が行えなかったものとして、第一次床面礫床



第58図 SM1004出土耳環

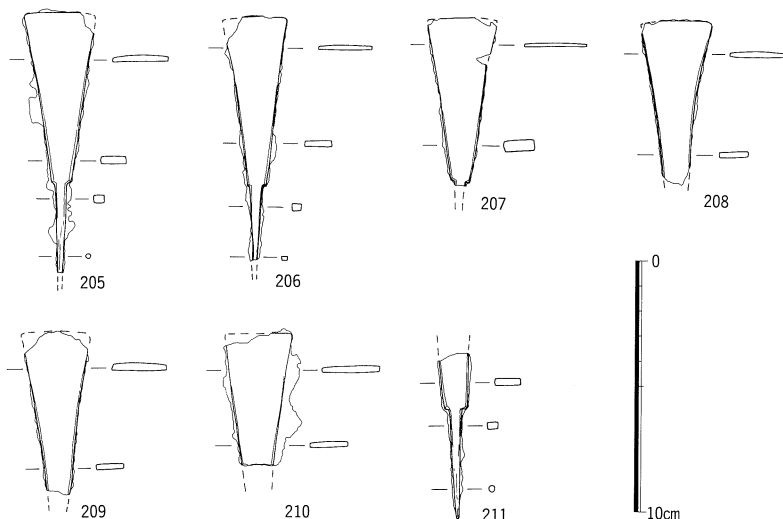
下より出土した平瓶がある。焼成が不完全のため、内面が黄褐色を呈し軟質である。明確な年代を決めることは困難であるが、閉塞石内で出土した土器と年代差のないTK209型式前後と考えてよさそうである。この平瓶と同一個体の破片が3号墳羨道部より小片となって出土しており、3号墳と4号墳との関連を考える上で見逃せない資料である。

耳環 (第58図)

204は第二次床面より出土したもので、銅地銀張りである。芯は8.35～9.80mm、厚さ0.8mmの中空の銅管であり、表面の銀はほとんどが剥落している。

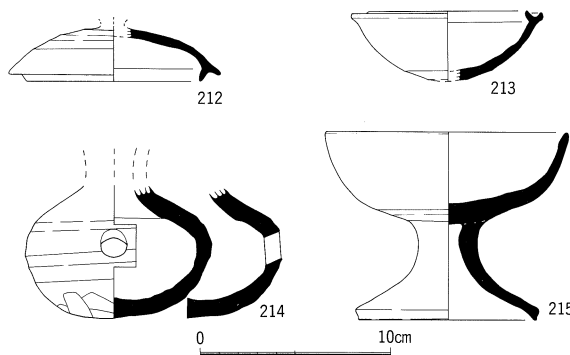
#### 鉄鏃 (第59図)

鉄鏃は7点が出土したがいずれも平造方頭式のものであるが、完形品となるものは1点もなかった。鏃身関は角関で、茎部は断面長方形であるが、211では先端は断面円形で茎尻は尖り気味である。刃部幅は想定復元されるものも含めて2.55



第59図 SM1004出土鉄鏃

～2.9cmに収まるなど、形態・法量にばらつきはみられない。茎部に木質の痕跡は認められなかった。



#### 周濠内出土須恵器 (第60図)

杯蓋212は杯身逆転後の器形で、かえりは短い。上面の自然釉と灰の付着が著しい。杯身213は口径に比して深い器高を有する。立ち上がりはきわめて短い。やはり外面

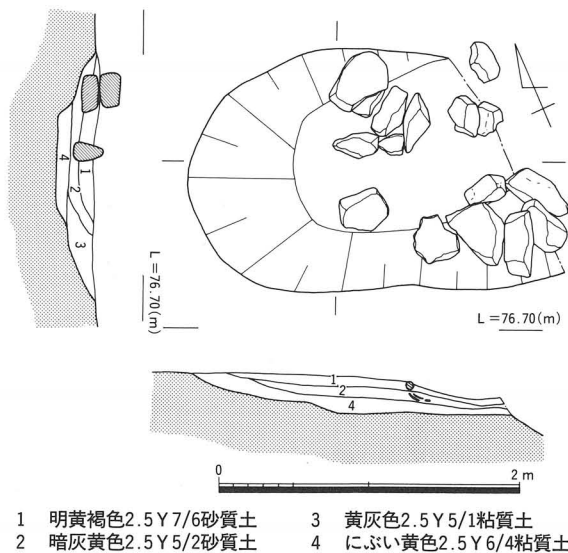
第60図 SM1004周濠内出土須恵器

に自然釉の付着がみられる。全般に器壁が厚く、重量感がある。甕214は口頸より上部をすべて欠く。高杯215は細片となって第12調査区からの破片も接合しており、外面に付着したクリーム色の灰が特徴的である。杯部はやや深く、口縁部は直立する。口縁部などを欠いているため実測図は掲載しなかったものの、平瓶が1点出土している。底部をナデ・ユビオサエによって平坦としている。これらの須恵器はいずれもTK209～TK217型式に属するもので、横穴式石室内出土の土器と比較して年代差はないものとみてよい。

4号墳は疑似両袖式をもつ横穴式石室を主体としており、床面は一次のみに礫床を設けて

いた。玄室は胴張りの傾向を残すもので、胴張りの度合いは7号墳よりは弱く、1号墳・3号墳よりは強い。玄室幅についても胴張りと同様の傾向を示している。出土土器は横穴式石室内のものはTK209型式の範囲内に収まり、6世紀末～7世紀初頭の年代が与えられる。これらの土器がどの床面に伴っていたかは不明であるが、出土状況や礫床下面の土器のおおよその年代からみると第一次床面への副葬品とみてよいであろう。3号墳と4号墳の横穴式石室の構造を比較すると、4号墳では複室構造は未採用で胴張りの度合いも顕著である。とすれば、形式的に新しい3号墳の横穴式石室が後出のものとなり、4号墳の3体の埋葬は土器の一型式の範囲に収まる短い期間に行われことになる。したがって、初葬は6世紀末～7世紀初頭で、追葬された2体に関しては4号墳の築造・追葬の行われ方からみて7世紀前葉に収まると想定される。

第一次床面への副葬品として鉄鏃7点が出土した。8基の横穴式石室の調査においても多量とはいえるが、近隣の同時期の古墳と比べてきわめて貧弱な内容である。4号墳のみならず、柿谷遺跡の古墳群全体の評価として検討すべき課題である。



第61図 ST1001平・断面図

### 墓壙の規模・形態

墓壙は長楕円形のプランを有し、長軸は検出された状態で1.22m、短軸0.82mの規模をもつ。失われた東側を復元によって補うと、長軸は1.3m余りとなる。主軸はN-66°-Wである。上面及び堆積土上層には一辺30cmを上回る砂岩の自然礫が集中してみられたが、石室などの構造は復元しえない。埋土のうち第4層のみは粘質土であり、土坑底の整地の可能性がある。第2層には土師器片数点が包含されていたが、摩滅が著しく図化も不可能であった。偶然の混入とみられる。

埋土中からは人骨は確認されなかったものの、その規模などからみて土壙墓の可能性があ

### 1号墓 (ST1001) (第61図)

#### 位置と現状

第10調査区北半、AE・AF-17グリッドにおいて検出された。この位置は3号墳と4号墳の中間地点に相当し、後述する石敷状遺構の礫を除去した段階で平面形などが確認された。調査区東端に位置するため東側の一部が失われていた。

る。出土した土器からは年代は不明であるが、土墳墓であるとすれば3号墳・4号墳との位置関係からみて7世紀初頭から前葉の築造の可能性を考えておきたい。

## 2号墓 (ST1002) (第62図)

### 位置と現状

第10調査区北半、AF-17グリッドに位置し、ST1001の北西に隣接する。後述の石敷状遺構の礫を除去した段階でその存在が確認された。石敷状遺構の下面の断ち割り確認のため北西部の一部が失われた。

### 墓壇の規模・形態

墓壇は細長い楕円形のプランを有しており、長軸は検出された状態で1.76m、短軸は1.12mである。主軸はN-48°-Wである。埋土上面には一辺

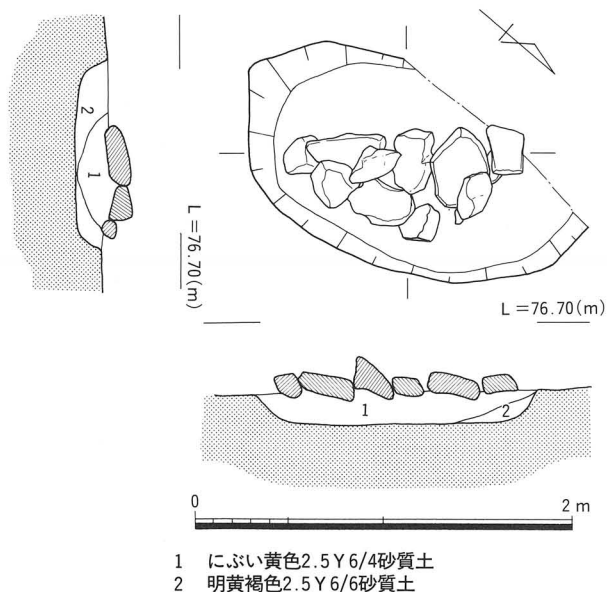
20~30cmの砂岩の自然礫が並んでいたが、構造は復元できない。出土遺物はなかった。

埋土中からは人骨は確認されなかったものの、その規模や1号墓との関連から土墳墓の可能性が高い。出土遺物がなかったため、年代は推定であるが、その位置関係などからみて3号墳・4号墳に近い7世紀初頭から前葉とみておきたい。

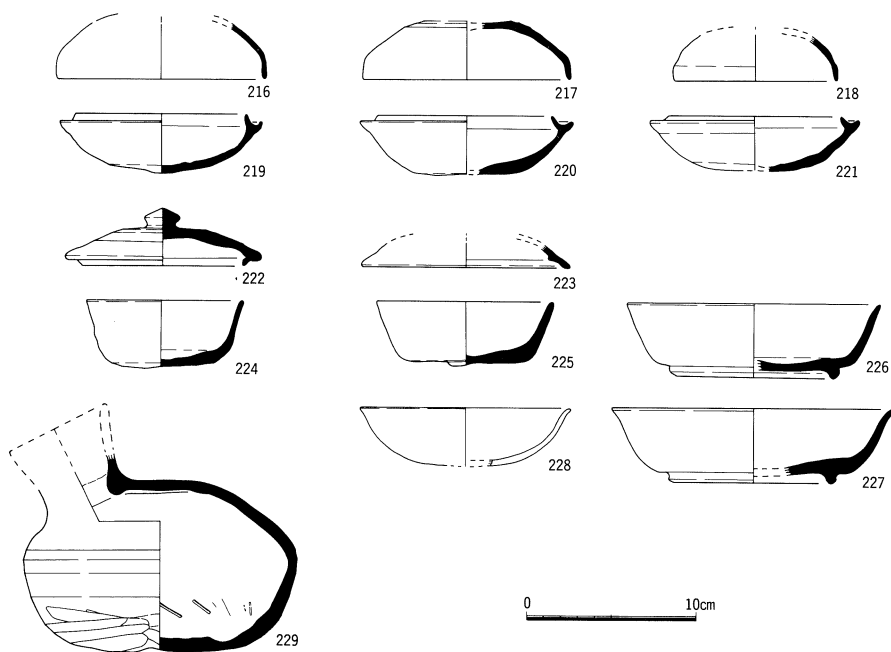
### 石敷状遺構

第10調査区の3号墳と4号墳との間には、横穴式石室を構築しているのと同質同大の砂岩が敷き詰められている空間があった。調査当初、礫が上面を平坦に揃えている部分が認められること、礫が隙間をもち小区画となっていることなどから、古墳群との直接的な関係をも想定していた。しかし、断ち割りをを行った結果、礫を取り外した段階で素掘り溝が検出された(図版)こと、礫の下位にあたる4号墳の周濠上面において、古代または中世後期の可能性をもつ土師質土器が出土していることより、開墾の際に耕作地を平坦にするために古墳の墳丘及び横穴式石室を削平しつつ、その谷となる部分を埋め立てた結果であることが判明した。しかしながら、なぜ整然とした小区画に敷き詰めたかなどについては、調査の成果からは明らかにすることができなかった。

遺物は石敷の上下、盛り土内にほぼ均等に含まれており、その出土状況には規則的なものはみられなかった。



第62図 ST1002平・断面図



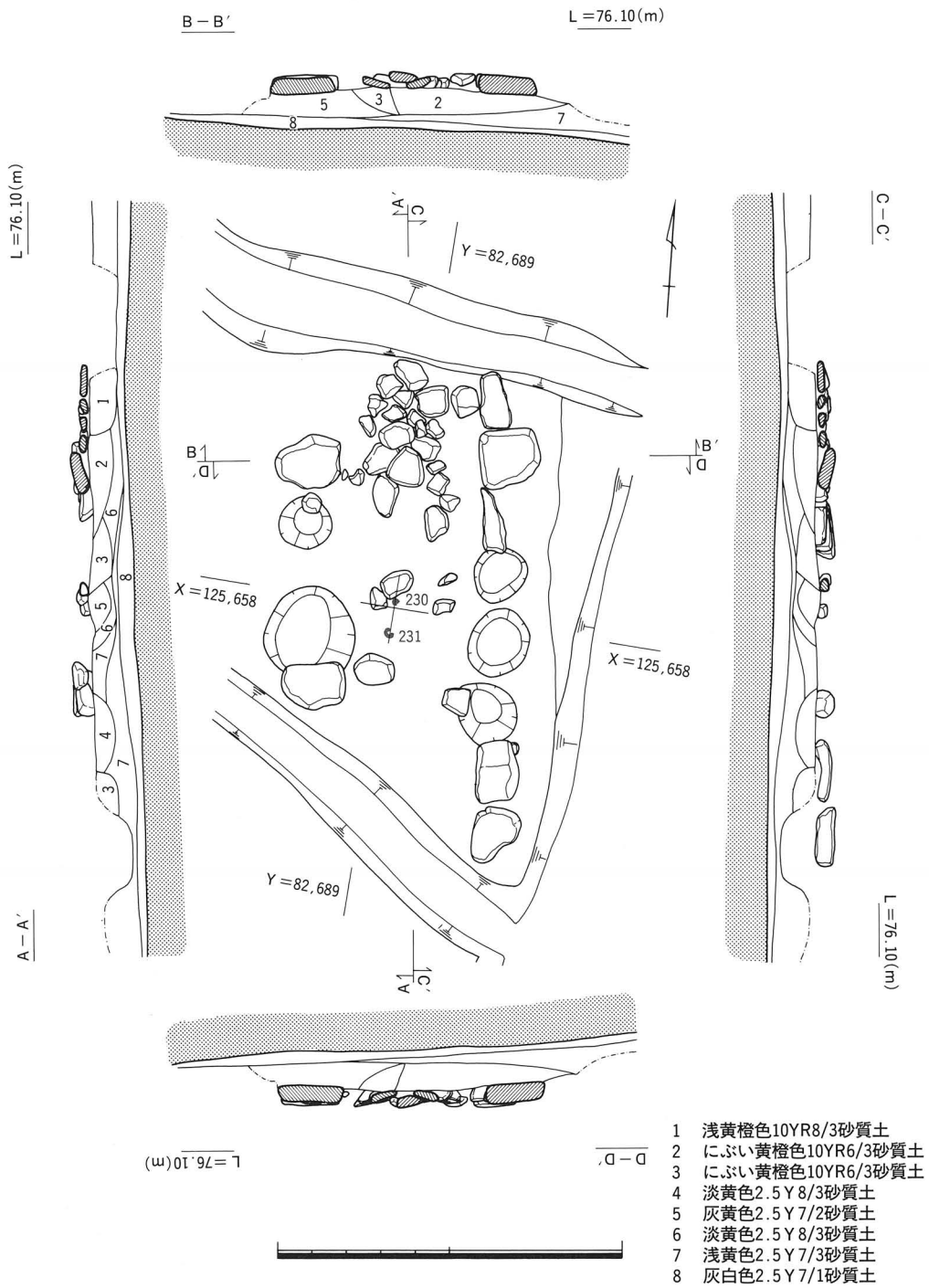
第63図 第10調査区石敷状遺構内出土土器

### 石敷内出土遺物（第63図）

蓋杯は12点が図化可能であった。形態によって大きく二者に分けることができる。216～221は、扁平で底部がやや直線的で短く内傾する立ち上がりを有する杯身に、口径が小さく丸みを持ち稜線などが退化した蓋がつくものである。これら6点には回転ヘラ切り後ナデ調整は施されているものもあるが、回転ヘラは省略されている。217の形態は3号墳出土の184・192と近いものであるが、色調に若干の違いがある。216と221は外面に付着する灰などの状況から本来のセットであろう。これらはTK209型式に位置づけられる。222～227は蓋杯の形態が逆転後のもので、法量などからさらに分類が可能である。杯身224・225は口径が小さく、器高がやや深めである。底部外面に回転ヘラ切りの明瞭な痕跡をとどめる。TK217型式である。杯蓋222・223はほぼ同様の法量を有するもので、かえりの形態などに違いがある。222の外面にはオリブ灰色の自然釉が濃厚に付着する。TK46型式、飛鳥Ⅱ～Ⅲ式である。226・227は前の2グループと比べて、口径・器高ともに大きくやや外側へ開く高台をもつ。TK48型式、飛鳥Ⅴ式にあたる。

228は土師器杯で、口縁端部が外側へ屈曲する特徴がある。摩滅によって器表面の観察は困難であるが、放射状暗文が施されているようだ。1号墳出土の37・38と類似した形態であり、飛鳥Ⅰ～Ⅱ式、TK209～TK217型式に並行するものと考えられる。

229は口縁部を欠く平瓶で、口径部の外への傾斜がやや大きい。体部下半内面に長さ1.5cmの



- 1 浅黄橙色10YR8/3砂質土
- 2 にぶい黄橙色10YR6/3砂質土
- 3 にぶい黄橙色10YR6/3砂質土
- 4 淡黄色2.5Y8/3砂質土
- 5 灰黄色2.5Y7/2砂質土
- 6 淡黄色2.5Y8/3砂質土
- 7 浅黄色2.5Y7/3砂質土
- 8 灰白色2.5Y7/1砂質土

第64図 SM1005横穴式石室実測図

圧痕が全周する。ヘラ削りの原体であろうか。体部下半は上半に比べて、極端に軟質である。

出土した土器は、6世紀末～7世紀初頭、7世紀中葉、7世紀末～8世紀初頭の3つの年代のものが含まれている。これらの土器の年代は3号墳・4号墳の出土土器のそれとほぼ一致してくることが分かる。特に、3号墳出土の土器と比較すると、119と225、121と226・227のようにセットをなす可能性のあるものが含まれていることに注意したい。石敷状遺構の形成と3号墳の破壊が一体のものであるとともに、3号墳の追葬の際の土器が石敷状遺構から出土することは3号墳で出土した土器がどの埋葬に伴うかを不明確にするものである。

### 5号墳 (SM1005) (第64図)

#### 位置と現状

第11調査区南寄り、AA-18グリッドに位置する。2号墳・3号墳・6号墳などともに、もっとも遺構の密集した地域の一角を占める。第11調査区の南端付近には溝状の攪乱が集中しており、5号墳もこれらの攪乱によって大部分が破壊されている。したがって、横穴式石室の基底石と礫床の一部分が原位置にあり、きわめて遺存状況は悪い。

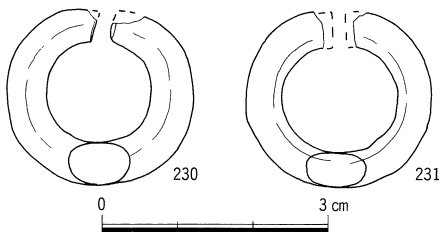
#### 墓壇の規模・形態

墓壇は攪乱によって破壊されているため規模・形態などは不明であるが、礫床の下面より約10cmが遺存していた。他の石室の例などを参考にすると、この数値は本来の墓壇の深さと一致しているとみられる。

#### 石室の構築状況

横穴式石室のうち遺存していた部分は、玄室の基底石部分で検出全長は2.91m、その幅は0.79mである。玄室の平面形態は失われた基底石の抜き取り穴の位置・形態も加味すると長方形であるが、若干中央部が膨らむ胴張りの退化したプランであろう。基底石はいずれも板状の偏平な石材の小口の平坦部分を内側に向けており、立てて用いることの多い1号墳・3号墳・4号墳とは異なる構造をもつ。礫床は一辺10～25cmの小形の偏平な礫を用い、平坦な床面を形成している。礫床のレベルは標高約76.10mで、基底石の上面のレベルと一致している。検出された玄室の中央部付近の近接した位置から、耳環が2点検出された。これらの

位置が原位置を保っているとする、3号墳の第二床面の例にもある通り二体目の埋葬に伴う可能性がある。



第65図 SM1005出土耳環

#### 遺物

##### 耳環 (第65図)

230・231はいずれも中実の銅管を芯とした銀張



りのものである。遺存状況はともにほぼ良好である。縦径23mm前後、横径25mm余り、重量13gと共通した寸法をもち、本来のセットとみなしてよい。

5号墳は遺存状況のきわめて悪い古墳であり、構造などもほとんど不明である。一部遺存していた玄室構造からみると、胴張りが退化してほぼ直線的となる6世紀末から7世紀初頭の築造が想定される。また、外部施設についても不明な点が多いが、SK1002はその位置関係からも周濠の可能性もある。

## 6号墳 (SM1006) (第66図)

### 位置と現状

第11調査区中央部東端、AC-19・20グリッドに位置する。第11調査区と第12調査区の境界となる畦によって破壊されている。したがって、6号墳は横穴式石室の一部のみが残り、墳丘・周濠の規模など不明な部分が多い。破碎された須恵器甕が出土したSK1002は6号墳の周濠となる可能性もある。横穴式石室は玄室の西側壁の基底石と床面の礫床が遺存する。奥壁は失われていた。

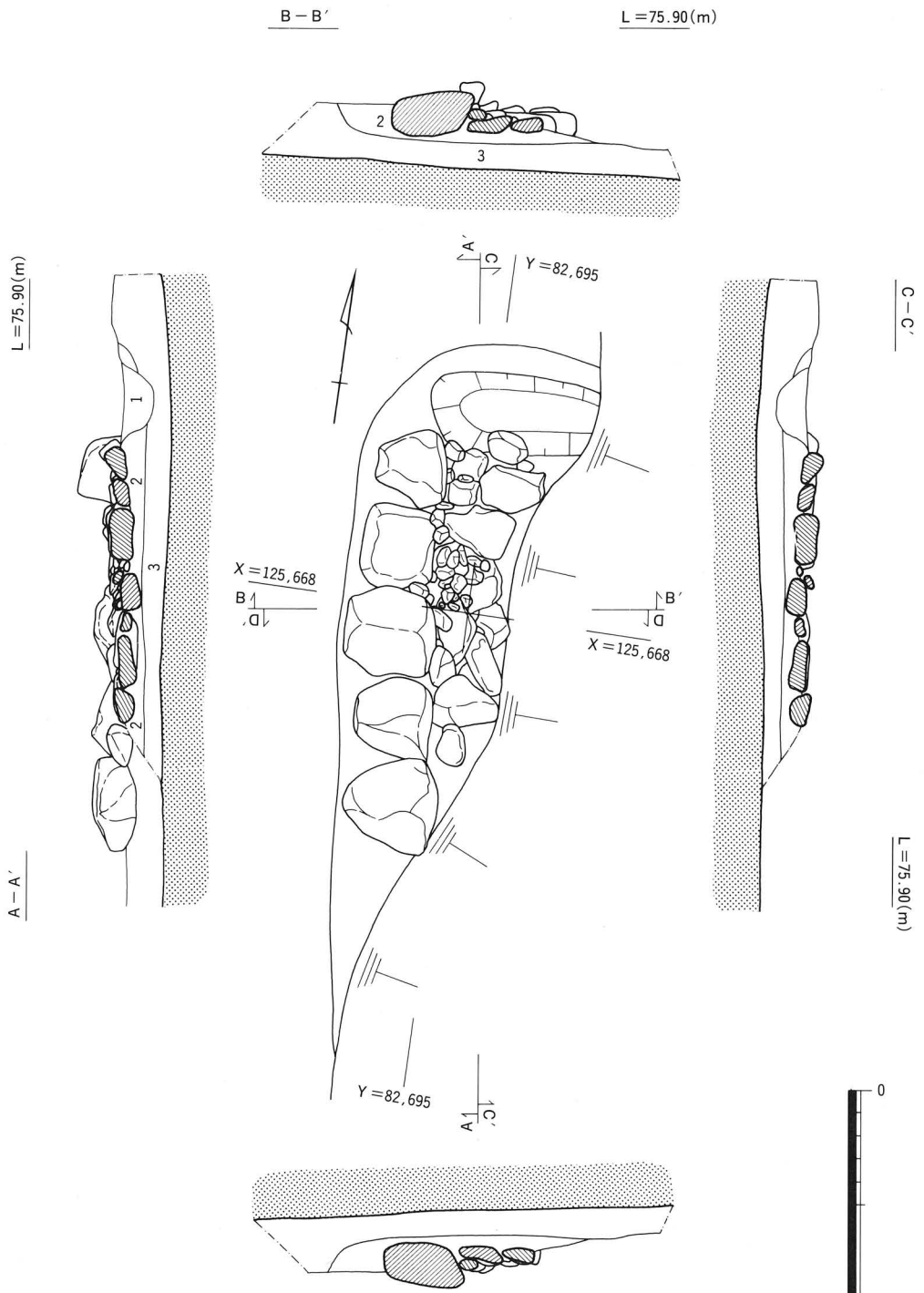
### 墓墳の規模・形態

そのほとんどが破壊され全体の規模は明らかではない。遺存する部分をみると1.52m、幅が0.52mで、現状での深さは11cmである。その掘り込みは基盤層までは及んでいない。

### 石室と床面の構築状況

横穴式石室は遺存状況はきわめて悪いが、残された石材などからその概要をみることにしよう。石室はすべて砂岩の自然石を使用し、玄室の一部を残すのみで、羨道・玄門の構造は明らかではない。基底石は一辺30～40cmのやや大形の石材を小口積みになっている。奥壁の抜き取り穴は板石を立てて用いていたことを示しているが、一石か二石かの断定はできない。奥壁抜き取り穴と側壁との角度からは、わずかに胴張りの傾向がみられる。これらの特徴からは3号墳との類似が指摘できる。床面は一辺20～30cmの偏平な礫を用い、隙間に拳大の小円礫を充填して、平坦面を整える。小円礫の充填は7号墳などにみられる。遺存する横穴式石室の玄室長は1.75m、幅は0.63mである。主軸の方位は明らかにし得ないが、胴張りを有するとした場合N-7°-W、長方形プランであるとした場合N-2°-Wとなる。6号墳の横穴式石室に伴う遺物は全くなかった。

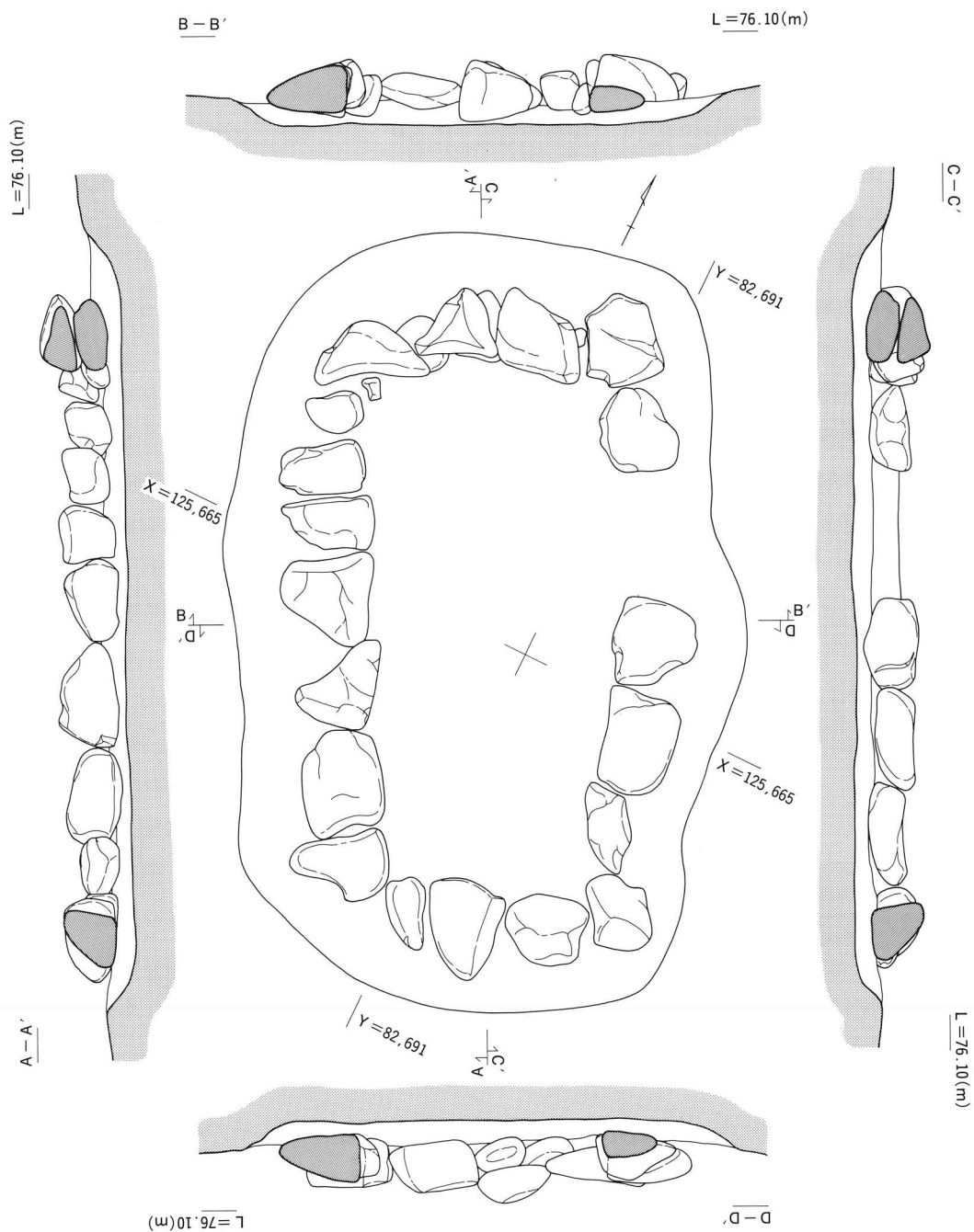
きわめて遺存状況の悪い横穴式石室を主体とする古墳であるが、径10m程度の墳丘をもっていたと考え、隣接する4号墳、4号溝との位置関係は微妙なものとなる。6号墳からは出土遺物はなかったが、玄室にわずかな胴張り傾向がみられることや奥壁の構成からみて、



- 1 にぶい黄色2.5Y4/4砂質土  
 2 淡黄色2.5Y8/3砂質土  
 3 浅黄色2.5Y7/3砂質土

第66図 SM1006横穴式石室実測図

3号墳に近い時期の築造が想定される。



第67図 ST1003竪穴式石室実測図

### 3号石室墓 (ST1003) (第67図)

#### 位置と現状

第11調査区中央部やや南より、AB・AC-18・19グリッドに位置する。3号墳横穴式石室の開口部の延長上にあたり、5号墳・6号墳とも隣接している。

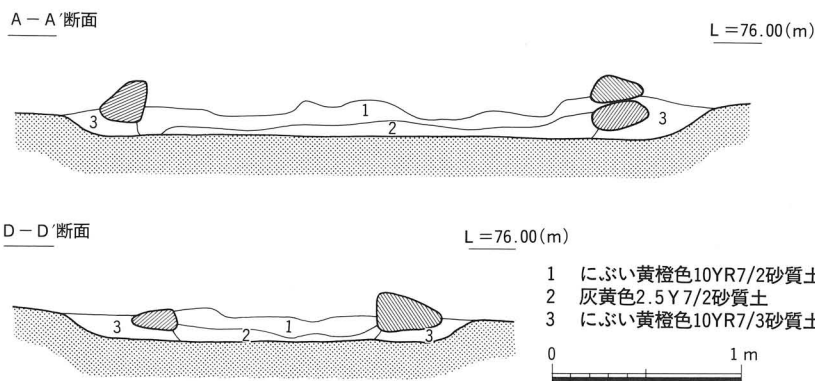
包含層掘削の段階で、壁体の石材が長方形の口字形をなして並んでいる状況が確認された。また、石室内の中央部を中心として壁体を構成する石材と同質同大のの石材が多数転落しており、削平による破壊や遺存状況が予想された。転落した石材の中には天井石となるような大形のもの含まれていなかった。

#### 墓壙の規模・形態

長軸3.40m、短軸2.29mの長楕円形を呈しており、現存する深さ0.19mであった。

#### 石室の構築状況

後述する第12調査区の石室墓群とは異なり、基底石となる1段目の壁体の石材を立てて用いず小口積みにする、竪穴式石室的な構造をもつ石室である。墓壙掘削の後に基底石を据えるが、その際の裏込めとなる土は基盤層や石室内埋土と同質の砂質土である(第68図)。石材の用い方は2段目以上も1段目と同様で、若干の持ち送りがみられる。平面形は基本的に長



第68図 ST1003竪穴式石室内堆積土層図

の底面をそのまま床面として利用している。床面のレベルは標高約75.75mである。

#### 法量・主軸・頭位

復元される石室の内法の長軸2.30m、北側小口部の幅1.00m、中央部の幅1.10m、南側小口部の幅0.89mである。この数値は横穴式石室以外の主体部の中でもっとも大きな規模を有するものである。内法寸法は成人の伸展葬を可能にするばかりか、二体併置の余地さえある。主軸はN-27°-Wであるが、遺体埋葬の痕跡がみられなかったため頭位方向を決めるのは困難である。ただし、北側小口を南側より広くつくっているため北側に向けていた可能性

方形であるが、中央部分がわずかに膨らみ、南側小口より北側小口が広くつくられている。

#### 床面の形成

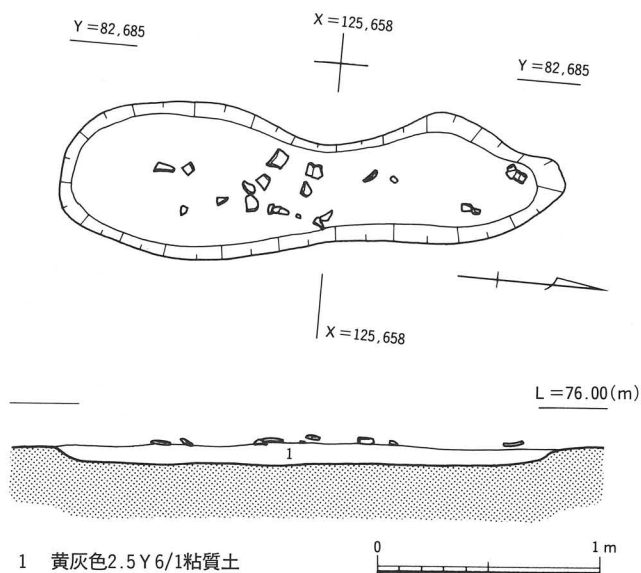
礫床あるいは貼り床などの特別な施設を用いず、墓壙掘削時

がある。

## 遺物

石室墓に伴う遺物は1点もみられなかった。石室や掘り方の埋土中に、弥生土器片とみられる小片が若干出土しているが、出土状況からみて本来の副葬土器ではなく、偶然の混入とみられる。

3号墓は、第12調査区に展開する4～9号墓とは全く違った構造を有する竪穴式石室系の石室墓である。また、構造・石材の用い方においても、横穴式石室と共通する部分があり、その特異性が注目される。築造年代は出土土器がないために断定できないが、周囲で検出された古墳の年代をもとに6世紀末頃に中心をおく数十年とみてよいであろう。また、5号墳・6号墳の墳丘規模が不明であるが、これらの墳丘裾か内部にあったとすれば、主体となる古墳への従属的な性格が浮き彫りとなってこよう。



1号土坑(SK1001) (第69図)

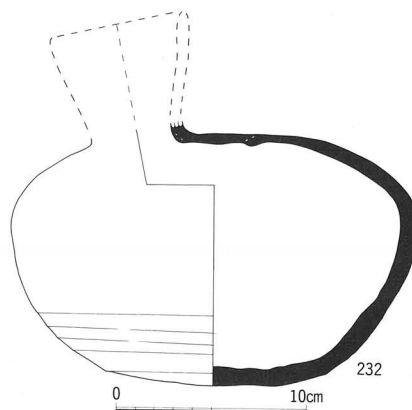
第69図 SK1001平・断面図

第10調査区と第11調査区との境界の南より、AA-18グリッドに位置する。遺構面よりもわずかに盛り上がっている状態で検出されている。

N-4°-Wに主軸をもつ細長い土坑で長軸2.27m、短軸0.44～0.80mを測る。堆積土はやや粒子の細かい粘質土である。検出面からの深さは約10cmである。遺物は坑底より浮いた状態で土坑全体から出土しているが、とくに意図的な破碎の状況などは窺えなかった。

## 出土遺物 (第70図)

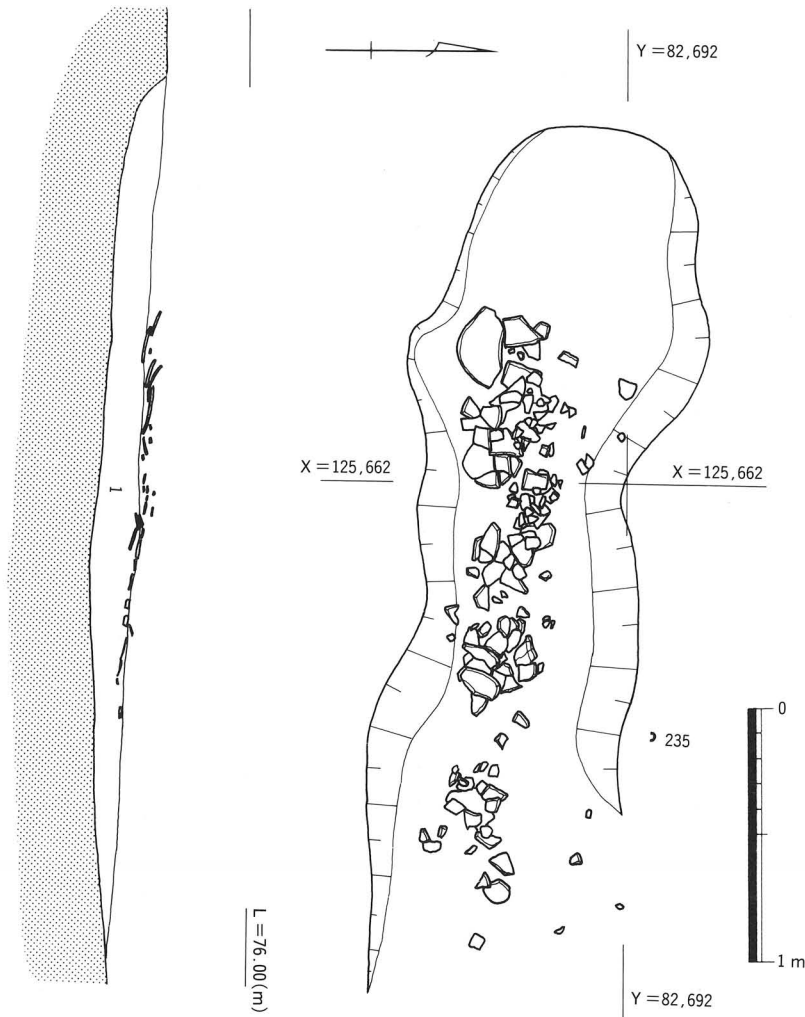
平瓶232は口頸部を除くほぼ全形が接合によって復



第70図 SK1001出土須恵器

元された。体部最大径21.15cmを測る大形の平瓶である。底部はナデによる整形を施している。回転ヘラ削りを施した下半の器表は粗い。口頸部を欠損しているが、TK209型式前後に位置づけられる。

1号土坑の性格は現状からは決めがたい。2号墳・3号墳・5号墳に付帯する可能性が高いが、位置関係からは5号墳の周濠の残欠とみることもできよう。5号墳の外部施設とした



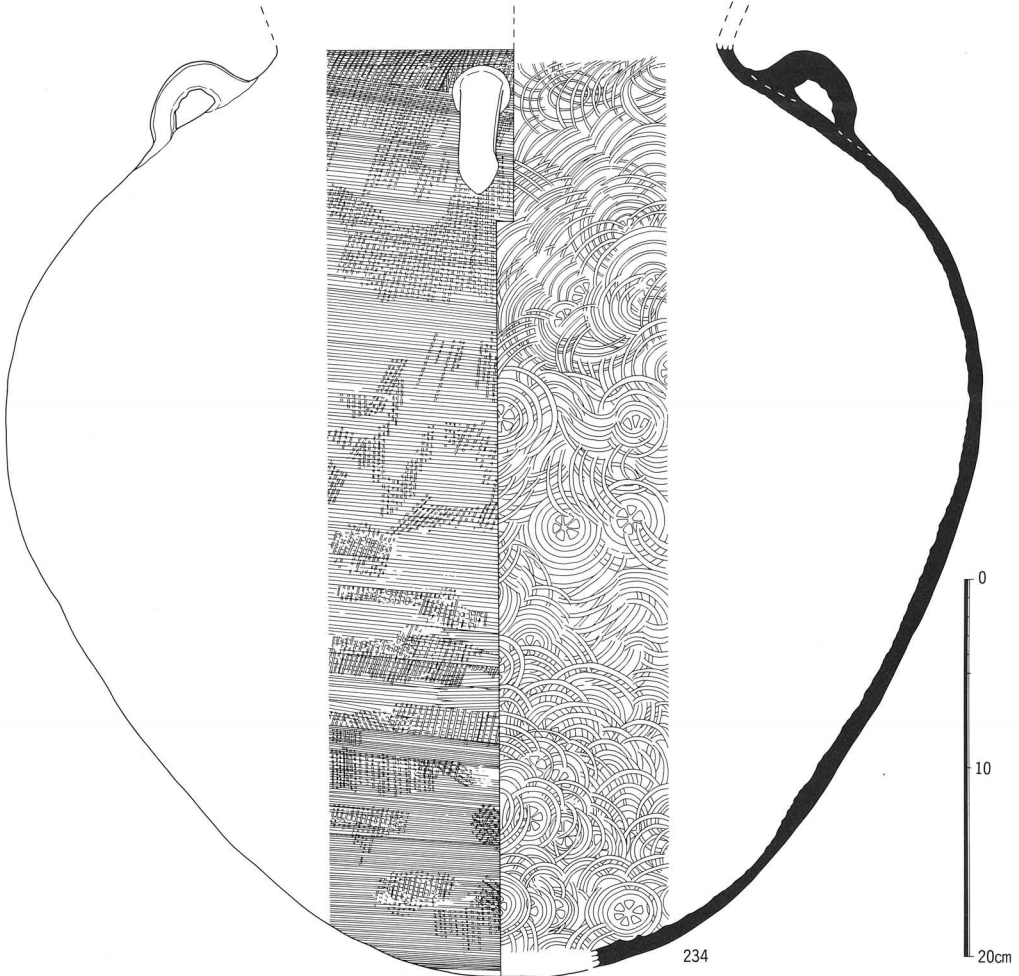
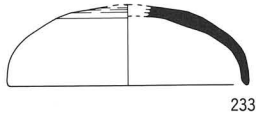
1 にぶい黄橙色10YR6/3砂質土  
第71図 SK1002平・断面図

場合、横穴式石室に副葬土器がなかったため、平瓶232によって与えられる年代は重要である。

2号土坑  
(SK1002)  
(第71図)

第11調査区南寄り、AB-19グリッドに位置する。北側にSM1006・ST1003、南側にSM1005が位置し、これらの遺構の性格を考える上でも重要な位置関係を占めている。

長軸3.51m、短軸0.84~1.19mの溝状を呈し、東側は堆積土が失われており明確な立ち上がりが遺存していない。したがって、深さは5~20cmと一定しない。長軸の方向はN-81°-Wである。埋土はややしまりの弱い砂質土である。遺物のうち土器は土坑の中央部付近に、



第72図 SK1002出土須恵器

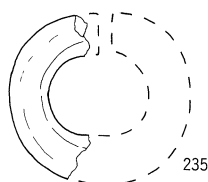
坑底より浮いた状態でまんべんなく出土しており、その大部分は甕234である。甕234の出土状態には規則性はなく、破片となった状態で意図的に撒かれているようである。また、堆積土中ではなかったものの、耳環が土坑の肩より出土しており、SK1002がいずれかの古墳と密接な関係をもつ可能性を示す遺物として注目される。

#### 出土遺物

##### 須恵器（第72図）

233はやや軟質焼成の蓋杯である。丸みを帯びた天井部を有する。甕234は口縁部を欠いて

いるものの、ほぼ完形の状態で復元することができた。口縁部は全周にわたって欠損しているが、打ち欠いた痕跡は認められない。器形は肩部がやや張り、底部がややすぼまるもので、従って最大径は中半より上位にある。肩部には環状の吊り手が付され、全周では4箇所にあったことがその位置関係から分かる。体部外面の平行タタキは縦位で、その原体は3.5～4 cm四方と推測される。内面の同心円当て具は中心部に放射状の刻みがあるいわゆる「車輪文」となっている。車輪の輻に相当する刻みの条数は6条である。体部の一側面にはやや暗いオリブ色の自然釉が付着する。体部上半には、他の個体（法量からみておそらく蓋杯）が接していた痕跡が残る。233についてはTK43型式であるが、甕については車輪文タタキの年代



的位置づけに検討が必要であり、TK43～TK209型式とみておきたい。

耳環（第73図）

銅地銀張りの耳環で、そのほとんどが欠損している。直径5.5～6.8mmの中実の銅管を用いており、その径は22～24mmに復元される。表面の遺存状況は比較的良好である。

## 第10・第11調査区包含層遺物

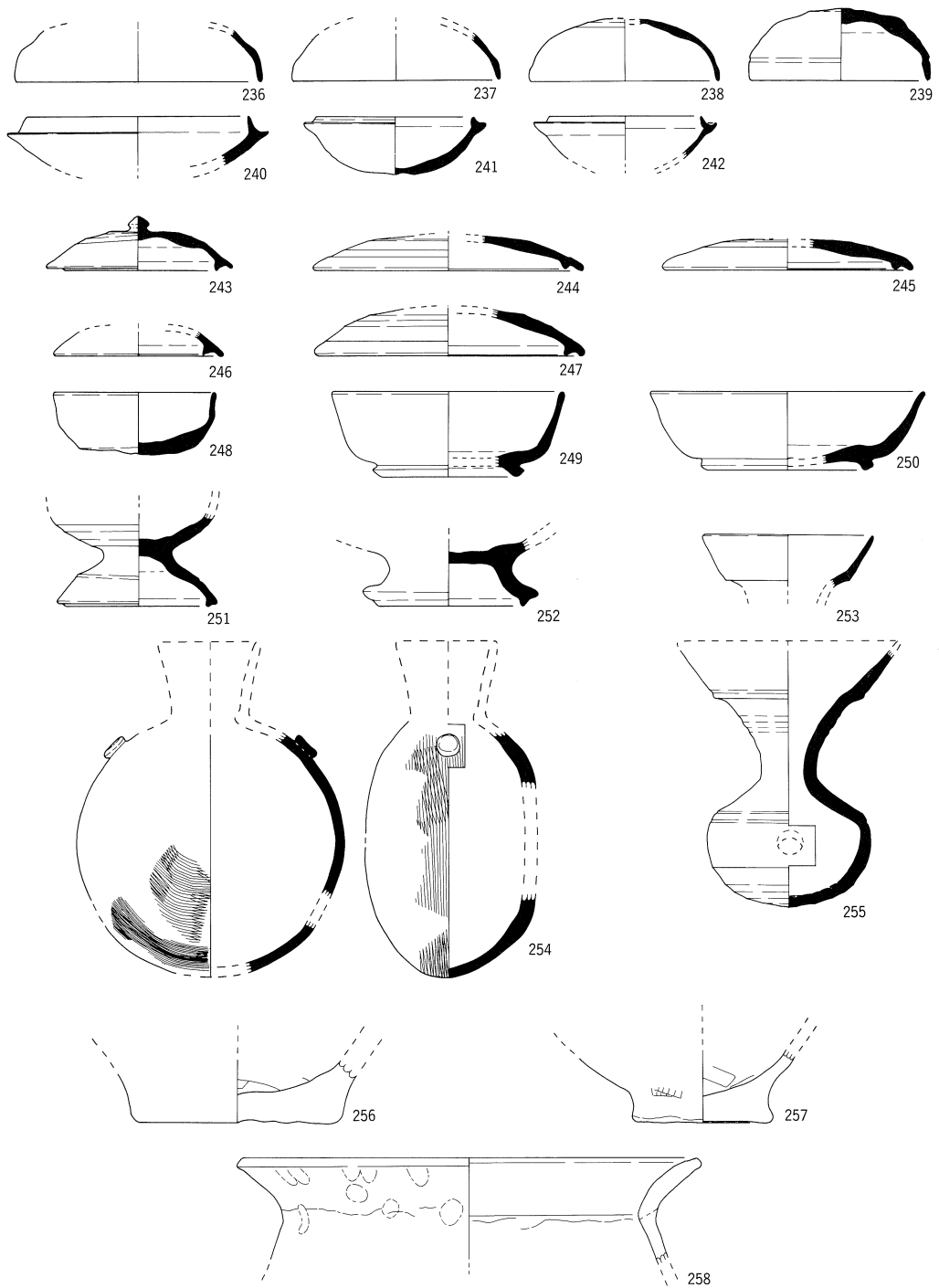
### 土器（第74図）

出土した蓋杯は15点であるが、法量・形態によって3群にグルーピングが可能である。第一は236～242は丸みを帯びた天井部をもつ杯蓋と短い立ち上がりをもつ杯身がセットとなるものである。239・240は口径がやや古くTK43型式に位置づけられる。その他については、TK209型式の範疇に収まるであろう。241の底部外面にはヘラ起こし時の8mm幅の原体の痕跡が明瞭に残る。第二のグループはやや器高が高く、宝珠形のつまみを有する杯蓋(243・246)とそれに伴う杯身(248)である。下方へのかえりの突出は一樣ではないが、TK217型式、飛鳥I式に位置づけられる。第三のグループは先のグループよりも口径が大きく偏平化した杯蓋(244・245・247)に、高台付きの杯身(249・250)が伴う。形態的なばらつきも少なく、TK48型式・飛鳥III式に位置づけられる。胎土は精良であるが、245・247に関しては混入砂粒も多く、器表面も粗い。

251・252は脚部のみの破片である。251は倒杯形の形態で、端部が内面に拡張する。台付碗の一部であろうか。252は胎土・色調に違和感があり、年代的にやや新しい可能性がある。長頸壺または長頸瓶の可能性が高い。底部内面と脚部外面にオリブ灰色の自然釉が付着する。

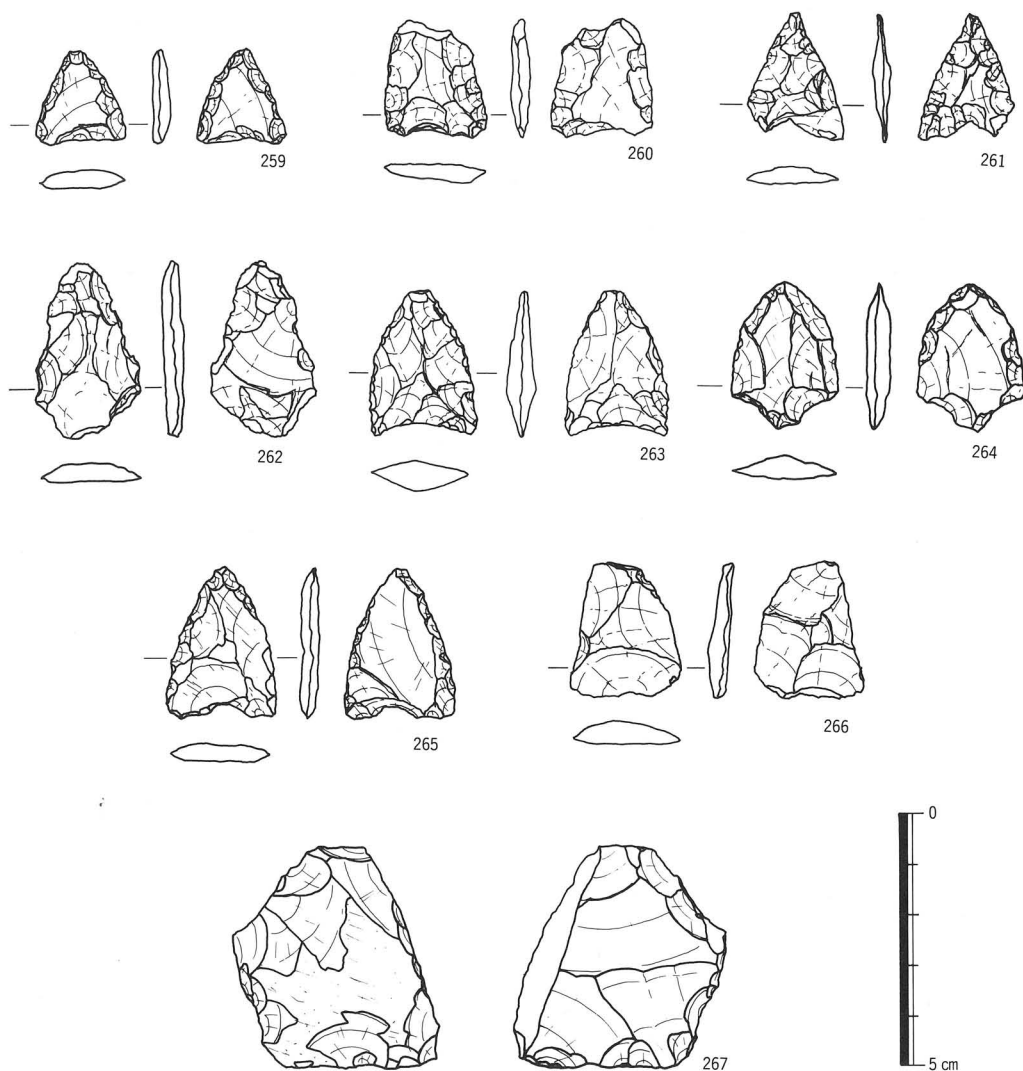
提瓶254は体部片のみである。肩部に吊手をつけているが、ボタン状の円形浮文となっており、完全に退化した形態となっている。





0 10 20cm

第74図 第10・第11調査区出土土器



第75図 第10・第11調査区出土石器

礫のうち、253は口縁部周辺のみ破片で、口縁部と頸部の明瞭な境界が特徴である。254は口縁端部や円孔部分を失っているが、頸部が細くしまるもっとも新しい段階のものである。

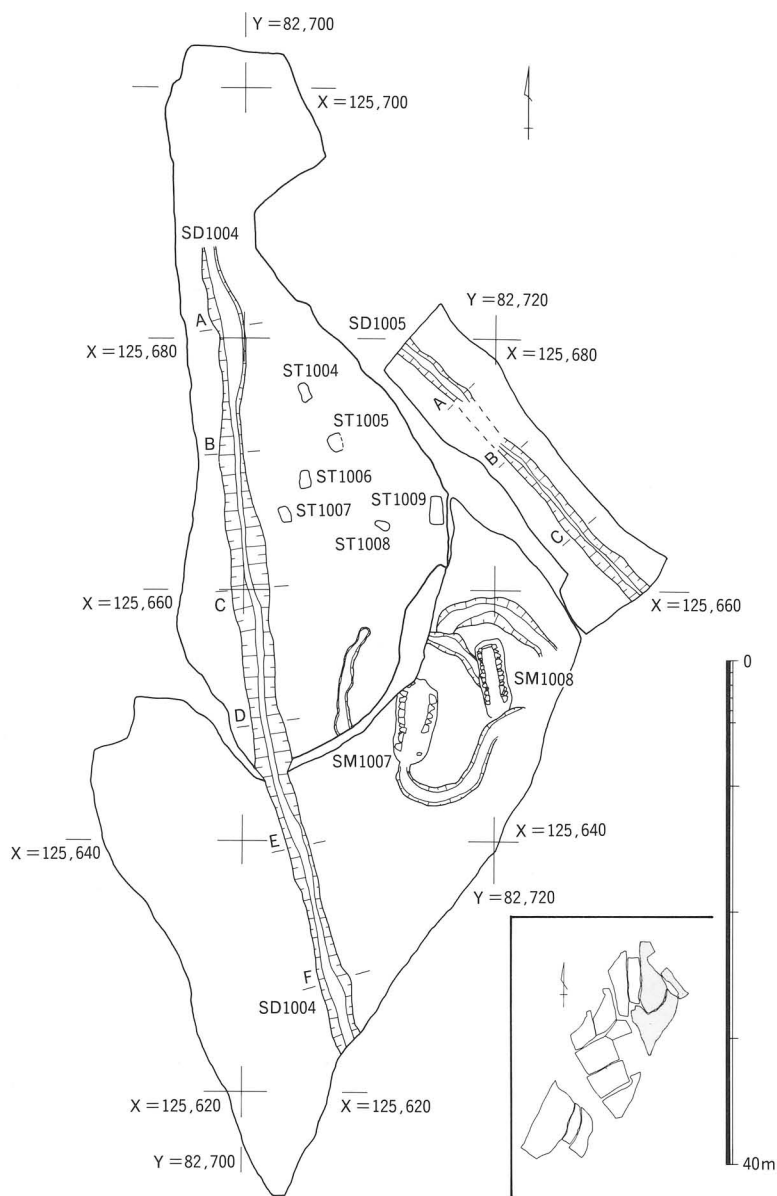
弥生土器の底部が2点出土しているが、いずれも2号墳の周囲で壺形土器の一部分であると考えられる。ともに底部内面にヘラ削りの痕跡をとどめているが、256の原体幅が2.2cm、257のそれは1.6cmである。胎土は粗く、結晶片岩を含む混入砂粒も多い。弥生時代中～後期のものと考えられるが、年代を決める口縁部などの破片は確認されなかった。

土師器甕は口頸部のみの破片であるが、頸部の屈曲からみて長胴となることが想定される。きわめて多量の石英を中心とする大粒の砂粒が混入している。3号墳周濠で出土した土師器甕190と同一個体であろう。明確な年代は不明である。

#### 石器（第75図）

259～266の8点はサヌカイト製の石鏃である。259・260・261・263・265は凹基式、262・264は凸基式である。261を除くと、先端の角度はやや鈍い。一部欠損しているものもみられるが、おおよそ法量的には近似した値を示している。267はサヌカイト製の楔形石器で、表面に自然面を残す。下端及び左側縁部を機能面として用いている。

## D 第12～第14調査区 (第76図)



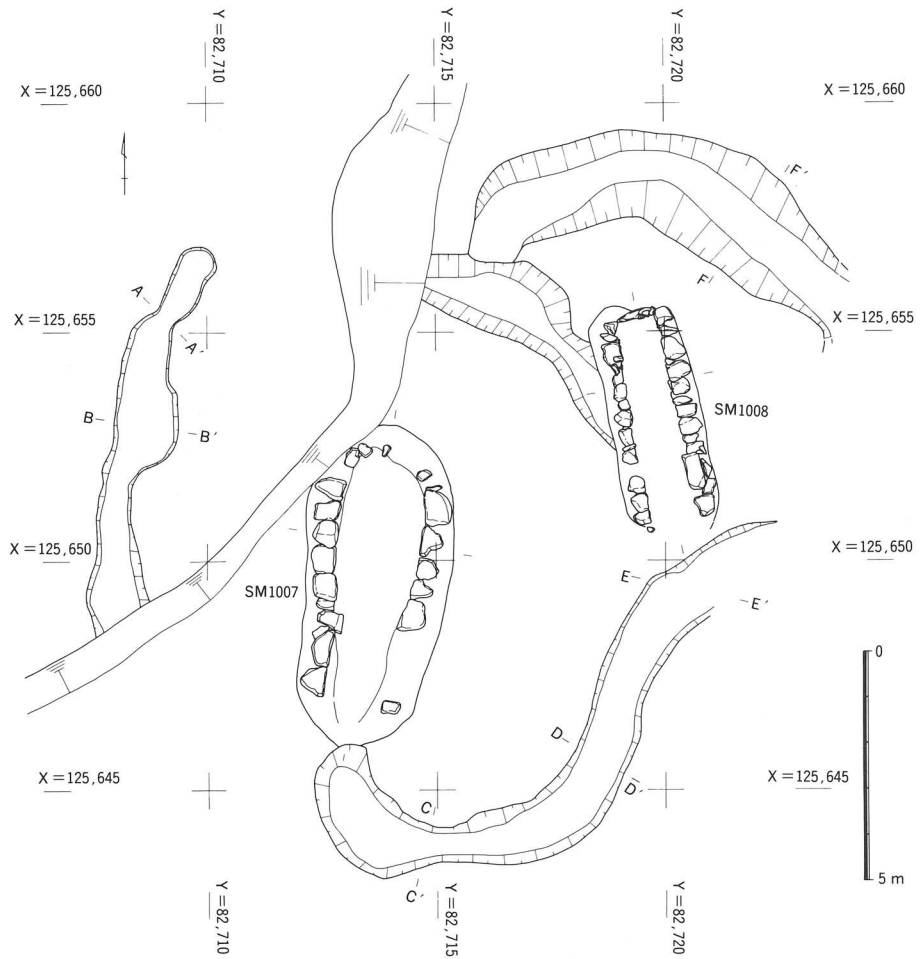
第76図 第12～第14調査区遺構配置図

していたものと考えられる。また、8号墳の横穴式石室の前庭部では、7号墳の周濠が8号墳の周濠としても用いられていることが堆積から分かった。表土を除去した時点で壁体よりも横穴式石室の礎床部分がさきに検出されたことから、石室のかなりの部分が破壊されていることが想定された。横穴式石室はもっとも残りの良い部分でも2段しか残っておらず、また玄門の立柱石が立ったまま途中で欠損していることから、水田の開墾時に徹底した破壊を

ここで報告する範囲は、第12～第14調査区である。これらの調査区において検出された2条の溝(SD1004・SD1005)がその東西の両端において検出された。これらにはさまれた区域において、横穴式石室を主体とする円墳2基(SM1007・SM1008)、小竪穴式石室が6基と墳墓が集中して検出された。こうした分布状況は1号墳～6号墳が築かれた区域とは空間利用の原則が異なっているようである。以下、個別の遺構をみてゆくことにする。

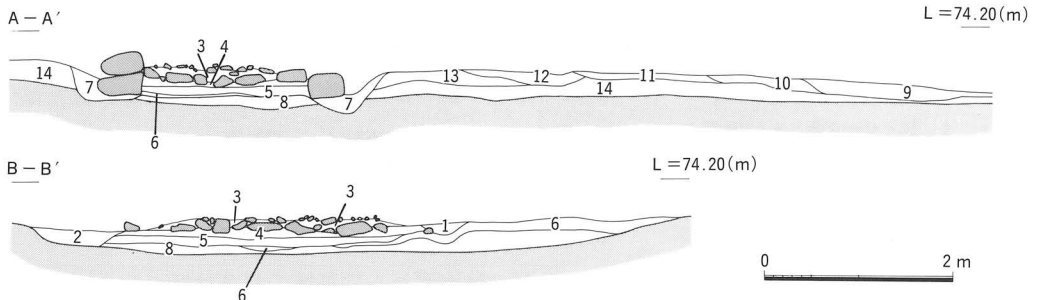
### 7号墳 (SM1007)

位置と現状(第77図) X～AA-22～24グリッドで検出された。玄室は第13調査区に、周濠は第12・13の両調査区にまたがって検出された。周濠の一部を切つて8号墳が築かれているため、外観上は双円墳状を呈



第77図 SM1007・SM1008墳丘平面図

受けていることが窺い知れる。



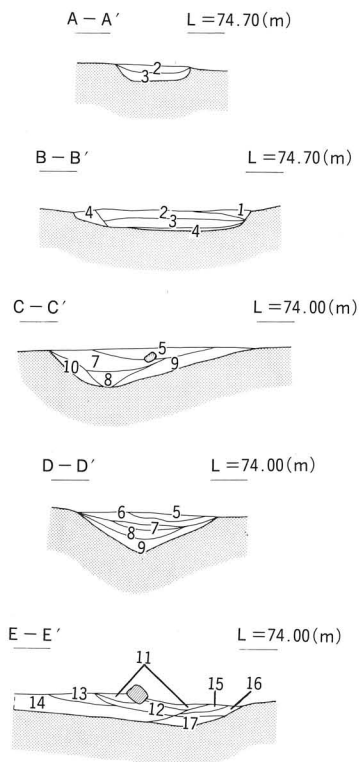
- |                    |                  |                  |
|--------------------|------------------|------------------|
| 1 にぶい黄橙色10YR7/2砂質土 | 6 浅黄色2.5Y7/3砂質土  | 11 淡黄色2.5Y8/3砂質土 |
| 2 淡黄色5Y8/4砂質土      | 7 淡黄色2.5Y8/4砂質土  | 12 灰白色2.5Y8/2砂質土 |
| 3 淡黄色2.5Y8/3砂質土    | 8 明黄褐色2.5Y7/6砂質土 | 13 淡黄色2.5Y8/3砂質土 |
| 4 浅黄色2.5Y7/3砂質土    | 9 灰白色2.5Y7/1粘質土  | 14 浅黄色2.5Y7/3砂質土 |
| 5 浅黄色2.5Y7/3砂質土    | 10 灰白色2.5Y8/2砂質土 |                  |

第78図 SM1007墳丘断ち割り土層図

## 外部施設

### 墳丘

第13調査区側は削平が著しかったが、断ち割り（第74図）によって若干の盛り土堆積を確認しているが、その他の部分では明確には捉えられない。したがって墳丘規模は周濠の内縁径によって推定すると、11.6～12.8mの径を有することになる。盛り土（第74図 第9～第14層）は、横穴式石室を中心に外側へ傾斜する砂質土による堆積で、高さは15cm遺存していた。



- 1 灰オリーブ色 5 Y 6/2砂質土
- 2 灰白色 5 Y 7/2砂質土
- 3 浅黄色 5 Y 7/4砂質土
- 4 淡黄色 5 Y 8/3砂質土
- 5 黄灰色 2.5 Y 6/1粘質土
- 6 黄灰色 2.5 Y 5/1粘質土
- 7 灰黄色 2.5 Y 6/2粘質土
- 8 灰白色 2.5 Y 7/1粘質土
- 9 灰黄色 2.5 Y 7/2粘質土
- 10 浅黄色 2.5 Y 7/3粘質土
- 11 浅黄色 2.5 Y 7/3粘質土
- 12 黄灰色 2.5 Y 4/1粘質土
- 13 黄灰色 2.5 Y 6/1粘質土
- 14 灰白色 2.5 Y 7/1粘質土
- 15 黄灰色 2.5 Y 6/1粘質土
- 16 黄灰色 2.5 Y 5/1粘質土
- 17 灰黄色 2.5 Y 7/2粘質土

第79図 SM1007周濠内堆積土層図

### 周濠（第79図）

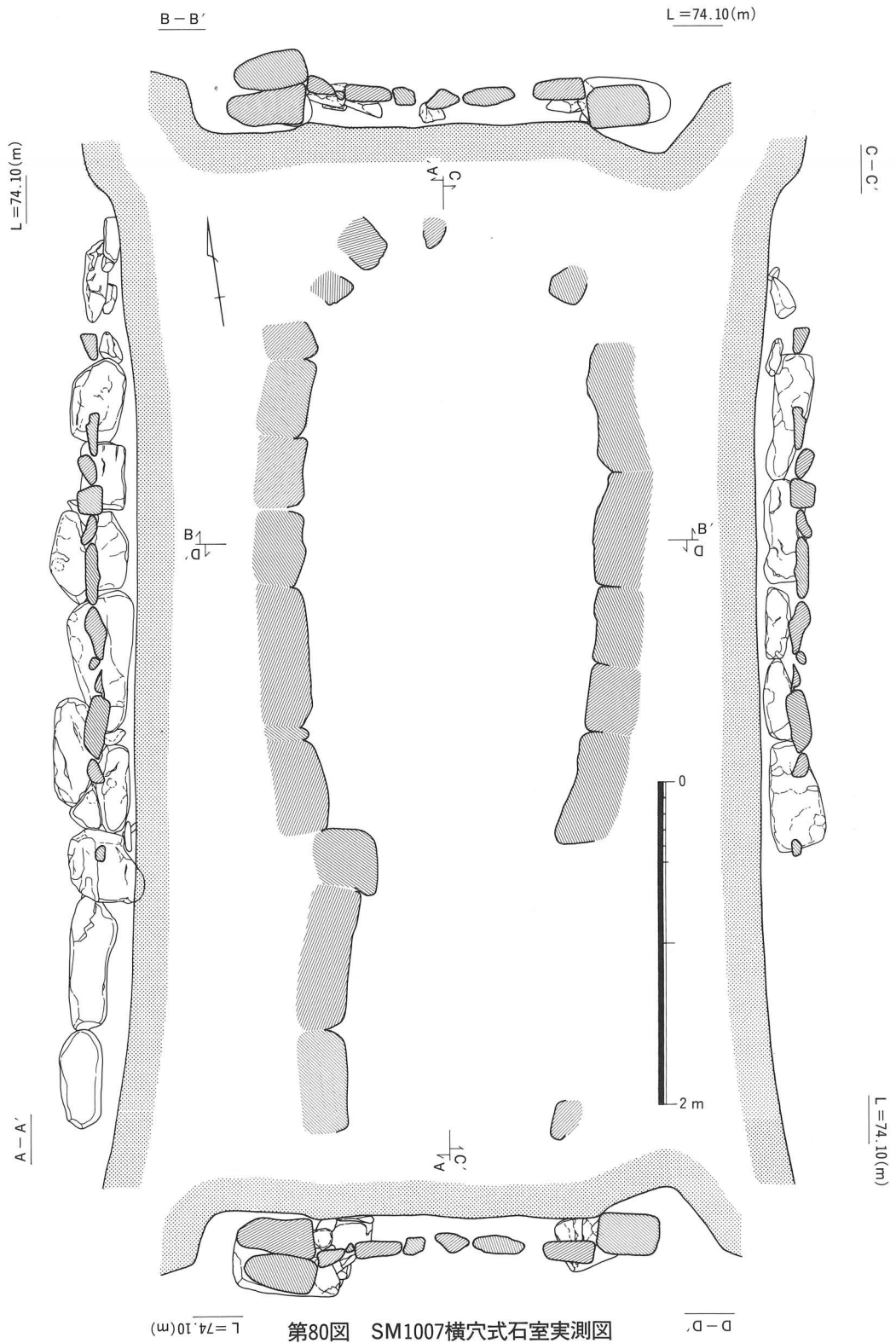
第12・13調査区にまたがっているため、底面のレベルには約1mの高低差があり、削平の規模の大きさが窺い知れる。一部が8号墳の横穴式石室によっても切られており、一部不明な箇所があるが、外縁径13.2～13.8mの規模である。幅は削平の度合いによっても多少増減するが、0.52～1.72mの間で推移し、1.1mが平均的な値である。深さは15～30cmを測る。埋土はくすんだ黄褐色系統が中心で東の第13調査区では粘性が強い傾向がみられるが、8号墳の墳丘によって早い段階で埋められているためか粘性は乏しい（第75図）。

遺物は横穴式石室の、前庭部からの一連の土器がみられたほか、数点ずつのまとまりが散発的にみられた。また、大刀などの鉄製品の破片も出土した。

## 内部施設

### 墓壇の規模・形態

基本的には長楕円形であるが、玄室の部分よりも羨道部分ではやや狭い形態を有する。全長7.11m、玄室部分の最大幅3.26m、羨道部分の幅2.86mの規模をもつ。第12調査区との段差が1m近くあることからみると、墓壇自体の深さも段差よりではかなり深いものであったとみられるが、検出面からの墓壇の深さは35～40cmである。墳丘をある高さまで盛った状態で墓壇が掘込まれている状況が断ち割り土層図によって観察できる（第78図）。墓壇内は横穴式石室構築時の整地土が平行堆積しており、黄褐色系統の砂質土が用いられている。



第80图 SM1007横穴式石室実测图

## 横穴式石室（第80図）

横穴式石室は破壊が進行しているため不明部分が多く、両袖式と考えられる。右袖部の玄門立石は失われているが、抜き取り攪乱の穴が該当の箇所にもみられたため、玄門構造復元の根拠とした。奥壁部などでは基底石となる石材は検出されなかったものの、支えの小形石材の存在と墓壇の形状によって玄室奥壁部の形態を復元することができる。羨道部も同様である。また、閉塞施設は残っていなかった。

玄室は中央部が丸く膨らむ細長い胴張りの形態を呈する。奥壁部は4石により構成されていたことが推定できる。胴部がもっとも張るのはやや奥壁寄りである。各部位の計測値は玄室長3.50m（復元値）、玄室最大幅1.80m、玄門部での幅1.08m（復元値）、羨道部の幅1.27m（復元値）となる。現存している石材は側壁の各基底部および壁体の一部玄門立石である。側壁の基底石は一辺40～70cmのかなり大形の石材を用い、その安定のために脇に小形の石材で支えている箇所が随所にもみられる。玄門立石は石材を基底石と比較して10～15cm深いレベルに立てて用いているため、支えは特に丁寧に行われている。左側玄門部・羨道部の側壁部は裏込め石材が用いられている。また、壁体間のしまりのよい砂質土中には炭化物が混入していた。石室構築段階の痕跡とみることができる。

7号墳の横穴式石室は柿谷遺跡を構成する古墳の中でももっとも幅の広いものである。玄室最大幅1.80mは石室主軸と直行する遺体埋置が可能である。しかし、埋葬を直接的に示す人骨などの資料は出土しなかったため、この床面における被葬者の数・それらの位置については不明である。

## 床面の構築状況

### 第一次床面（第81図）

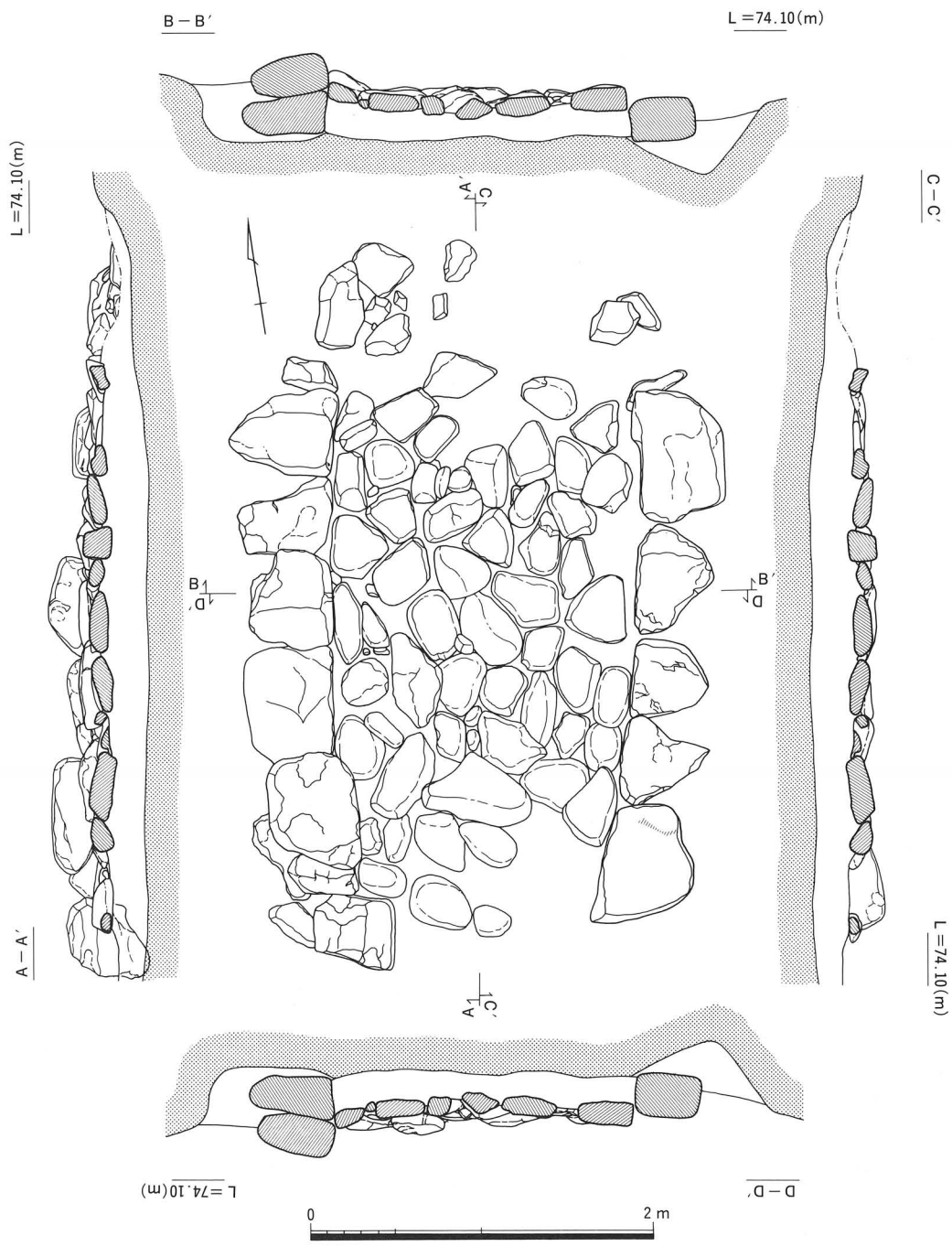
墓壇掘削後、墓壇を掘削した土によって整地を行いながら礫床の敷設を行う。礫床に用いられている石材は砂岩の自然礫で、一辺30～50cmの礫床に用いるものとしてはやや大形であり、あまり平坦とはいえない。中でも、中央部付近に比較的大きなものが集中し、側壁に近い箇所では側壁に沿うような形で石材を用いている点は、玄室の平面形との関連によるものであろう。

床面上には遺物はなかったが、礫の隙間から須恵器片が、礫の下部より鉄片が出土した。須恵器は前庭部で出土した有蓋高杯蓋（278）と接合するものが含まれ、第二次床面による追葬の時点で石室外に持ち出されたものの残欠とみてよい。

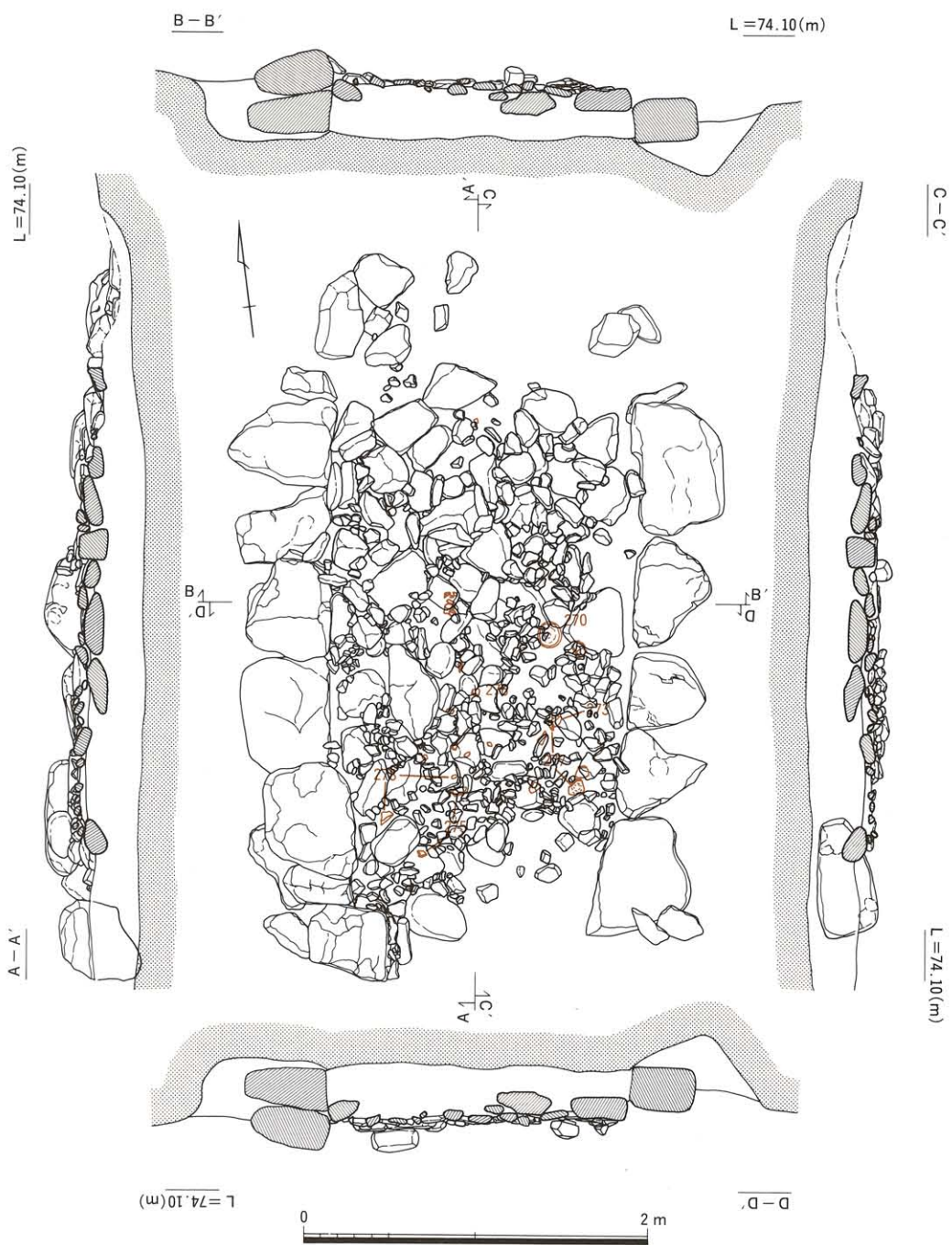
### 第二次床面（第82図）

第一次床面の礫床に砂岩の人頭大の礫を追加し、礫の隙間に径3～10mmの砂岩の円礫を充填して面を整えて形成している。そのため部分的には第一次床面と石材を共有する箇所も見





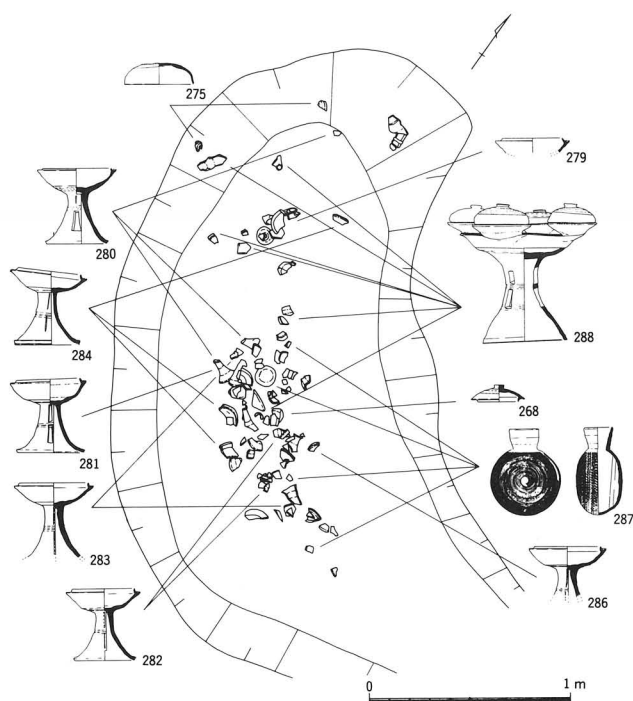
第81図 SM1007第二次床面平面図・断面見通し図



第82図 SM1007第二次床面平面図・断面見通し図

られる。床面の標高は71.85～90mである。玄室内北西角付近に小礫がやや粗な箇所があるが、削平によるものであり、棺台のための礫床敷設の粗密は特にみられない。

須恵器片が中心でわずかに鉄器片が含まれていた。須恵器はいずれも有蓋高杯に伴う蓋であり、高杯は前庭部に持ち出されていた。主に玄室中央部から玄門にかけて集中していたが、細片となっているものも多く、本来の副葬状態ではないであろう。前庭部で出土した土器と接合するものや第一次床面の土器と同一個



第83図 SM1007横穴式石室前庭部遺物出土状況

体のものがあり、どの時点での副葬かを見きわめることは困難である。

### 石室前庭部の遺物出土状況

前庭部から周濠にかけては7号墳に副葬された土器片が多数出土した(第83図)。土器はいずれも須恵器で、高杯及びその蓋・提瓶・子持器台が含まれていた。出土位置は前庭部と周濠との接点であり、破片はいずれも細かい破片となっていた。中には玄室内の土器と接合するものもあり、追葬時に持ち出し投棄したと考えられる。

### 遺物

#### 須恵器 (第84・85図)

蓋(268)は小さい目の口径に断面方形のつまみと下方へのかえりを伴う。上面の回転ヘラケズリが施された器表はざらついている。この蓋が載るような土器は出土していないが、(台付)長頸壺に伴う可能性がもっとも高い。形態的には3号墳出土の118と類似している。

高杯の蓋(269～278)はいずれも明るい青灰色を呈しており、有蓋高杯と共通の色調である。したがって、杯身が出土しておらず高杯に伴うものとみておきたい。丸い天井部をもつのが特色で、その中で肩部に稜を有するもの(271)、肩部に稜を有しつまみを伴うもの(269)、やや偏平な器形となるもの(277・278)などに分類することができる。口縁端部内面の沈線

は退化しているために、ごくわずかな痕跡として残る。口径・器高には若干のばらつきがある。肩部に稜や天井部のつまみは、269・271はやや古い形態の特徴をもつ。軟質焼成の273・274は、高杯279・280とセットになることが想定される。

有蓋高杯（279～286）は長脚2段透かしを二方向に有し、浅い皿形の杯体部に短い立ち上がりをもつものである。透かしは上下並列で、上下とも長方形のもの（281・285）、上がスリット状で下が長方形のもの（280）、上下ともスリット状のもの（282・283・284・286）がある。このグルーピングは焼成・杯部の立ち上がり・脚柱の形態・脚端部の形状の差異とは一致していない。

提瓶（287）の体部は偏球形で吊手はもたない。胎土・焼成は須恵器として通常のものであるが、完全に明赤褐色となる色調は土師器のそれと酷似している。回転ヘラ削りを施した面に「|」のヘラ記号がある。大粒の砂粒の混入が目立ち、色調も考え併せると特殊性が際だっている。

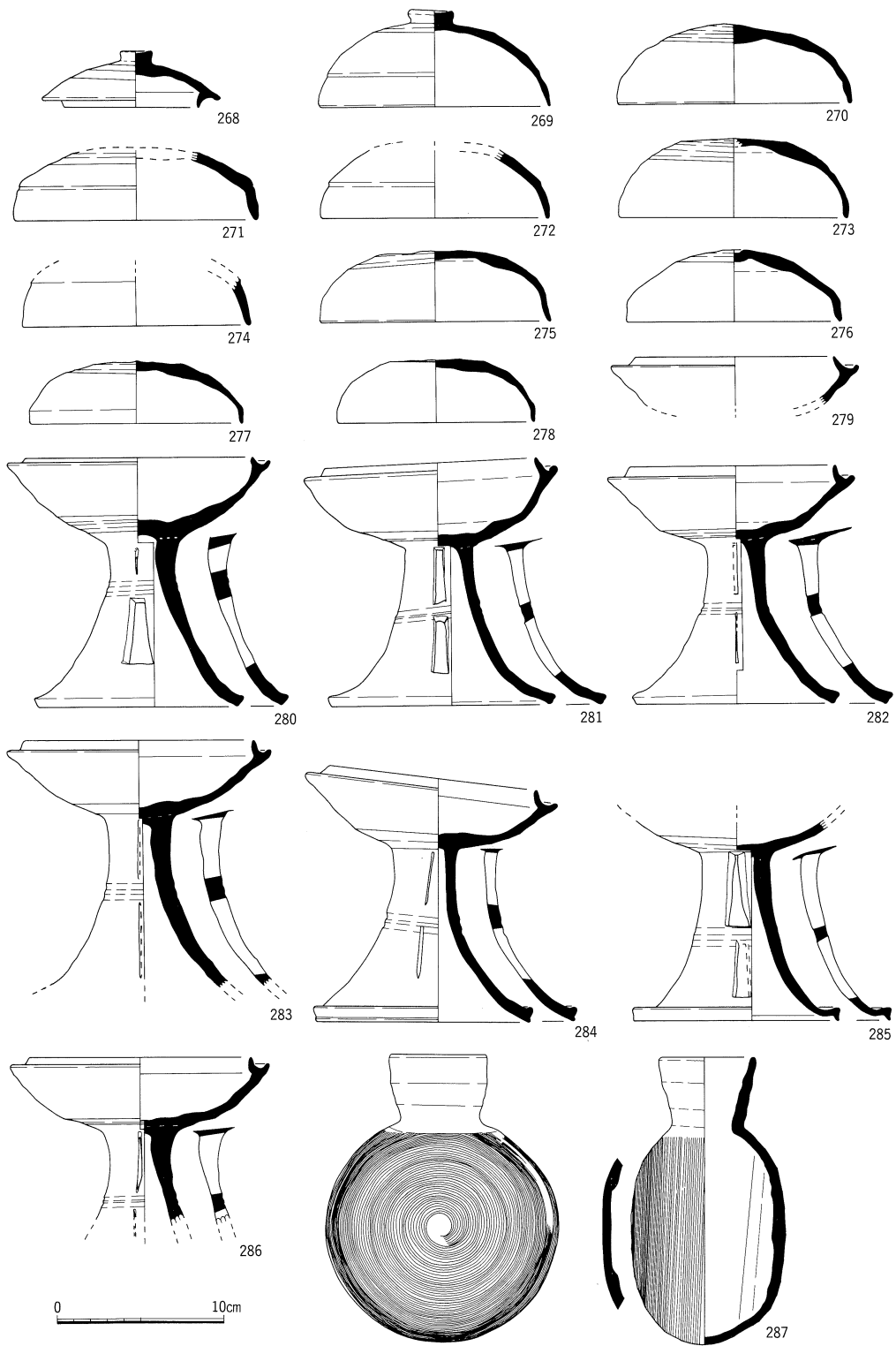
子持器台（288）は杯口縁部に小形の杯である子器4個のを配する子持器台である。杯部中心には別個体を載せて焼成した痕跡がみられ、子器以外の土器でこれに伴う土器があった可能性がある。やや紫がかったくすんだ色調・胎土は、他の須恵器と比較してきわめて異質なものである。脚部は中央部が細く裾への広がり直線的となる特徴をもつ。杯部は浅く、口縁端部に強い沈線が巡る。子器の接合に際して粘土の補充と共に強いナデが施され、端部は波打っている。子器はいずれも薄く仕上げられており、短い立ち上がりは上方へ強く反る。子器の杯に伴う蓋のうち3点は上面がくぼむつまみを有する。山田邦和氏の分類のⅠ-2類に相当し、装飾付須恵器としては比較的多い形態である<sup>(6)</sup>。

これらの副葬土器は、長脚2段透かしの有蓋高杯が主となり、出土していない長頸壺・提瓶・子持器台が加わるというセットとなり、セット内での有蓋高杯の比重がきわめて高い。これらの高杯の形態的な特徴からみると、柿谷遺跡内で検出された遺構のものとしてはもっとも古く、TK43型式にあたる。年代は6世紀後葉が与えられる。

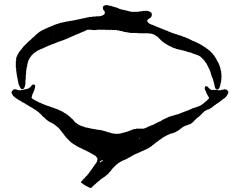
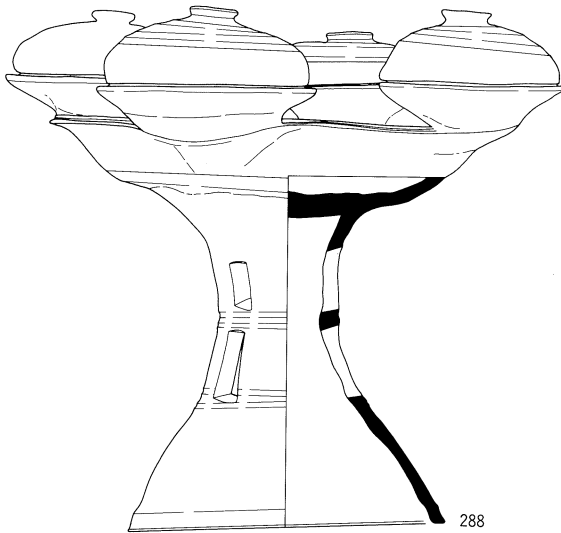
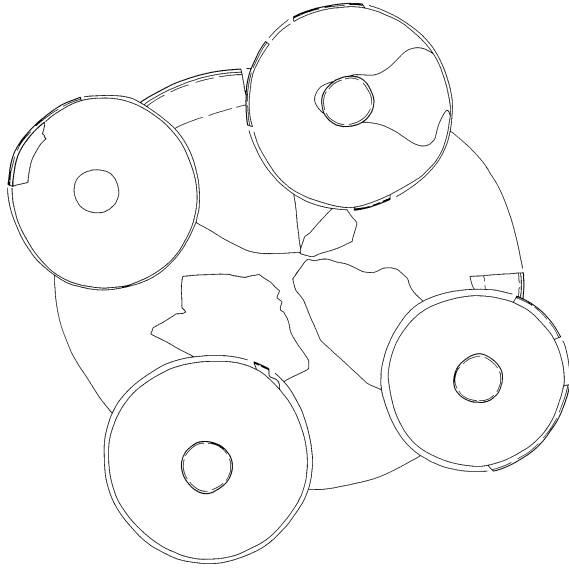
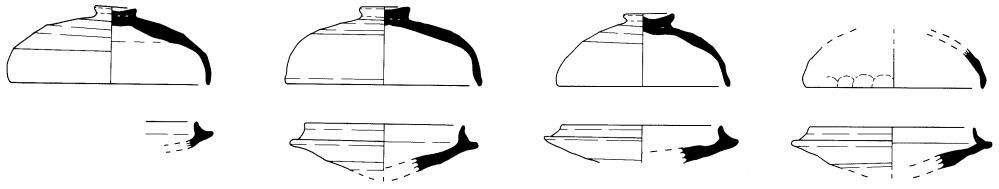
#### 鉄製品（第86図）

環頭大刀289は環頭部分のみが遺存していた。幅4.05cm、高さ2.45cmの環状を呈し、振りを加えている。290は不明鉄製品で、2本の金具が環を介して結合している。環を有する金具は断面方形であるが、結合している金具は断面円形である。轡に伴う引手の可能性がある。

7号墳は唯一明確に羨道より内側へ突出する玄門構造をもつ横穴式石室である。遺存状況はきわめて悪いものであったが、その平面プランが胴張りで、奥壁部分が4石で構成されているということが明らかとなり、さまざまな問題がある。7号墳の前庭部などから多数出土



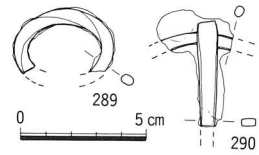
第84图 SM1007出土须惠器



288

第85图 SM1007出土須恵器子持器台

した須恵器は、長脚2段透かしをもつ有蓋高杯が組み合わせの中心となり、柿谷遺跡の各古墳の中でももっとも古い6世紀後葉の年代が与えられる。第一次床面の隙間にも土器がみられたことから、築造年代と一致している。第二次床面に関しても隙床上の土器が本来



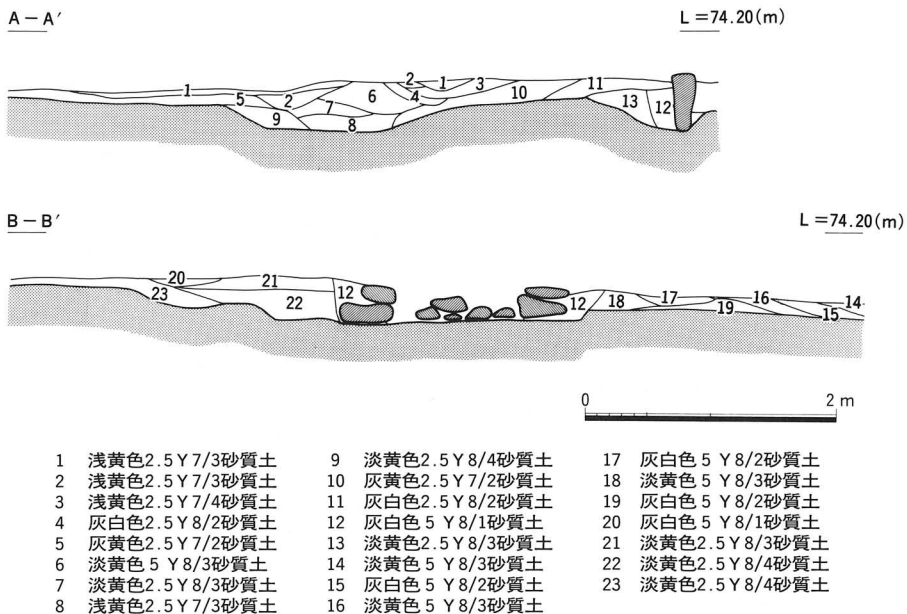
第86図 SM1007周濠出土鉄製品

伴うものかは判断はできないが、6世紀後葉からはさほど経ていない段階のものと推察される。その年代と他の横穴式石室の形態を比較すると、玄室の狭長化・胴張りの退化という傾向が進行していることが分かり、それらの祖形が7号墳であったということになる。ただし、7号墳と4号墳の横穴式石室の形態を検討するとき、型式的な流れに若干の飛躍が認められ、中間的な横穴式石室の存在もしくは大きな画期を想定しておく必要がある。

## 8号墳 (SM1008)

### 位置と現状 (第76図)

第13調査区やや東より、Y~AA-24・25グリッドに位置する。7号墳の項でも触れた通り、7号墳の周濠を切り込んで8号墳の横穴式石室が築かれている。また、周濠は7号墳の墳丘に接する西側を除く周囲に新たに掘削している。ただし、開墾・削平の際に出た横穴式石室の石材を集めている部分があり、南東側では周濠は途切れている。横穴式石室は隣接する7号墳同様削平が著しく、高さにして30cm、側壁1~2段分が遺存するのみであった。埋土はしまりの非常によい砂質土で、人頭大の砂岩礫が多数含まれている。石材の大きさが壁体の



第87図 SM1008墳丘たち割り土層図

ものと類似しており、削平を受けた際の転落によるものと考えられる。床面に近い埋土中には炭化物が若干混入していたが、埋葬に伴うものかどうかは不明である。7号墳の壁体間でも同様の現象がみられたことから、構築の過程である可能性は残されている。

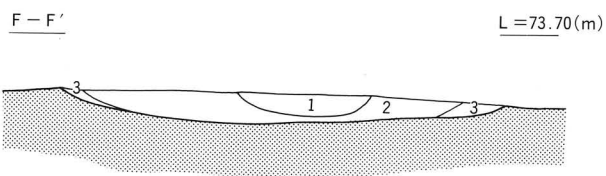
## 外部施設

### 墳丘

墳丘はそのほとんどが失われているため、周濠の内縁径によると8.0~8.4mということになる。盛り土自体は削平に加えて攪乱を受けているため、パターンはつかみにくいが淡黄色の砂質土と灰白色の砂質土が互層に観察できる箇所がある。また、これらの盛り土は横穴式石室を中心に外側に傾斜しており（第87図）、3号墳・4号墳と同様に壁体の構築に併せた盛り土が行われていたものと推定される。

### 周濠（第88図）

墳丘が独立せず7号墳に寄せていることと南側は攪乱によって途切れているため、全周巡ったと仮定した場合には外縁径は約12.0mに復元できる。幅・深さは一様ではなく、幅



- 1 淡黄色 5 Y 8/3 砂質土
- 2 淡黄色 5 Y 8/4 砂質土
- 3 浅黄色 2.5 Y 7/4 砂質土

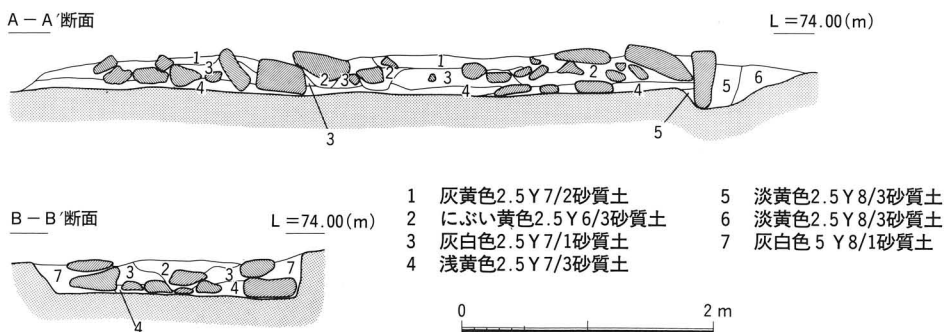
1.80~2.36m、深さ0.2mを測る。埋土は淡黄色の砂質土で占められ、砂岩の風化礫を比較的多く含む（第88図）。

周濠内からはサヌカイト製のナイフ形石器1点が出土した。他は、土器は出土しなかった。

第88図 SM1008周濠内堆積土層図（断面ポイントは第77図に記入）

## 内部施設

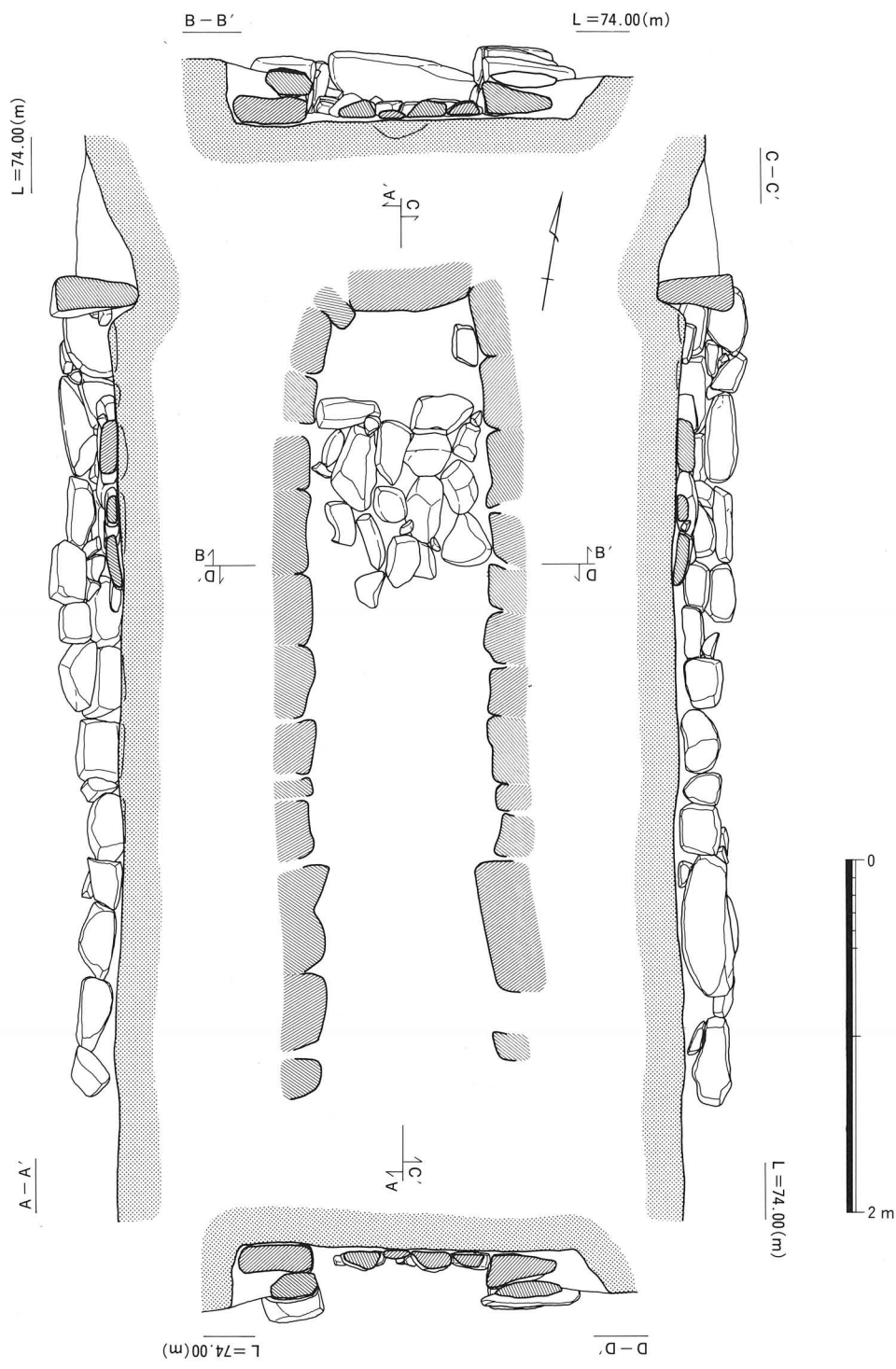
### 墓壇の規模・形態



- 1 灰黄色 2.5 Y 7/2 砂質土
- 2 にぶい黄色 2.5 Y 6/3 砂質土
- 3 灰白色 2.5 Y 7/1 砂質土
- 4 浅黄色 2.5 Y 7/3 砂質土
- 5 淡黄色 2.5 Y 8/3 砂質土
- 6 淡黄色 2.5 Y 8/3 砂質土
- 7 灰白色 5 Y 8/1 砂質土

第89図 SM1008横穴式石室内土層図





第90図 SM1008横穴式石室実測図

墳丘の横断面（第87図A-A'断面）においては、墓壙は遺構面に墳丘の盛り土を最低2度以上行った段階で掘削していることが分かる。ただし縦断面の奥壁部分（第87図B-B'断面）では、墓壙を埋め終わった段階で最初の盛り土を行っている。長さは前庭部分と7号墳周濠との関係が不明瞭なため5.35m以上、幅は2.15mの規模となる。

#### 石室の構築状況（第90図）

横穴式石室はN-10°-Wに主軸をもち、玄門施設を明確に設けない無袖式のもので、上部構造が失われているため玄室と羨道の境界は不明である。側壁に横長の石材を用いる部分で、内側へのせり出しが認められるが、玄室と羨道との長さの比や石材の用い方からみて、玄門とは認められない。用いている石材は砂岩の自然礫で一辺20~30cmの形の揃ったものである。ただし、奥壁部と右側壁部にやや大形のものを用いているのが注目される。奥壁は板石を立てて用いているが、脇の部分に支えのための石材をおいており、見かけ上は1石による構成となっているが平面プランは2石ともみることが出来る。平面プランは基本的には長方形であるが、奥壁部分は両側壁が狭まっている。胴張りの退化した形態の可能性もある。また、開口方向に向かってわずかに開き気味である。側壁が2段残っているところでは、持ち送りの傾向がある。各部位の計測値は全長4.44m、中央部での最大幅1.04m、奥壁部分での幅0.80m、開口部の幅1.03mで、残存する高さをもっとも残りのよいところで0.43mである。

床面は礫床や貼り床などの特別な施設は設けていない。横穴式石室内奥壁近くには、上面を平らに整えた集石がみられた。範囲は約1m四方である。用途は不明であるが、棺台の可能性も捨てきれない。横穴式石室内に転落した石材は多数みられたが、閉塞施設はみられなかった。

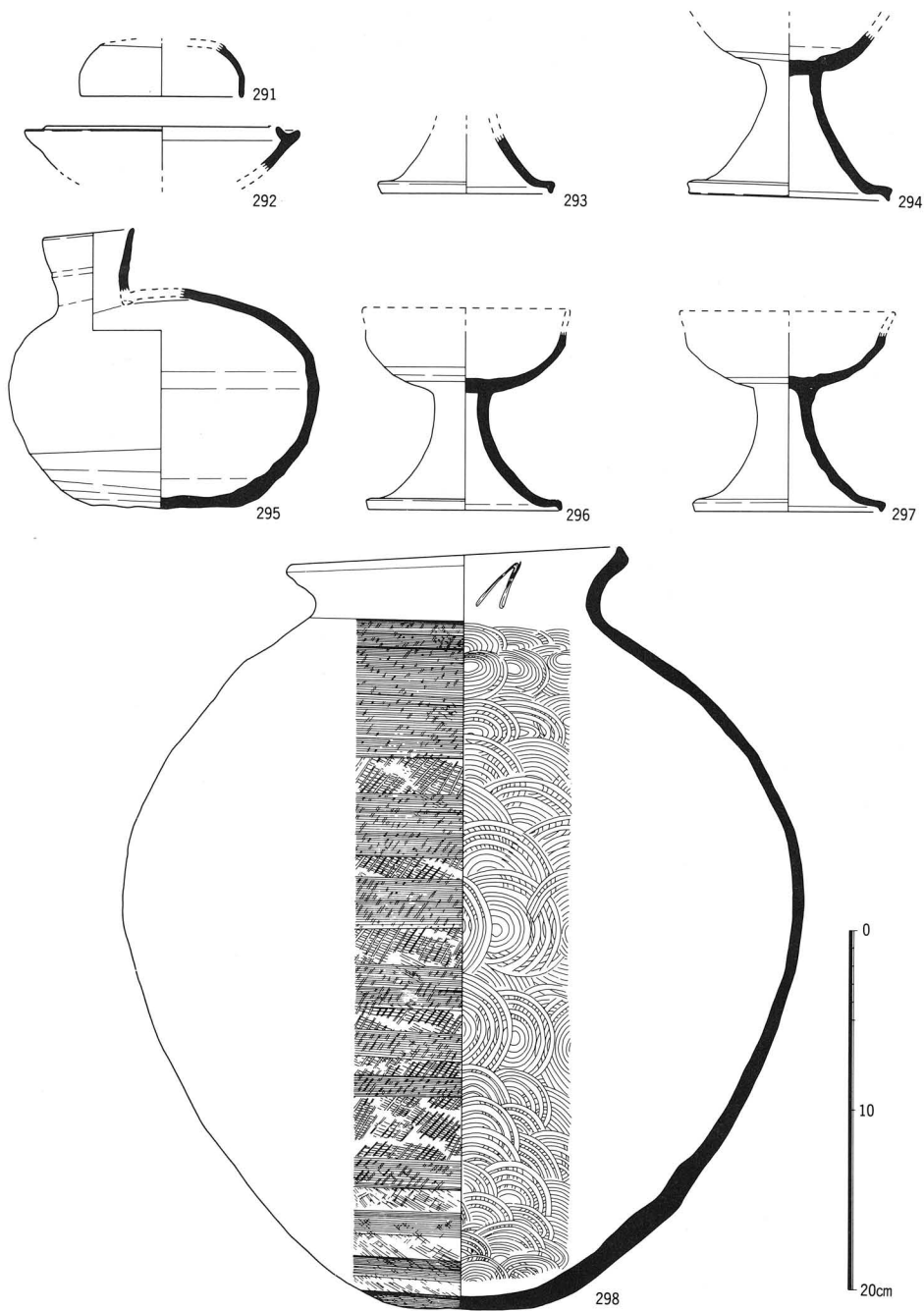
#### 遺物の出土状況

横穴式石室内では、床面に伴う遺物は1点も検出されなかった。

前庭部では、平瓶や甕はいずれも一辺10cm未満の細かい破片の状態検出された（図版47）。その範囲は約1m四方であり、きわめて集中した状況であるといえる。なかでも、甕は多くの破片となっていたが、特に明確な打ち欠きの痕跡などをとどめていないが、その出土状況からみて、墓前祭祀に使用した後に、砕かれた可能性が高い。

#### 出土遺物（第91図）

杯蓋291は唯一横穴式石室内の埋土より出土した。口径が小さく器高が高く復元されたが、やや歪の大きい点の問題である。杯身292はわずかな破片であるが、7号墳出土の有蓋高杯と色調が類似している。高杯4点（293・294・296・297）はいずれも小片となっており、完形品は含まれていない。長脚としてはやや短い脚部で、端部が水平近く大きく開く。293を除く



第91図 SM1008出土須恵器

3点は淡い青灰色を呈しており、同工によるものである。平瓶295はほぼ全体の形状が分かり、体部の大きさと比較して口頸部がやや小さくアンバランスである。体部上面は丸く、下面が平坦に仕上げられており安定感はいい。体部上面全体に灰がかぶっており、さらに口縁端部・体部上面・下面には溶着物が点々と付着している。甕298は復元によってごく一部の欠損を除

き完形となったものである。器形は最大径が体部のほぼ中位にある倒卵形で、底部はやや平坦な形状をもつ。口縁部は外反し端部付近で上方へつまみ上げられている。体部外面の平行タキはやや右に傾く縦位で、丁寧な回転カキメ調整のため単位は不明である。内面の同心円文当て具の痕跡は体部最大径付近で3列に揃っており、製作工程の単位を示している。口縁部内面には「逆V」字形の線刻がある。

これらの須恵器のうち、7号墳の副葬土器の可能性のある292を除くと、高杯・平瓶はおおむねTK209型式に位置づけられる。また単独では年代を決めたい杯蓋・甕についてもTK209型式に近い時期が想定され、土器からみた場合は一度の埋葬で追葬は行われていないとみることができるが、断定はできない。このことは、8号墳が7号墳の墳丘・周濠を切って築造されているという事実は矛盾するものではない。

8号墳は7号墳の墳丘と周濠を切って、横穴式石室と墳丘を築く横穴式石室を主体とする古墳である。したがって外観上は双円墳となっていたことが推定される。出土した土器からも6世紀末～7世紀初頭の年代が与えられ、先後関係には問題はない。一つの墳丘内に複数の横穴式石室を築くことは、県内では三島1号墳にみられるが通有のことではなく、愛媛県では北条市新城古墳群・伊予郡砥部町大下田古墳群などで数例がみられる。

横穴式石室は無袖式のもので、玄門構造はみられない。同時期とみられる4号墳と比較すると、墳丘規模・横穴式石室の構造の点で見劣りがする。しかし、小石室墓ではなく墳丘をもつ横穴式石室として築造していることから、7号墳との強い関連が考えられる。

#### 4号石室墓 (ST1004) (第92図)

##### 位置と現状

第12調査区中央部、AD・AE-21・22グリッドに位置する。石室墓群の北端を占める。包含層の掘削時に礫床が検出され、壁体および上部構造は削平によって完全に失われていた。

##### 墓壇の規模・形態

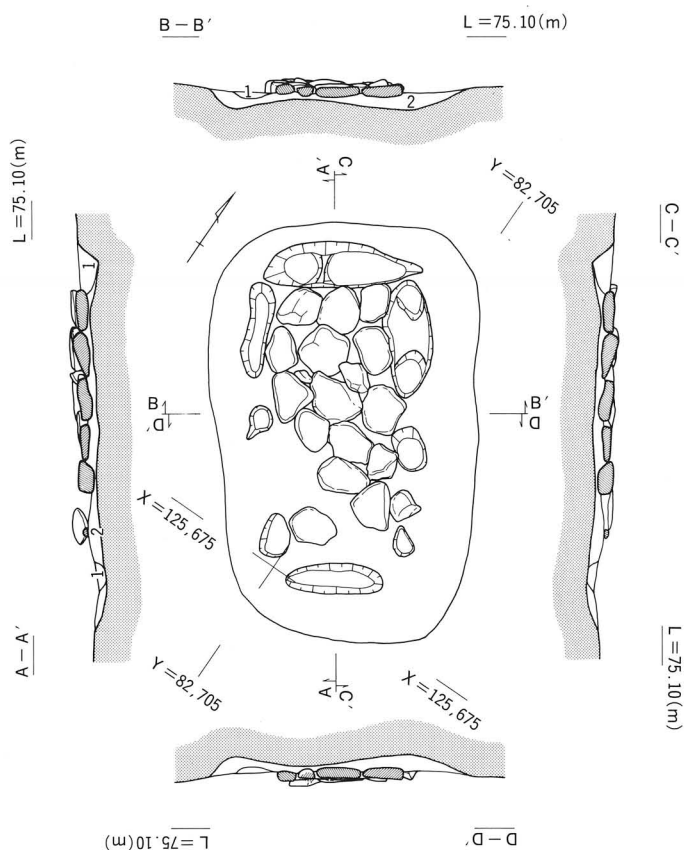
墓壇は隅丸の長形状を呈しており、長軸1.68m、短軸1.07mを測る。検出面からの深さは0.05mと浅いが、礫床の遺存状況からみて本来の深さをとどめている。埋土は基盤層に似た性質の砂質土で、墓壇掘削時のものを用いているのであろう。

##### 石室の構築状況

石室はその壁体をすべて失っているものの、抜き取り穴によってその概要を知ることができる。短側壁はそれぞれ一石で、長側壁は3～4石で構成されているのであろう。石室の平面プランは基本的に長方形であるが、やや北側が広くつくられている。内法は長軸で1.10m、短軸で0.49mである。一辺20cmの平たい礫を用い、小円礫は用いていない。礫床床面のレベ

ルは標高74.9mである。主軸はN-34°-Wで、北側がやや幅広であることから、頭位は北向きと考えることができる。出土遺物はなかった。

上部構造が全く失われているが、基底石は板石を立てて用い、2段目以上を小口積みにする構造が想定できる。人骨は出土しなかったものの、法量などからみて再葬墓の性格が考えられる。年代は出土土器がなく明確にはしがたいが、性格からみてST1006・1007と同様の6世紀末～7世紀初頭と考えられる。



第92図 ST1004平・断面図

### 5号石室墓 (ST1005) (第93図)

#### 位置と現状

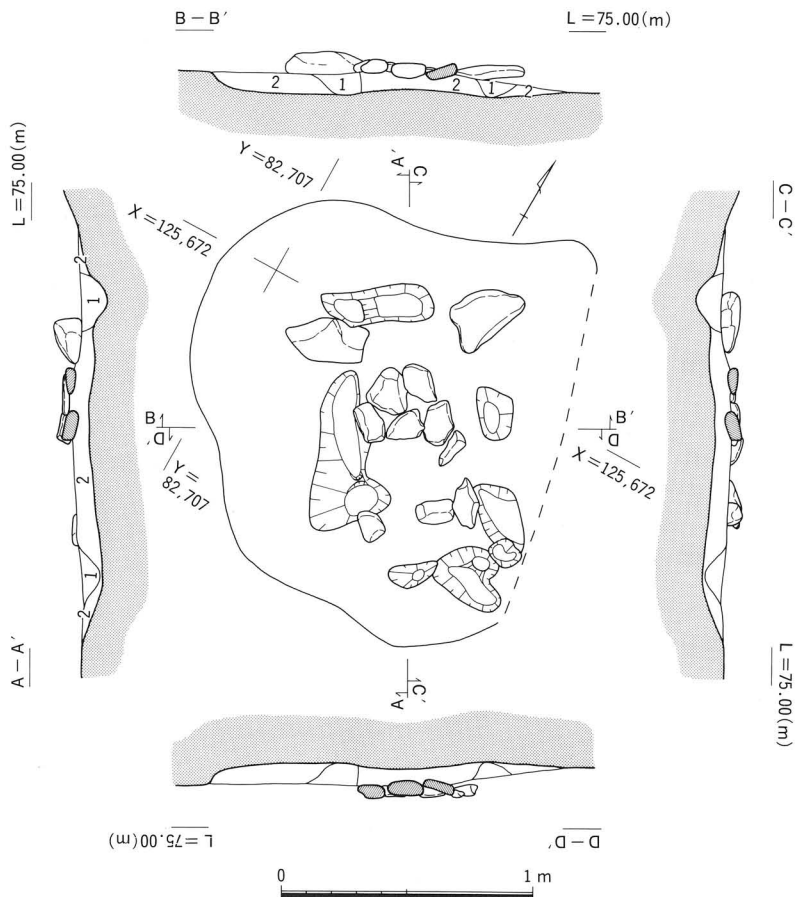
第12調査区中央部、AD-22

グリッドに位置する。石室墓群の中央部に位置する。包含層の掘り下げ中に礫床を検出した。6基で構成される石室墓群の中でも最も遺存状況が悪く、床面のプランに関して抜き取り穴の位置関係に負うところが大きい。上部の構造は削平によって失われているが、北側で出土した平たい礫2点は壁体を構成していたものと考えられる。

#### 墓壇の規模・形態

墓壇は東側の一部は失われているが、不整な長形状を呈しており、長軸1.82m、短軸1.60mを測る。縁辺は緩やかな傾斜をもつ掘り込みで、現状での深さ0.06mである。埋土は基盤層と似た色調・土質であり、墓壇掘削時の土を用いたみることができる。

石室の構築状況 遺存状況がきわめて悪いために、その概要はわずかに抜き取り穴によって知るのみである。平面プランは長方形で、内法の長軸は0.88m、短軸は0.49mを測る。主軸はN-63°-Wであるが、頭位方向は不明である。床面は一辺20cm未満の平たい礫によって形成されているが、隙間を補う小円礫については検出されず、用いられなかった可能性がある。礫床床面のレベルは標高74.9mである。北側の2点の礫は一辺30cmの自然礫で、現位置にある



第93図 ST1005平・断面図

る。年代は再葬墓としての性格から ST1006・1007と同様の 6 世紀末から 7 世紀初頭とみられる。

### 6号石室墓 (ST1006) (第94図)

#### 位置と現状

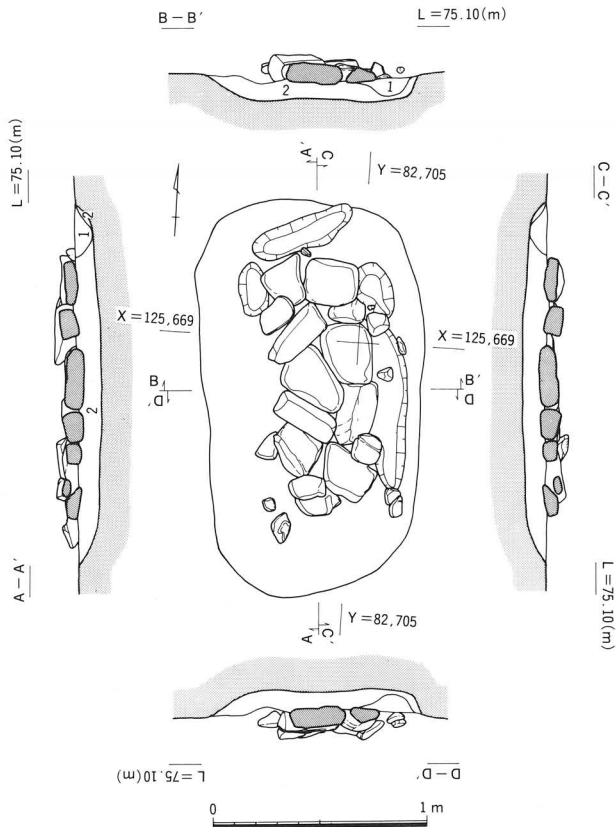
第12調査区中央部、AC-21・22グリッドに位置する。石室墓群の中央部にあたる。包含層の掘り下げに際して礫床が検出された。したがって、壁体・上部の構造はすでに削平によって完全に失われていた。

#### 墓壇の規模・形態

墓壇は隅丸の長方形を呈しており、長軸1.36m、短軸1.05mの規模をもつ。縁辺では緩やかな傾斜をもつ浅い掘り込みで、現状での深さは0.12mである。埋土は基盤層と類似しており、墓壇掘削時の土を用いているとみられる。

とすれば基底石ともみられるが、山田古墳Aの例などによると壁体に小口積みされたものが転落したとみた方がよい。抜き取り穴からは小口部の石材は北側では一石であるが、南側では複数の可能性がある。

削平が著しく全体の規模が明らかではなく、人骨などの遺物は出土はなかったものの、法量などからみて再葬墓としての位置づけが与えられる。



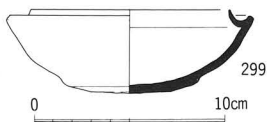
- 1 黄褐色2.5Y5/3砂質土
- 2 灰黄色2.5Y7/2砂質土

第94図 ST1006平・断面図

### 遺物の出土状況

遺物は床面上からではなく、北西部コーナーの抜き取り穴の埋土中より須恵器杯身片・甕体部片が出土した。したがって、本来の副葬位置ではないが、ST1006に伴うものとみてよいだろう。

### 出土遺物（第95図）



第95図 ST1006出土須恵器

須恵器の杯身299は破片となっているが、全形は明かである。口径が小さく、立ち上がりは短く上方へ反り上がるため、内面の屈曲は鋭い。底部は回転ヘラ切り後の調整が施されていない。田辺氏の編年におけるTK209型式に相当する。甕の破片は5cm四方の体部の中位のもので、外面は縦位の平行タキ後回転カキメ調整、内面は同心円当て具による調整である。外面にヘラ状工具による記号らしい線刻がある。

### 石室の構築状況

6号墓は壁体がすべて失われているために、抜き取り穴からその概要をみると、平面プランは長方形で、内法は長軸で1.24m、短軸0.55mを測る。主軸をN-4°-Wとしているが、頭位方向は不明である。床面は一辺30cmのやや大形の偏平な石をそれぞれの裾を接するように敷き並べる。これらの隙間をやや小形の石材で補っているが、小円礫はほとんど用いられていない。これは主となる石材によってほぼ平坦面が形成されたためとみることができる。礫床床面のレベルは標高74.95mである。小口部の石材は北側では一石で構成されているが、南側では不明である。